
man with the title of infinity and redo

超人類

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

iJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The tale of a man with the title of infinity and redo

【ZPDF】

N9469W

【作者名】

超人類

【あらすじ】

もし……死んでから元の世界に帰る為の条件が、全く違う場合のお話。

これは、「人生は矛盾しちゃなし」のi-fictionのつもりです。

一応主人公はチートですが、使用すればする程 B A D E N D 直行
まつしげら仕様です。

内容は、シリアルス3% 寒いギャグ97%仕様で行ってみたいと思
います。

タイトルを変更いたしました。

簡単な「」説明（前書き）

あくまで簡単な説明ですので、読んだ方が……いいのかな？

簡単な」説明

これは自分が、書いてるお粗末過ぎるお話、「人生は矛盾しつぱなし」のもじもの話です。

具体的な違い。

1・転生物

2・段々と主人公の思考回路が変態化する。

3・おもっくそ、原作介入する時もあれば、原作スルーをする時もある。

4・神だの相棒である霧生 零が一切出てこない。

5・話の都合上、元からチートの能力設定を更に、それこそクソみたいにチート化させる。

6・元々あつたかは不明だが、恋愛描写。

一応迷つてますが、今の所は無いで通しますが、作者の気分で変わります。

7・戦闘描写及びオリ主無双乱舞の大減少。
まあ、言つ程無双してた描写を書いてた……のかはわかりませんが、
戦闘描写は多分格段に減ります。（一応あるつもりです）

○共通する所

1・主人公の名前と容姿

2・家族構成（一部改変あり）

3・主人公の持つ能力。あれです、ザ・インフィニティ無脳戦です。

4・ハーレムだのなんだの一切無し。

（捌ける気がしない）

5・黙文

（永遠にです）

主な違いは以上ですが、もしかしたら途中で心変わりする可能性が
無きにしもあらずなので悪しからず。

尚、クオリティーの向上は絶望的ですが気が向いた時、目に入った時、究極に暇な時などに読み下さい。

以上

簡単な」説明（後書き）

次回から本編に入りますが、暫くは原作キャラとは関わる所が顔す
ら合わさない可能性があります。

0：私の名前はもぐ 霧生 零です（前書き）

まあ、オープニングですね。

くだりねえ始まり方は許して下さい。

○・私の名前はもぐ 霧生 零です

“やらずに後悔する”と『ああ、あの時告白しようと……』といつ、俗称“後悔する”の一種類がある。

ちなみに俺は前述にも後述にも当て嵌まらない微妙な位置にあるのだが、それはまた追々説明しよう。

「ズルズル……！」

ウム、このカップ麺は中々ギーしてだな、思い切つての『じ当地〇〇ラーメン』の唄い文句につられて、何時もより百円多く出した甲斐があるつてもんだが、いかんせん量が少ないのでネックだな。

「「」馳走様でした……！」

と、誰も居ないくたびれたアパートの一室に俺」と、霧生 零は住んでいる。

家族なんて者は居ない……いや、この世界にはいない、と言った方が正解か……。

何故、“この世界”等と表現するかといふと、それは約一週間程前に遡る必要があるのだが、その事はまた後で説明するとして、今は食後のブレイクタイムに移行しよう。

「ヤニーとライターは……あつたあつた

テーブルの上に無造作に置いてあつたタバコ、LUCKY STRIKEとANGELと刻み込まれたZIPPOライターを手前に引き寄せた後、タバコを口にくわえ、火を点けて吸う。紙巻きタバコ故なのか知らないが、巻いてある紙がチリチリと静かで淋しい部屋の中にある『お前が一人でも、俺が居るから安心せえや!』と励ますように静かに音を立てる。で、現在進行形で自分に酔つて格好付けているが、実際問題んな事は有り得ないし、本気で聞こえるとか言つてしまつた奴は診療内科に行く事をオススメする。

「フウ~」

口の中に含んだ煙りを吸い込み、肺の中に浸透させて吐き出す……こういった行為にリフレッシュ後悔を期待出来るのだから凄い。と、喫煙がいかに素晴らしいかを勝手にアピールしている訳だが、嫌煙家さんからしたらこの行為すら迷惑千万だろう。なんせ、自身がフィルターから吸う紫煙より、火を点けた先から出る副流煙の方が人体に影響が出る割合がデカイと、何処かのお偉い学者様が言つてくれたお陰で、俺達喫煙家の肩身が狭苦しくなつてしまつているのだから。

が、勝手に喫煙家を代表して物申させて頂くと、正直タバコから出でくる副流煙が人体に悪影響を及ぼすという理屈はまあ、事実だからしようがないとして、だ。
なら、戦時中や戦後とかにあつた放射線とかはどう説明するんだ?
こう俺は聞きたいね。

詳しく述べて貰うと、放射能とタバコの副流煙、果たしてどちらが危険なのか？ そう聞けば、余程のお馬鹿ちゃんじや無い限り、『放射能』と答えるだろつ。

そして、戦時に放射能を直でバンバン浴びて尚且つ、放射能たつぶり漬けの野菜やら魚やら食つてきた戦時・戦後時代の方々が『今も現役バリバリじやい！』と言わんばかりの元気っぷりで俺と将棋やら囲碁やら麻雀を嗜んだりするのだが、まさしく『これいかに？』だ。

また、当時の方達いわく、戦時の空氣の悪さからしたら、紫煙等屁でもねえし、モクモク吸いまくつてた喫煙歴何十年の方が、非・喫煙家の方達より長生きしたつてのもまた事実だ。

結局の所、何が言いたいのかと言えば、確かにタバコを吸つても良い事はねえさ、だからと黙つてそこまで毛嫌いされてもねえ？ こう言いたい訳だ。

まあ、向こうからしたら健康に悪いだけじゃなくて、マナーが悪いだと反論してくるだろつが、だつたらアンタ等はゴミをポイ捨てた事ねえか？ 車やバイクの排気ガスも健康に良いとは思え無くね？ つーか俺達人間が居る時点で母なる大地である地球様が危険なんすけど？ とまあ、何十年もの間に喫煙家と嫌煙家の不毛な争いが続いているのだ。

「フウ……」

フィルターまで火種が行き渡つた所で灰皿で揉み消す。

喫煙家と嫌煙家の不毛な争いの歴史話して、本来の話題から右斜め45。くらい話しが逸れたので修正する。

何故俺が『この世界』と心の中で誰に対しても分からぬ説明をしていた訳……それは、今から調度一週間前に遡つてしまふのだが……。

続
<

0：私の名前はもぐ　霧生　零です（後書き）

次回は何故零が、異なる世界に飛ばされたのか、が話しの内容ですが、まあ、良くあるパターンですね。

1：てんぷら（チキンフレー）？ ストリップ（トロッパー）？ ……ええつるいんじ

この主人公は物事をすぐに信じ、尚且つすぐに諦める癖があります。

一週間前、自分の家の居間で飯を食いながらも、俺は珍しくやる気
に満ちていた。

「…………？」

ブツブツと端からみたら不審者全開の俺を、何も知らない様子で見てくる女性一人。

女性の姿は、はつと見自分と同年代の姿、
身内顔面差し引いても余裕で美人に入る容姿……なのだが。

「フッ……何でも無事……燃つやん」

目の前に居る人物に無駄にカツコつけながら言うが、全く動じてない事から中々のショックを……いや、只の自爆なのだが。

「今日のれーくんは変だね」

「アハハ」

呑気な声色で話す婆ちゃんに、『行くな……』

まだ機ではない……』と理性と言ひ名の獸が叫びまくつてゐる。この人は、俺の祖母……といつても血は繋がつて無く、自身の本当の両親は今何処で何をしているのかは知らない、といつて興味が全くない。

婆ちゃんの姿は、何かしらの力が働いてるお陰とかで、見事なまでの若々しさを誇り、俺も何かしらの力を持つてるが、その話しさはまた後でにしよう。

「『』馳走様でした……。婆ちゃん、行つてくる」

「ん、いつてさらっしゃい、今日は遅くなるとかあるの？」

「愚問だね、俺が遅くなるまで家に帰らないなんて話あつたかい？」

「……そつだつたね。全く、健全な男子高校生がそんな事じや駄目じゃないか？」

と、表情の変化はさほど無いが、若干声の質が違う所、ダチと全く遊ばない俺を心配しているらしい。

別にダチがいない訳では無いし、遊びにもしそつちゅう誘われているのだが、俺としてはんな事よりさつと家に帰つて、『婆ちゃん成分』を摂取しなければ、干からびてミイラと化してしまつ。まあ、

そんなどからダチと遊ぶ暇等無なのだ。

「俺の中では、健全な男子高校生より、婆ちゃんが優先順位に入ってるからね……最近の遊びは、やたら金も掛かるし」

一回遊びに行く事に、諭吉の兄さんとか野口の兄さんが俺の財布から名残惜しそうに出て行つてしまつから、俺としては遊びになんて行く必要性を感じなこのや。

「ふ～ん？ まあ、良いつて言つてならこれ以上何も言わないけど
や」

「まあ、やつこいつ事だから。じゃあね……つてやつを言つたような
？」

「言つてたけど、一回言つてはいけない決まりなんて無いし、良
いじやない？ てな訳でいつてらっしゃい」

家を出る時は、軽くハグをしてから出るところのが、我が家の中か
らの決まりで、この行為も早十二年近くにもなるので、決してやま
しい事等考えてない。

一度言つが、やましい事等考えてないからな。

『キーンコーンカーンコーン』

あつという間に、授業が終了し放課後。周囲の人間は、『これから部活だ』『だの『遊び行くぜえ！』だの騒いでいる中、俺は先程説明した通り、さつさと帰る。遊びに誘われても断つてる俺も一応は誘われたが、当たり障りの無い様にお断りさせて頂いた。

なんせ今日は、ある意味で俺にとっちゃあ“特別な日”なんだからな。

「」

辺りが暗くなつてくる中、携帯を弄りながらの下校。それが何時もの日課なのだが、今日は何時もと何か違う、ていうか俺以外に人様がいない。

「……？」

良くは分からぬが、一つだけ認識出来た事……“恐怖”だ。
辺りが暗く、更に人がいねえというのは恐怖を助長するのに十分過ぎるのに加え、何故か霧まで出て来てた。

「えつ？ えつ！？ 何これマジ？」

元々オカルトな類は苦手だと自覚があるだけに、今の状況は極めて危険だと判断、だから走る、この嫌がらせに似た状況から脱出する為に。

「ゼエツ……！ ゼエツ！」

軽く30分位は全力疾走したのが良かつたのか、気が付けば霧だらけみたいな空間から脱出できた、のは良いが。

「此処は……何処やねん？」

別に関西人では無いのに、関西弁での独り言も仕方ないと、自分で言い訳がましいと思うが、だつていつの間にか知らない山中みたいな場所に行き着いてしまったんだよ？

「い、いやいやいやいや。待てって俺、確か真っ直ぐ走ったよな？」

来た道を見る範囲内で観察するが、全くと言つていい程に知らない山道だった。

「んな馬鹿な……」と口には出しつつ、内心不安だらけの中、元来た道を歩いて山を下りて街中に進む……すると。

「な、な、なな……」

田の前に広がる街並みに俺は只驚愕する。
何一つ俺の記憶と合致しないのだ。
そして思わず頭を抑えながら……。

「なんじや」じりやああああ……

と、周囲の人田を気にせずに有名俳優さんの有名な名言を叫んでしまつのだつた。

「……」

あれから約三時間後、自分で出来る限りの情報収集を終えた俺は、取り合えず今居る状況の整理の為、聞いた事も無い名前のファミレ

スに居た。

「……」

まず、第一に知ったのは、此処はぢりやぢり俺の居た世界とやうとほ似てる様で全く違う世界だという事……という説明が明記されている手帳を、もう何回目になるか分からなくなる位に読み返していた。もつと簡略化すると。

1・平行世界に飛ばされた。

2・何故か俺の服装が普段着。

3・帰りたかつたら手帳に書いてある条件のみ。

4・それまでの生活等は一番始めのみ力を貸すのみで、それ以降はこぢり関与は一切せず。

1については、もう認める他無かつた。

近くにあつた交番に行き、カツプ麺を食いつつ、いかがわしい本を読んでた青の国会権力さんに元に住んでいた世界の街を聞いたら、「何言つてんだこいつ?」みたいな顔された揚句に「無い」と一言で終了した。

俺としては、カツプ麺食いながら工口本読んでる田の前の国家権力

振りかざし野郎の顔面を、原形が解らなくなる程にボツコボコにしてやりたい衝動に駆られたが、そんな事した瞬間に「はいお縄」 と逮捕されてしまうので我慢した。

2については、言った通りの意味で、何故か俺の服装が元の世界にいた時に着ていた学校指定の制服じゃ無くて、私服だった。それも、一番安い服という、俺に恨みでもあんのかと言いたくなる位だ。

3については、少し救われた気がした。
なんせ帰れる可能性があつたのだからな。
詳しい説明は最後にする。

4は、書いてる通りで、最初の自分で住む家と資金、身分証明その他、最低生活に必要な物が俺の持つてた鞄の中に詰め込まれてあり、それ以降、この手帳の作者は関与してこないらしいのだ。

「フウシ

タバコを吸いつつ、今の状況を一通り整理した所で、最後の項目『何故俺がこの世界に飛ばされた』のか、だ。

「暇つぶしつて……」

手帳に書いてある項目を読むたんびに怒りのあまり、声がボソリと
出でてしまつ。

最後の項目ついてだ。

君の能力について、と説明書きに載つてた時はマジでビビッたが、
この手帳の作者が…………言いづらいのだが、神様らしいのだ。
無論、最初は「ふざける、バツキヤロイ！」と手帳を地面に叩き
付けたのは記憶に新しい。

だが手帳を読むにつれて、段々信じる他無いような気がして来たの
だ。

てのも、婆ちゃんと爺ちゃんならまだしも、何故この作者が俺の能
力を知つてゐるのか？ 手帳の筆跡からしても、爺ちゃんと婆ちゃん
の筆跡と一致しないから除外となると……居ないのだ、他に俺の能
力を知つてゐる人間が。

「グビグビ」

メロンソーダを飲みながら、もう一度頭の中で整理をする。

この手帳の作者が、神様（仮）だとするにして次は、元の世界に帰
る条件の整理だ。

……「ここは何でも漫画か何かの世界らしく、俺が帰る為の条件は『
その世界の原作ストーリーが終了する前に君が死ぬ事が出来たら、
君の勝ちとし、元の世界に帰る事が出来るが、死ぬ事が出来なかつ
たら永遠に君はその世界で生きる事になる』らしい。

正直「んだよ、簡単じゃねーか」思い早速中々のスピードを出して
あつた大型のダンプの前に飛び出し、自殺願望全開で自分から跳ね
られてみたのだが……あら不思議、クソみたいな痛みと跳ねられた
時の浮遊感来るだけで、死ぬ気配が全くしなかつた。

それ処か、跳ねられた際に出来た傷や骨折が、瞬く間に修復してい

つたのだ。

こればかりは、齢18歳にして一番驚かされた、確かに俺は普通に人には無い力が備わっちゃいるが、それはあくまで“他人様の力を吸收”するだけで、こんな化け物じみた回復力なんか持つて無かつたんだから。

ダンプに跳ねられて死ね無いと判った瞬間、即刻その場から立ち去り、ファミレスへと避難した。そう、これが第5の項目“能力強化と帰還方法”だ。

どうやら俺の能力は、この神様（仮）によつてとてもなく強大な力にしてくれたらしいな。

主に言うと……俺はそう簡単には死ねない身体になつたらしく、いわく『例え肉体を消し炭にされようが、バラバラにされようが、宇宙空間に放り込まれようが、遺伝子レベルから消し去られようがetc……とにかく一瞬で元に戻る』らしく、あらう事がそれプラス不老不死などと、手帳に書いてある。

この項目を見た時俺は思った……「あれ？ 将棋で言う所の詰みじやないですか？」と、一瞬思つたが、俺はこう考えてみた“致命傷レベルの攻撃を絶えず受けまくる”そうすれば、何時かは死ぬんじやね？ と。

まあ、この世界がどんな世界か知らないし、惑星破壊レベルの力を持つた人間が居るとは到底思え無いが、何時か現れる事を願つて手帳に明記されてアソビト兼、家に向かうのだった。

その際、家の様子を見た時に、抑えてた怒りが爆発したのは言つまでもないだろう。

続く

次回は時系列が発覚します。

主人公の設定もどう（前書き）

まあ、よくあるパターンっスね。

主人公の設定もどき

名前：霧生 零

年齢：18（現 14相当）

身長：183?（現 175?）

血液型：Rh - AB型

利き腕：左

神とか唄つてる存在によって、いつの間にか別世界に飛ばされてしまった青年。

本人は始めの方は、軽く信じちゃいなかつたのだが、元居た世界との違いが次々と発覚したために、早い段階で認める。

原作ストーリーが終わる前に死ねば元の世界に帰れる、そうでなければ永遠に死ぬこと無く飛ばされた世界に閉じ込められてしまう、といった、罰ゲームみたい嫌がらせを無理矢理執行させらる。その為、日夜死ぬ方法を模索しているが、神とやらに勝手に実装されたチートボディのお陰で、そう簡単に死ねない体质になつてしまひ。

性格は、周囲に流されやすく、それに加えて死ぬ事ばかり考えている為、時たま不気味がられる。
要は変態に近い思考回路。

好みの女性のタイプは“年上のお姉さんタイプ”で年下とか口利系に全くと言って良い程反応を示さない。

容姿は普通にイケメンで、モテそうに見えるのだが、前述の好みのタイプ、性格が災いしてなのか余りモテてない。

能力1

突然変異・無脳藏
ミコータンテ ゼロ・インフィニティ

主人公が元々持つ能力。能力名を一部変更しましたが、効果は変わりありませんので、詳しくは「人生は矛盾しつぱなし」の主人公設定をご覧ください。

その2

再臨
リターン

全てをあるべき状態に戻す力。

主人公のチートボディの原理にて、別の能力からの干渉が一切不可能で、常時発動に加えコントロール不可。

この能力が常時発動しているお陰で、主人公がいくら致命傷を負おうが、遺伝子レベルで消され様が、人間が知りえる理屈を通りこして再臨される。

この力の発動条件は、主人公が怪我を負つたり、死にかけると、主人公の意思とは関係無く発動するので、主人公が怪我を負わない時は発動はしないが、この能力のお陰で不老不死の不死身人間にされてしまう。

2:「か」の世界の女（タレ）ってレベル高いな（前書き）

短いです。

2・つーかこの世界の女（タレ）ってレベル高いな

神とやらから状況を教えて貰い早8日……。

「ほり、ついたぞ！ 降りる」

「……ハア」

俺は拉致られたのだ、中学校の進路相談員に。

「何時までもため息なんかついてねえで、さつさと教室に向かいやがれや……」

「イダツ！ わ、解りましたよ……つー」

進路相談員からして見たら、学校に行きたくねえオーラをバシバシ出しまくってる俺のケツを蹴りまくり、無理矢理学校へと強制送還させたのだ。全く、今の時代にそんな事をすれば、モンスターナンチャラと呼ばれる親からバンバンクレームが来ると言うのに、それを知つてか知らずか、この目の前に居る進路相談員は「でもそんなの関係ねえ！」と言わんばかりであれよあれよと俺を名もしらねえ中学校に引っ張つていったのだ。

「じゃあ！ 何かあつたら俺んとこに来て良いからな。頑張つて頂
点ヘンとつてこやー。」

そんな進路相談員に後押しされ、何のだよ……とシックリを心の中で入れながら言われた通りに教室へと向かうのだった。

「……ハア」

処で、何故俺が中学生をやつてると、何故かこの世界での俺の立ち位置は14歳の中学生で、この世界の物語が始まる三年前からのスタートらしいのだ。

ちなみに物語のタイトルは“めだかボックス”という名で、正直内容は知らない。ジャンプに載つてたとか手帳に書いてあつたのを見て、ジャンプを読んでる筈の俺が知らないのが引っ掛かるが、今となつてはどうでもいい、とにかく一刻も早い内に死んで家に帰つて婆ちゃん成分を補給しなければ、生き地獄をリアルに体験コース直行だ。

まあ、今の所は向こう三ヶ月は大丈夫なんだが。

「オット……此処が俺が名簿だけに入つてるクラスの教室か」

これから先、また中坊をやり直さなければならんと思つと、不思議とテンションが下がつてしまつ……。

「あ?」

「……」

下がつたテンションの状態で、教室に入ろうと扉に手を掛けるか掛けないかの時に事件は起きた。なんつーか一言でいうと、『テンジヤラスな人が居た。

うん、背は……今の俺よりちょっと高い程度で、金髪ロングの憎い程のイケメン。

そして肩に担いでるのは……折れにくくようく短く切った鉄パイプ……。

「フツ……古い番長気取りってか?」

「……」

鼻で笑いながらの一言が原因かはたまた、目の前に居たのがうざかったのかは定かでは無いが、肩に担ぐ感じで持つてた鉄パイプで顔面9発、頭頂部11発、計20発殴れた。うん、それはそれは清々しい位にぶつ叩かれたよ、だけどこの程度じゃあ死なない……てか死ねない。

出来れば後5億発位同じパワー、同じスピードで殴ってくれたら死

ねた可能性があったのに、地面に突つ伏した俺に満足したのか、さつさと帰つていつた。

てかよ……何だこの学校は、人が殴られて倒れてるつてのに周りはシカトですかい？ 薄情にも程があるつてもんだよ。

「イテテ……」

頭から血がダラダラ流れてる。

俺は一応、死にはしないが、痛いという感覚はあるので頭を摩りながら、教室に居る連中に文句の一言でもいつてやろうと中に入ると、教室の真ん中に人の円が出来てた。最初は、宇宙人かなんかを信じてしまつてる別の意味で怖い集団が、宇宙人とやらを呼び出す儀式でもしてるのかと思つてたら、どうやら違うらしい、皆の顔が青ざめているのだ。

不思議に思つた俺は、円の中心を一般的な中学生より若干背が高いのを利用して覗くと、一人の女の子が俺と同じ様に頭からダラダラと血を流して倒れてるのだ。

「成る程な……」

誰も聞いてないと思う一言が俺の口から飛び出す、どうやら彼女は俺よりチョイト前にさつきの金髪ロング君の生贊か何かにされた様だ。

だから、俺が殴られた時はスルーされたつて訳なのね。

「つてオイ！　君も頭から血が……！」

一人の男子君が俺のリアル血達磨人間状態に気付き、叫ぶと倒れる
る女の子から俺に一斉に視線が向く。気が付くのが遅いぜ、よつち
やんよ……と最初に気付いてくれた男子、仮名“よつちゃん”に心
の中でツッコミを入れると、このリアル殺人未遂現場に耐えられ
なかつた者達が、次々と氣絶していく。

当然、授業処では無く中止。

俺は保健室に強制連行されかけたが、既に傷口が塞がつてゐる為断り
(その際に、大半の名も知らぬクラスメイトに変な目で見られた)
その前に女の子の方が大変そうだったので、意識を女の子の方に持
つてくる事に上手く成功させたのと同時に、このクラスの女の子つ
て結構レベル高いなあ……と血だらけの顔をしながら、不謹慎な事
を思う。まあ、全員俺の好みの対象外ですがね。

続く

2：つーかこの世界の女（タレ）ってレベル高いな（後書き）

中学生時代の話しへ飛び飛びで進みます。

3：「世の中を上手く渡る方法は、思つた事をストレートに言わずに、オフラー

」のお話の主人公は、結構人を突き放す言動が多いです

3：「世の中を上手く渡る方法は、思つた事をストレートに言わずに、オフラー

あの、会つた瞬間に血達磨にされてしまった事件から早、何ヶ月か過ぎた。

「フ～」

その何ヶ月かの間に、校内で人気の無い場所を調査した場所に俺はタバコを吸いながら、ボケーツと黄昏れていた。

一応この数ヶ月の間は、色々な死に方を試してみたが、イマイチ効果的なのは無かつた。

具体的に言つと、自分で刃物を身体中（男の勲章以外にだが）に刺しまくつて失血死を狙つてみたのだが、死ねず。

ある時は、狭い部屋に一酸化炭素を充满させて安楽死も試してみたが、逆に良い睡眠薬がわりになつてしまい効果無し。

またある時は、首吊り自殺を試すが、気を失つだけに留まり、これまた効果無し。そしてこけ最近は、阿久根君（一応設定的には先輩）を挑発して撲殺死を望んでみたのだが、「殺してくれ」と言つたのかがまずかつたのか、気味悪がられて逆に近付きもしなくなつてしまつた。

しかも何時の間にか、俺が最初に見た時に血達磨にされていて、しかもそれ以降、ほぼ毎日の様にタコ殴りにされて居た黒神めだかさんとやらが、何をしてくれたのか知らないが、阿久根君を改心させてしまつたお陰で、この学校に居る間は恐らく、俺は死ね無くなつたのだ。

そう……唯一“肉体的な暴力”という名の爆弾を解体してくれたのだ、黒神さんとやらは。

全く、余計な事をしてくれるよ。

「フウ~」

まあしかし、たかが中坊如きが本氣で人を殺れる訳も無いのも事実だし、これはこれで良かつたのかもな。改心させられた本人も満更でもなさそつだつたし? それに、次の目星が無い訳でも無い。

あの現・生徒会長である球磨川君とやらは、「こく近い将来何か強大な能力を手に入れてくれそうだしな? なにせ、あの生徒会の副会長さんはアレだもんな。

「おやおや~、こんな所に校則違反者がいるぞ~。」

「と……噂をすれば何とやらだな、と思いながら声がした方向へと首を傾ける。

「まだ授業は始まつてないんですけどね……」

「そんな事は分かつてゐるよ。僕が言いたいのは、君が口ごくわえてる物のことや。」

ああ、タバコね。

ハイハイ解りましたよ、消せば良いんでしょう、消せば、と悪態をつきながら携帯灰皿で揉み消す。

「ほら、これで良いですか？ 安心院先輩？」

キー・ホルダー・タイプの携帯灰皿を目の前にいる人物……安心院さんに見せ付けながら言うと、本人は「それで良い」と言わんばかりの顔をしながら頷く。

タバコ位、自由に吸わせてくれたっていいのにや……と思っていると、昼休み終了のチャイムが鳴り響く。

フト見ると、校庭で遊んでいた何人かの生徒が、校舎の中に入るのが見える。

だが俺は、午後の授業もサボる気満々な為動かない。

「僕の事は親しみを込めて、あんしんいん安心院さんと呼んでくれたまえ……と再三に渡つて言つて来たのに、まだ言つづもりが無いみたいだね……」

…

「別に貴女と親しくなつたつもりは無いですし、これがあるとは思え無いんでね、悪いがお断りさせて頂きますよ……ファーア」

欠伸混じりに、ハッキリと拒絶の意を伝えた後、その場にねつこりがる。荷物は教室だし、このまま良い感じに口が当たるこの場所でお昼寝と洒落込む腹積もりだ。

放課後辺りに、真面目さんな黒神さんに絡まれるがね。

「……あ？ 何だあ、ま～だいたんですか？ 安心院先輩、授業始まつまつせ～」

「君もだろ？」

「良いんですよ俺は、中学生なんて義務教育なんだから、単位なんてねえし……てな訳お休み～」

シッシツと、追い払うよつた仕種をしつつ本当は知つてる癖に、業と煽る様にして言つ。 てか寝たいから早く消えて欲しい、ハツキリ言つて……邪魔だ。

「君は……」

「あん？」

「君はどうして何時も僕を邪魔にするのかな、僕に恨みでもあるの？」

軽く瞼を閉じつつ安心院さんの話を聞く。
邪険、ねえ。

「何時も、と言つほど貴女に会つてた気がし無いんですがね」

「そうだったかな？ 確か今日を入れて25回は顔を合わせてるんだけど」

「なに？ そんなに会つてたんすか？ なら今度からはお互い、0回をを目指しちう」

くだらねえ事言つてないでとつとと消えて欲しい、別にアンタに恨みなんか無いが、アンタの顔ヅラを見てると、逢いたくて仕方が無い女性が頭の中に浮かんでしまう……。

だからこれ以上、俺に関わらないで欲しい、と流石に声には出さないが、思つてしまつ。

「……」

「……」

何時もなら、此処から妙な言い回しで俺を更にイラ付かせるのだが、今日は妙に大人しなと思うのと同時に、逆に何も言つてこないで俺を見下ろしている人物に腹が立つて来る。

「……チツ」

思わず舌打ちをしながら、これ以上この空間に居ると苛々した感情が爆発するので、直ぐに別の場所へと移動して、そこで昼寝の再開をしようと思ひ、仰向けに横たわつてた状態から重い身体を起こして、第一の安住の地へと足を運ぶ。

「……」

「……」

歩く……。

「……」

「……」

止まる、後ろを見る。
何か居る。

「……」

歩く……。

「……

「……

「……

止まる、そして後ろを見る。
何か居る。

「……何ですか？」

いい加減鬱陶しいので、一定の距離を保ちながら歩いてくる安心院
さんに怒りを抑えながら聞く。

「別に……君と同じ方向に用があるだけさ」

「……

ほほう？ なう。

「そうでつか、なら俺は気が変わったんで、元の場所に戻つて寝ますから……安心院先輩はこの先にある用事とやらを頑張つてくださいね」

と、恐らく自分で見ても、小憎たらしく笑みを浮かべながら、心にも無い事をすれ違い様に言い、元居た昼寝場所に向かいお昼寝モードに移行する。

流石の安心院さんも、それ以降はついてこなかつた。
ちなみに何時もの俺なら、あそこまで人を邪険にしないつもりだし、ましてや人嫌いじやない、それ相応の理由がある。

あの安心院さんの顔は似過ぎ……いや全く同じなのだ、婆ちゃんに。いや、婆ちゃんの方が安らぎオーラがてるから、一概には同じとは言え無いし、そもそもの人と婆ちゃんを一緒にするつもりは無い。

そりやあ、最初に見た時は本氣でびっくりはしたが。
だけど、安心院さんを見るたんび、俺の胸は苦しくなる……万が一いや億が一にでも、二度と婆ちゃんに逢え無くなるかもしけない不安感……。

だからあの人とだけは、必要以上に親しくするつもりは無い。
でないと、取り込まれてしまつ、あの人……安心院さんに。

「畜生……」

気晴らしのタバコも味がまづく感じ、午後だつた。

そして更に数ヶ月後。球磨川君が何かしらをした影響か、安心院さん
が…一部の人間以外の者の記憶から消えた。

続く

3：「世の中を上手く渡る方法は、思つた事をストレートに言わずに、オフラー

次回……又はその次辺りから、原作に入ります。

4：「学校と外國についてつぶさなところあるの違こと回つ……じゃねえか」

どなたが知りませぬが、このお粗末小説を評価して頂き、ありがとうございます。

これがも地味に頑張りたいと思います。

それで、今回で中学生時代は終了します。

4：「学校と外圍って……つぶあんといじあんの違こと回つ……じゃねえか」

あれよあれよと一年の時が過ぎ、季節は出合こと別れの春。無事に中学を卒業してしまった俺は、もう向に對しても嫌になつてきてた。

「……ハア」

この一年もの間、何があつた訳も無く、結局死ぬ事が出来ずにズルズルとそしてグダグダとこの世界で生きて来た。

死ぬ為に様々な策を張り巡らし、ある時はヤの付く人が經營する違法賭博会場に出向いてわざと馬鹿勝ちをし、ヤのつく人のイチャモンにわざと反抗、そしてドラム缶コンク詰めにされて、東京湾沈められたりしても死ねず、スカイダイビングをやつた時は、パラシユートを開かずに上空一万メートル転落死を試みてもやっぱり死ねない。まあ、そんなこんなで、二年が過ぎたつて訳だ……。

「ハア……」

そして今では、日に二回はため息をつくのが日課になつてしまつた。ちなみに、当の昔に婆ちゃん成分が切れたのだが、どうも俺の思考回路が“どうしたら死ねる”とか“どう挑発したら殺してくれる”で頭が一杯で婆ちゃん成分が無くとも生きられる状態なのだが。

「逢いたいな……」

一年という決して長くは歳月……それでも逢いたい気持ちは変わらない……いや、以前よりも逢いたい気持ちが強くなってる。
そう……自身の能力の様に。

「……」

自分の掌を見ながら、一年前の時の能力を思い出す。

今日で分かった事だが、俺の能力は一年周期で増大していつてる。

始めての一年は、気が付か無かつたのだが、今日この瞬間、俺の中に存在する二つの能力……婆ちゃんから名を貰つた能力、無賢^{ゼロ・インフィニティ}と奴^{リセント}が勝手に俺の中に容れできやがつた再臨^{リセント}の力が増大して行くのが解る。

「早く死なないと……もう時間が無い」

あの手帳に明記されてるのが本當なら、タイムリミットは後三年、俺がこの世界に飛ばされる前の年齢になつた瞬間に……俺は奴の暇つぶしの勝負とやらに負ける。

何故なら俺が18歳になつた時、一年周期の力の増大とは比べ物になら無い位に能力^{チカラ}が肥大化する。原作ストーリーが終了するとか關係無い、認めたくもねえが、その時点で俺は完全に不死の生物になつちまうらしいのだ、そうなれば誰にも彼にも俺を殺す事が出来ず、自ら死ぬ事も出来ない。

それだけは……。

「絶対に……死んでやるーー！」

端から見れば、危ない人みたいな発言をしてるのだが、生憎自分の部屋なのでその様な心配は皆無だ……それはそれで寂しいもんなんだが。

その夜……。

「明日からまた、高校生、か」

高校の“箱庭学園入学案内”と有りがちな文字がタイトルになつてる資料を読みながら、また面倒な学生生活を送るのかねえ、と肉体年齢と精神年齢のギャップを感じながら缶ビールを片手に柿ピーをポリポリと食つ。

何故中坊の頃にサボりまくつてた俺が高校に行く嵌めになつたのかというと、あの進路相談員が余計な気を利かせてくれたお陰だ。勿論最初は断つたが、進路相談員いわく、中々の身体能力を持つ者達がいたり、喧嘩が強そうな所謂“猛者”と呼ばれる奴らが「口」口といふと叫びうるので興味本位で願書を出したのだが、次の日になつて、合格通知書が我が家ポストに何故か投函されていた。

（数ヶ月前）

意味が解らない状態で、進路相談員にその事を説明すると「よくやつたな……」と怪しむそぶりすら見せずに、暑苦しそ抱擁をして來た。

これが女……しかも年上のお姉ちゃんとかだったらどれだけ良かつた事か……と思いつつ、目の前にいる進路相談員は、もしかしたら真性の馬鹿なのかもしれない……と一人考えたのは記憶に新しい。しかも……。

「よしひー お祝いだ、学園の制服やらその他必要な物を買ってやらあーーー！」

「はあー？ いや、良いからーーー！」

この二年で、一番絡む割合が多かつたのが、この進路相談員だつたのだが、流石にそこまでして貰う義理は無いので断つた。だが、この強引な進路相談員は、全く聞く耳持たず、学校に必要な物全てを買い揃えてくれたのだ。

「よし、これでお前は、気兼ね無く箱庭学園で頂点テッペンとつてこいやつ

！」

「いやだから、何のだよ……」

人の話を聞かない人だと、三年もの間に分かってた事で、半ば諦めながら聞くしか無く、結局、箱庭学園に行かなければいけなくなってしまったのだ。

（回想終了）

「グビッグビッ……ふつはあ！ まあ、暫くは学校に行って、俺を殺せる相手が居るかどうか捜す事にするかなあ」

4本目のビールが飲み終わり、明日の入学式に出る事を、取り合えず決めてさっさと寝る事にした。

（しかし……未だに不思議だな。何で俺が合格？ あれだけ中坊やつてた時はわざと悪い事してた気がしたんだかな）

布団を被り、天井を眺めながらあの学園の事を考える。

授業には殆ど出ず、学校は直ぐ抜け出しサボり、そのままパチンコ店直行等々……逆に素行が悪いのが目だったのだろうか？ と今更考えた所で遅すぎるのだがな。

「まあ明日は、ほんのちょっとびり楽しみだな」

あの進路相談員が言うんだから、良い奴の一人や二人居るだろ？
いなかつたら……うん、その時考えよ。

続く

4：「学校と学園って……つぶあんといつあんの違いと回つ……じゃねえか」

主人公は原作を知らないので、自身の利益になる為なら一きなり突撃をかます事があるかもしれません。

設定2（前書き）

タイトル通りその2です。

設定2

名前：霧生 零

年齢：16歳（本来の年齢は18）

身長：180?（後に3?程伸びる）

血液型：Rh - AB型

容姿：ジュエルペットに登場するキャラ、アンディ王子と全く一緒
(知らない方はは画像検索でもして下さい)

結局何だかんだで、この世界で二年程生きて少し成長した青年。
本人はさっさと死にたいのだが、チートボディのお陰で死ね無い、
そして殺されないので全体の三割程、諦めモードに入ってるが“婆
ちゃんに逢いたい”を行動原理に頑張ってる。

性格は死ぬ為には他者を平氣で利用し、その者に利用価値が消えた
瞬間表には出さないがその者に対し、切の興味を示さなくなる。
それ以外は、「健全な死にたがりの学生」と自称している。

ちなみに中学校時代によく絡んだ“先生”的お陰でキャラ男予備軍となつていて、本人も一応の自覚がある。

そして相変わらずモテない とまでは行かなくなつたのだが、

性格や素行に一癖、二癖もある人間からは妙にモテる。

能力 1

突然変異者

ゼロ・インフィニティ
無脳

他者の能力をコピー又は取り込み、自身の尺度で永続的に昇華させる能力。（能力を取り込まれた者は能力を永久に使え無くなる）

1年周期で能力が強くなつていつてる。

一年目は、相手の使う異常・過負荷を見れば即自分の物と出来る様になつた。

二年目は、永続進化のコントロール。

二年目は、5?以内ならワイヤレスで相手の能力を奪い取る事が可能となつた。

能力2

再臨リザイバ

主人公のチートボディの原理にてコントロール不可能。
こちらも1年周期で能力が強くなつていつてる。

一年目はリセットをせるまでの時間の微妙なコントロール。

二年目は他者にある程度干渉させる事が可能に。

三年目は他者に干渉する際に30?以内ならワイヤレスで能力を干渉させる事が可能になつた。

設定2（後書き）

次回から原作入ります。

5：「入学式？ ああ、つまんねーからサボるよ?」（前書き）

主人公は別に不良じゃありません。

単に面倒臭さがりなだけです。

5：「入学式？ ああ、つまんねーからサボるよ？」

花粉症の季節の春。

願書を提出しに行つた時から感じた学園の「力さに平常運行まつしぐらのテンションで学園の門をくぐつた。

（右を見ても、左を見ても知らん顔ばつか……）

学園の広さと周囲の人の多さに、早くも帰りたくなつたが、中学の時の進路相談員のメンツの為にも今日位は一応行つてやらないといけない気がしたので来たのだが……。

（ダルウ……）

クラス訳も程なくして終わり、俺が通う事になつた一年一組の教室に入り、時間までの自由時間が暇で仕方ない。なんせ、知り合いのしの字も居ないので。

（ああ、帰りてえ帰りてえ帰りてえ帰りてえ帰りてえ）

脳内でずっとBGMのように帰りてえが「ホール流れる。つーかさつきから周りの餓鬼共が、俺を見ながらヒソヒソと話してやがるのが鬱陶しい、俺は見世物でもましてや食い倒れ人形でも無

い。

（我慢しろ……此処でブチ切れてこのガキ共をぶちのめしたら、それこそ俺の計画がパアだ）

此処は、古今東西昔からある机に突っ伏して睡眠學習モードが一番だと思い、お眠りに入るが。

「ねーねー！」

「…………」

誰だか知らないが、俺の背中をチヨンチヨンと突きながら呼ぶ。対して俺は、古今東西である“シカト”を発動中。

「ねーねーってばー！」

「…………」

我慢しろ、キレるな俺。

「オーライ寝てるの？ 寝てたら返事してよー」

「だあああーー！ るつせえぞ『アリヤーー！ーー！』」

俺の制服を引っ張りながら起こしに来やがつて……決まりだ、ブッ殺す、と並々ならぬ決意の下、目の前にいたチビなクソガキを睨む。

「オウー・ワーン、よくもワシを起しつてくれたのーーー！」

人に聞けば100%ヤー公の口調ですと言わんばかりの形相と口調で、目の前のアホ毛チビ餓鬼（見た目判断）の頭を片手で掴み、自分目線まで持ち上げる。

「周りが一いつ緒しよに殺される」とか「このほんのいい男」等と並んでるか知らん。

「いやー、ゴメンゴメン。
機嫌が悪かつたみたいだねー」
何だこのチビ、全くヒビツて無いばかりか、腹の立つ笑顔を見せて
きやがつたぜ。

「今の俺は最っ高に気分が良いんでね、この窓から放り投げて擬似スカイダイビングの刑に処してやるよ

これで普通の人間は死ねるのだから、羨ましい事この上ない。

「アハハッ！ その前に君の足元にあるメモ帳を拾つてくれると嬉しいんだけどなあ」

「あ？」

最後の遺言か？ と思いながら自分の足元を見ると、確かに今時の餓鬼が使用しそうなメモ帳が。

「なんだこれ？」

「それ、アタシのなんだけど、返してくれると嬉しいなあ……なうんて」

「あ？ ああ、ほら」

「アリガト……つこでに降ろしてくれると嬉しいなあ、つてね」

「え？ む、おお」

アホモチビ餓鬼の言われた通りに降ろす。

何か言ごべぬめられてる気がしないでも無いが。

「うん、それじゃあ拾ってくれてありがとう～！～」

そして風の様に、俺の前から姿を消した。

「なんだつたんだ？」

もはや、怒りも湧いて来なくなつたので、その場に座る。

周囲の餓鬼共が俺をスゲエ目で見てくるので、たまたま筆記用具容れの中にあつたカッターを取り出し、刃を出したし引っ込めたりしたら、一斉に視線を逸らしてくれた。しかしあのチビ……友達には慣れそうにないな、気にはなるがね。

第一、メモ帳を取る位で俺を起こそうとする意味が解らない。
だとすれば、単に俺が珍しかったのか？ まあいい、いずれにせよだ。

（確かに、アンタの言つた通り……この学校は面白いかもな）

心の何処かで、余り期待しちゃあ居なかつたが……フフフ、少し評価を改める必要ありだな。

それから暫くして、入学式が始まつたが当然の如く出席していない。

所詮入学式なんて何処の学校も同じだつて、何より今は喫煙場所の搜索が先だ。

（体育館裏、旧校舎裏、そして時計台の頂上。フフン、この学校は穴場がいっぱいだぜ）

既に頭の中は、ヤニ、ニコチン、タバコ、煙り、と繰り返し流れていぐ。学校の為にニコチン摂取が出来ねえとかフザケテやがるからなあ。

（んで、最後が……）

どつかの屋敷みてえなテカサを誇る建物を見上げていた。

此処は剣道場……噂によると、剣道部が廃部になつた後に不良のたまり場になつたとかならないとか。

「さて、小僧共は仲良くしてくれるかな？」

まあ、こざとなれば全員追い出しあ良いんですけどね。

「一年坊！ ここに座れやーー！」

「ウ〜ツス

「一年坊、火いかせや火ーー！」

「オイ〜ツス

結論、直ぐに仲良くなりました。

いやあ、こうも簡単に仲良くなれるとはねえ。

先輩方いわく『オメエから同じ匂いを感じる』つてんで、凄い歓迎されちまつたよ。

「そういうや、知ってるか、新しい生徒会長？」

俺が先輩方のタバコに火を点けてると、誰かが不意に話題を振つて来た。その内容が非常に興味深いので聞いてみる。

「生徒会長あ？ なんだそりやあ？」

「なんでも、スゲエ奴が生徒会長になつたとか……」

「ああ、しかも一年ぶりじゃ。」

「明日の朝会辺りに出て来るとか

「どんな奴なんだ?」

「聞いた話じゃ、化物みたいな奴だとか……」

「それ俺も聞いた、なんでも3Mはある巨人とか

いる訳ねえだろ、んな奴と思いながらも、明日の朝会は出てみます
かと思うのだった。

続く

5：「入学式？ ああ、つまんねーからサボるよ?」（後書き）

次回から本格的に原作突入です。

6: 「24時間365日誰からの相談を受け付ける」…………いやいや、男が

あえて原作沿いに主人公を突っ込む……と見せ掛けて、です。

クオリティーは何時も通りです。

6：『24時間365日誰かの相談を受け付ける』…………いやいや、男が

（何だかんだで数日後）

『世界は平凡か？ 未来は退屈か？ 現実は適当か？』

「ふあ～あ……ねみい」

『安心しり、それでも生きていることは劇的だ！』

（今日の夕飯何にすつかなあ……）

『そんな訳で本日より、この私が貴様達の生徒会長だ。 学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩み事があれば迷わず田安箱に投書するがよい』

（あつ、塩と醤油切らしてたんだった。帰りに買わないと……）

『24時間365日、私は誰からの相談でも受け付ける……』

「やべえ、タバコも補充しどかねえとな

体育館の外まで響く女の子の声をバックに、俺こと霧生零は黄昏れ

ていた。

いや、最初はきちんと中に入つて噂の生徒会長さんのツラを押もつとしたのだが、なんか急くなつたので音声が聞こえる場所まで行って、そこでサボる事にしたのだ。

「ふわあ……ねみい」

今日になつて何回言つたか解らない。

なんせ昨日は、珍しい高レートの雀荘に行つて遅くまでジャラジャラやつてたからなあ。

まあ、結果だけ言えば勝つたけどね、四暗刻・大三元の西の単騎待ちが炸裂した時の爽快感は半端無い、一気に点差が開いたし。

「今日もタルいし、帰ろつかなあ……」

学校に登校して約一時間チョイ、早くも俺の中の悪魔が『帰つて寝た方が良いぜえ、ケケケ！』と囁いてる様な気がしてゐる。

「うん、決めた……帰ろう！」

心の中の天使が『真面目に授業を受けなさい！』とか言つてる気がしないでも無いが、悪魔の方と契約を交わした俺にはもはや聞こえなかつた。

教室に戻ると、俺の席の隣の席にて突つ伏しながら何かブツブツ言つてゐる野郎一人と、誰かの噂をしている昨日のアホ毛チビ餓鬼がいる。

「……」

その横をさりげなく座り、鞄を取りながら帰りの準備をする。

横の一人以外の餓鬼共が俺を『何でいんの?』みてえなツラで俺を見てくるが、もはや慣れたもんだ。

(よし、準備完了……か~えろつと)

今日の夕飯は何にすつかなあ、とか考えながら帰る為に席を立つが、隣にチヨロチヨロと動いてたアホ毛チビ餓鬼が喋つてるのが聞こえる。

しかし今更だが、この学校の制服つて、なんかダサいな。

「しつかし、あのお嬢様。全校生徒の前でよくあんな啖呵が切れるもんだよ、人前に立つのに慣れてるつづーかさー」

「カツ！」

横目で何気なく聞いていると、机に突っ伏してた男子が、苛々した感じで身体を起こす。

「ありやあ人の前に立つのに慣れてるをじやねーよ、人の上に（・・・）立つのに慣れてんだ！」

「んーそつだね。そうでなきや、1年生で生徒会長になれないもんねー」

ああ、何だ生徒会長の噂ねえ、周りの餓鬼共と一緒にか。

まあ、俺はその生徒会長さんのツラを見ちゃいねえからな、話題についていけんな。

そもそも集団の輪に入る事はもはや不可能だが。……つてくだらねえ事考えてないで早く帰ろうと思いつた瞬間、

椅子が後ろの机に良い感じで当たったお陰で、中々の音がした。

思わず出でてしまった俺の声。

「あ……」

「うん？」

「あん？」

直ぐ隣に居たアホ毛チビ餓鬼と金髪坊やがこちらに気付く声。

「……何？」

何でか知らないが、俺の顔をジーッと見てきやがる田の前の餓鬼二人。

肉体年齢的には同一年かもしれないが、精神年齢は一二十歳ぐらいであるからな、頭の中では餓鬼と認定してるので。声には出さないがね。

「あれ？ 君つて昨日の……？」

「ああこの前、睡眠妨害してくれたチビね……」

取り合えず、あたかも今気付きましたみたいな感じで話を合図させる。

「チビって、そりゃあいぐらなんでも 「霧生ーー？」…………え？」

「は？」

アホ毛チビ餓鬼との会話とは余り言えない行為に勤しんでると、後ろに居た金髪ボーヤが指差しながら俺の苗字を叫ぶ。てか、あんまり目立ちたくないねえからデケエ声で俺の名前を呼んで欲しく無いし、何故テメエが俺の名前を知ってるんだよ。

「えーっと、何で君が俺の名前を知ってるの？……どつかで会つたっけか？」

『フレホー！ 何処の組の者じやコラア…』とは言え無いので、比較的優しめに聞く。
真面目な話、こんな金髪ボーヤの事等知らないし。

「人吉善吉だよ。ホラ、中学の時に同じクラスだつたろ！？」

中学？ いや、俺殆ど授業サボつてて当時のクラスの顔と名前なんて覚えちゃいないんだけど。

「ん~？ ゴメン覚えてないや」

「そつか……あつ、なら黒神めだかは知つてんだろ！？」

「ん？ あ～ よ～く覚えてるぜ、授業サボるたんびに絡んで来た女子だろ？」

ヒデヒ時は、無理矢理連行されそうになつた事もあつたけな、逃げたがね。

「そうそう、そん時に横に黒い髪をオールバックにした奴がいたろ？」

オールバック？…………あつ、ちよつと思い出出して來た。

「いたけど……え？ あの時の子つて君なの？」

「思い出したか！？ それが俺だよ」

お、オイオイ。マジかよ、入つて髪型が変わるだけで分からなくなるものなんだな。

「そ～なんだ……ほえ～
わかんねえもんだなあ」

「まあ、あの後直ぐに周りから『ダサい』って言われて直ぐに戻し

たからな

「へえ……所であるの子は元気なの?」

「あの子って……ああ、あいつの事か? その言い方だと、あいつがここに生徒会長になつたの知らないのか?」

「もうだつたの? 「メン、俺朝会サボつてたからさあ

「ハハツ、相変わらずだなあ」

苦笑いしている金髪ボーヤ改め、人吉君から聞いた情報に少しばかり驚かされたぜ。

確かに今からしたら聞いた様な声だった気がしたけど、まさかこの学校にいるとは。

参つたな……あの子が生徒会長となると、少しばかりめんどうにならうだな。

「あの~

「「ん?」」

二人で軽い会話を交わしていたら、いつの間にか空氣つて奴になりかけてたアホ毛チビ餓鬼が、会話に乱入して来た。

「いやー一人共、アタシの事忘れてるっぽいかなぁ……」

「……スマン、正直忘れてた」

普通に申し訳なさそうに謝る人吉君に対して俺は。

「申し訳ございません。正直に言えば意識して忘れようとしてました」

友達にはしたくないような言葉で攻める。
俗に言う軽めの毒舌だ。

「あはは……」

「相変わらずだなお前。なんつーか、わざと人を突き放す言動が目立つつーか……ああ不知火、コイツが言う言葉は一々間に受ける必要なんて無いからな？ 単なる挨拶代わりみてーなもんだし」

「アタシは全然気にしちゃいないから大丈夫だよー！ 昨日も色々

あつたしねー霧生くん?「

俺は人吉君の事を知らないのに、俺の事はある程度知つてるってのは妙な気分だな。

それとアホ毛チビ餓鬼改め不知火さんとやら、ニヤニヤしたツラで俺を見るなよ、この前のアレは結構マジだつたんだからさ。

「人吉君がそこまで俺を知つてる理由を聞くのは置いといて、だ。新しい生徒会長さんの事が少しばかり気になるんだが……」

これ以上グダグダと話す気も無いので、せっかく内容の起動修正する。

適当に話をすれば、向こうも勝手に満足するだろうし、俺も気持ち良く帰れるって訳だ。

「あ? ああ、あいつね……本当にどついた事をしてくれたよなあ

」

「それは本心で言つてるのか?」

「どうこう事? 霧生君

「ん? ああ、この子……つーか人吉君ね、俺が中坊の時の記憶か

ら察する」、いつも黒神さんと一人一緒にいたからなあ

「へへ？」

「ばつ！ 誤解を招く言い方をするなー！ あれはあいつが勝手にだなあ！」

照れ隠しか何かで、まくし立てる人吉君。
ほほう、なら。

「不知火さん不知火さん、見て下せりよアレが俗に言ひ、『シンデレラつてやつですぜ？』

「見ました見ましたよー霧生さん。全く何で素直になれないのですかねえ」

流石だぜ不知火さん、やっぱりこの子は、人を引っ搔き回すタイプの様だな、アドリブもなんのそのでこなしてくれたぜ。

「お、お前等……やつきまで余り仲良くなかったよな？」

「えー？ これは別に仲が良いとかじゃ無いんだけど……」

「そりだよ人吉君、単なる“ボケ”と“ツッコミ”みたいなもんだよ……」

「「ねー?」」

「“せつてえ仲が良いだろお前等!-?』

人吉君のツッコミに久しぶりにゲラゲラと笑ってしまった。
不知火さんからのパスも良い感じで受け止められた俺は気分が良くなつたのか、そのまま三人で談笑する事にした。

心中の悪魔が『サボんじや無かつたのかよ!-?』とか言つてる気がしたが、面白けりやそれで良いやになつてしまつた俺は普通にスルーを決め込む、別に俺は人嫌いじや無いし、普通に面白いのなら人に話掛ける事だつてするぞ。

（数分後）

「でもよ、確かにあの子は凄いケドさ……捏造ばつかだな、聞いた限りじや全長が250メーターあるとか聞いたんだけど」

「いやいや、ないない

「あたしも聞いたよ、高度6万フィートをマツハ2で走行とか」

「何だよそれ、身体が超合金か何かで出来てるってんなら解るけど」

「つーかもはや人間じゃねーよ」

自然と生徒会長さんの話をしていた、なんせ話題が無いもんだから。

「んでもあ、人吉」

「あ?」

「アンタもやつぱり生徒会に入るの?」

「あ、そりゃあ俺もきになるね」

まあ、多分入るんだろうが。

「カツ、確かに何度も誘われちゃいるがな、これ以上あいつに振り回されるのはゴメンだな! だから……」

予想はできるが、何かを宣言する為に一息入れ、そして。

「俺はぜってー！ 生徒会には入らない！－！」

元々容姿は普通にカツコイイので、妙に決まっている人吉君のだが……ああ、後ろに何かいなければもつとカツコイイのにな……。多分隣に笑顔で固まってる不知火さんも似た様な感想を思つてる事だろう、うん。

「まあ、そつつれない事を言つた善吉よ

そして後ろに居た女の子は、人吉君の頭をガシッとわじづかみにする。

本人はこの世の終わりみたいな顔をしてる、成る程ねえ性格は余り変わっちゃいねえか。

「ん？」

「あ？」

何故か知らないけど、俺のツラを見て一瞬固まる生徒会長さん。思わず喧嘩越しの口調の返事を返してしまったのは仕方がないでし

よう。

「貴様は……」

「はい？」

「フツ、調度良い貴様も来い！！」

「えつ グエツー！」

そつ言つて俺の首根っこを掴みながら、連行して行く。
それを不知火さんはハンカチん振りながら見送るのが見える。
フツ、白状な子だぜ。

続く

6:『24時間365日誰からの相談を受け付ける』…………いやいや、男が

先に言つときますが、主人公はチャラ男予備軍です。

7：「この俺に後退は無い！ 在るのは前進全勝のみ……」

「つむ一度でここに

いつの間にか総合評価が100を越えてました……。
いやマジで恐縮です。

これをバネに頑張りたいです。
ありがとうございます。

さて、今回で主人公のルートが決まってしまったが、先に言え
ば王道ルートって奴です。
元々はこのルートにするつもりは無かったのですが自分、一次創作
で主人公ルートで話を作った事が無かったので、チャレンジの意味
でやってみました。

ちなみにお互いの呼び名について突っ込みたい所があるとは思いますが、一々主人公を〇〇何年と長くなるのであえて下の名前で呼ばす
様に無理矢理矯正しました。

そこそこは広い心で受け止めてくれたら幸いです。

それではどうぞ。

7：「Iの俺に後退は無い！ 在るのは前進全勝のみ……」

「うむ一度でい

理不尽といつ言葉がある。

意味は『道理に合わない事』なのだが、今この瞬間にも俺はそれ（・）を味わってる。

「霧生、大丈夫か？」

「人吉君さあ……理不尽って言葉、誰が考えたんだろうね？」

「言いたい事は分かつた……オイ！ 普通に連れてこれねえのかよ！？ 生徒会長さんよお……」

人吉君が目の前に仁王立ちして居る生徒会長さんに吠える。
出来たら俺も援護射撃をしてやりたい気分だ。

「フン、私の誘いを断り続ける貴様が悪い。それに昔のようになに“めだかちゃん”と呼ぶが良い」

「そんな事は今は良いんだよ！ 俺はともかく、何で霧生を連れて来たんだよ？ 見ろよ霧生の奴、余りに唐突な事が起こってボーッとしてやがるぞ？」

「……アハハハ、ちょいちょいになりてえ」

窓の向こう側に居る紋白蝶が羨ましいぜ。

「ム……。やうだな、書類にも置いて置くか……オイ、コッチを向け！！」

「ブヘツ……」

頭に鈍い衝撃と共に意識が紋白蝶から元に戻る。決まった、文句を言つてやろう。

「つてなあ……ゴラア！ 人の頭は叩けば600万個の脳細胞が死滅するとか訳の分からぬ説が流れてるんだよお！…」

論点が軽くズレてる気がしないでも無いが、文句の一つ位言つても罰は当たらんだろう。

大体昔から苦手なんだよ、こういったタイプのガキ^{タレ}女は。

「フン、人が折角引つ張つて来たのに話を聞かないから悪いのだ」

「うわあ……人吉君聞きました？ バツサリ切り捨てましたよ？
彼女は鬼ですか？」

「諦めろ霧生、奴は昔からそうだ」

「うん、何となく分かってたさ」

人吉君に慰めると言つた情けない構図になつてゐても関わらず、当の生徒会長さんはやり切つた感丸だしの表情で制服を脱ぎだす。

「つまーい！ 当たり前の様に人の後ろで着替えてるんじやねー！…！」

「？ 私と貴様の間に恥じらいなんてないだろ？ 、少なく共小六の時まで、一緒に風呂に入つた仲だろ？」

「昔の話だらうが！ それに霧生だつていんだらうが！…！」

つーかよ、俺はこんな茶番劇を見せられる為に連れて来られた訳じやねえよな。

何か今になつて眠気が来たんだけど。

「フン、奴なら別に問題は無い。その証拠に見り

「ああー?」

「ふあーあ……」

「よ、余裕な表情をしながらの欠伸……」

「あー ねみい」

「奴は中学の時の修学旅行の時に女湯に間違つて入つた時も、あんな態度だつたしな」

「おー……」

「俺の黒過ぎる歴史をほじくつ返すなよ。」

「あー オレも思い出した。確かすげえ涼しい顔して何か言つたら、女子にタ「殴りにされてたつて噂が……」

「君も思つ出すなよ

人吉君の言つた通り、中学の修学旅行の時に何を間違つたのか、女湯に入つてしまつた事がある。まあ、中学生という女性のタイプから大抵欲情する変態なつもりは無いし、俺の好みの女性のタイプから大きく掛け離れた人種なので思わず鼻で笑いながら素っ裸の女の子達に向かつて『乳臭い身体だな』と言つてしまい、女子全員からの報復を喰らつたのだ。

結局死ぬ程のダメージは無かつたが、多分生きて來た中では一番死に近いダメージだったかも知れない。

「俺のくだらない話は置いといて、だ。俺を連れてきた理由は何ですか？ まさか思い出話に花を咲かそんなんて事は無いでしょ？」

「フツ、相変わらずだな……何、善吉と貴様を呼んだ理由は他でも無い」

「……」

「せー人吉君を呼んだ理由は分かるからアレだけど、俺を連行した理由がわからない為、何時に無く眞面目に聞いてやううと、生徒会長さんの顔を見る。

「改めて言おうー人共生徒会に入つてくれ、私は貴様等が必要だ」

誠意の籠つた言葉と共に頭を下げる生徒会長さん。

人吉君は、何かを想つてゐるのかダンマリだが、俺は訳がわからない。

「ちよつと待つて下さいや。俺が必要？　冗談は顔だけにして下さ
いよ、何で俺なんですか？」

マジで意味がわからない。

俺が必要つて……俺は人吉君みたいな幼なじみとやらでも無いし、
お世辞にも模範生徒じや無い。それに中学の時は決して仲が良かつ
た訳では無いのだ。

「貴様は中学の時に私の言つ事に全く従わない者の一人であり、尚
且つ私以上に……だからな」

「…？　何だと？」

ボソリと言つた言葉に、思わず口調が戻る。
まさかこの餓鬼……気付いてやがるのか？
俺が普通を通り越した存在だつて。
なら……。

「どうだ？　頼む……私を手助けてくれ、霧生一年よ」

「……フツ」

「？」

「クツクツクツ……」

やべえ、我慢が出来ねえよ。

「クハハハハハハハハハハハハハハアツ！……」

多分この世界に来て、一番の笑い声を出したと思つ。
まさかなあ、こんな餓鬼に気付かれるたあな。

「フウ～ 良いだろうー アンタに着いてけば、俺の目的は更に完
全なものになるからなー！」

「そりか、なら」

「ああ、生徒会とやらに入つてやるよ」

この餓鬼がこの世界の主人公だつてのは、名前で分かつてた。なら逆に奴等の輪とやらに入つて、いざれ来る死亡フラグとやらこ真つ向からぶつかつて……死んでやるよ。

「ではよろしく、生徒会長さん?」

「ウム、じゅうじゅくを頼むぞ霧生一年」

「ノンノン、俺の事は零で構わんよ……まあ、呼びたく無ければ良いんだケドね」

「良いだらう貴様は特別だからな、喜んで呼ばせて貰おうか。それなら私の事はめだかちゃんと呼ぶが良い“零”」

「フフッ、今だけ君が好きになれそうだよ“めだかちゃん”」

お互に握手を交わしながら俺は思う。

今日を持つて俺は生徒会に入る事になつた、俺自身の目的の為に……頼むぜ? 黒神めだかよ、お前なら俺を殺してくれるかもしねないのだからな。

「さて、善吉はどうだ? 零は喜んで生徒会に入ってくれるらしいが、お前はどうだ?」

「ちくしょう、こんな状況で断れる訳ねえだろ？が。良いぜ、テメーに振り回されるのはもはや慣れっこだからな、俺も入ってやんぜ生徒会によーーー！」

「決まりだな

「だな

黒神めだかが微笑むと同時に俺も薄く笑う。

人吉善吉君、君も俺の為に頑張つて貰おうかな？

その後、何故か三人で円陣を組む事になった。

ハズイゼ……。

続く

おまけ

零

「そういうや、俺と人吉君の役職つて何さ？」

善吉

「俺の事は善吉で構わぬーぜ」

「あ、マジ? なら俺も零つて呼んでくれや」

善吉

「ねつー.」

めだか

「役職については、後で言ひ、今は早速来た依頼を片付けてからだ」

零

「依頼?」

めだか

「『三年の不良達が剣道場をたまり場にしてます、どうか彼を追い出してください』だそだ」

零

「え、つー.」

善吉

「ん? どうかしたのか?」

零

「い、いや（俺もそのお仲間だった……って言えねえ）」

めだか

「よし、行くぞーー！」

零

「（先輩達……『愁傷様』でござりまする）」

終わり

7：「この俺に後退は無い！ 在るのは前進全勝のみ……」

「うへむ一度でこい

先に言つときます、主人公は二コ中です。

8 「勝つや……！ 絶対に勝つや……！」とか言つた瞬間負け確定（前書き）

『やで書いた為に、話が飛び飛びのクオリティー最低です。

申し訳ござません。

8：「勝つぞ……！ 絶対に勝つぜーーー！」とか言つた瞬間負け確定さ

やはり世の中は解らないもんだ。

なんせ俺が生徒会とやに入る事になつたのだから。

まあ、それが普通の生徒会なら入りはしない、だがあの生徒会長さんは話は別だ、あの子は何かを持つている。

その何かのおこぼれを貰う為に俺は疲れない程度に頑張る事にしたのだ。

剣道場の件から一週間後……いやあ、あの時は大変だつたなあ。生徒会と先輩の板挟みをもろに受けたし、同じクラスの日向君とかいう奴（その時初めて知つた）が良い感じでイツちゃつてやがつたのを善吉君とめだか君が上手く纏めてくれたし、俺も色々と裏で動いて上手く片付いたのは奇跡に近いぜ。主に先輩達に土下座しまくつたり、場合によつては殴りまくつて記憶を消したりとか……。

「フウ……生徒会室は、空調完備だからサボるのにはもつて来いだな……ニコチンは摂取出来ねえがね」

中々に日当たりも良いし、エアコン常備、これに灰皿が用意されてりやあ言つ事無しなんだがね。

「いやいや、お前未成年だよね？」「

「アーン？ 良いんだよ、俺の精神年齢は二十歳越えてっかりまあ……つーか俺がヤニ吸つてる事知らなかつたっけか？」

「知つてたけどよ……学校に居る時ぐらいは我慢したりひつよ？ それに、その理屈は理屈にもなつてねーぞ」

「アハハ……確かに」

「実際問題、俺の精神年齢は二十歳過ぎなんだかな……と言つた所で信じちやくれないか。

「つーか善吉君よ……さつきから鏡の前で何してんのさ？ 自分の姿に酔いしれてるの？」

さつきからソファでねつこらがる俺の斜め前で、全身が写る鏡を前にして、生徒会専用の制服を着ながら、何やらため息をついてる善吉君が地味に気になるんだがね。

「ちげーよ。俺って黒の服が似合わねえと思つてる訳でさ」

「はあ、そつか？ 俺は結構様になつてるよつに見えるんだが」

実際に善吉君は普通に着こなしてゐる様に見えるんだが、一体何が氣に入らないんだか。

「あ～あ、だから制服白のこのガッコにしたの元よ

「学校選ぶ理由が軽すぎ無いか？」

何その『元』のワーメンは氣に入らねえから、ひょっと屋外まで行く『みたいなノリは。流石にビックリよ。』

「いやそんな」とはない、善吉には黒が良く似合つ

おつ、いつの間に善吉君の後ろで同じポーズしてゐるめだか君が面めざ、ボケーッとしてたから氣付かんかった。

「どうわつ！ だからなんでお前はいつもいきなり後ろにいるんだよーーー！」

そして何時もの様に驚く善吉君。

「チョリ～ツス！ めだかちゃん

軽田の挨拶をする俺に対して、ウムと一言返しためだか君。

「善吉よ、見てくれが気になるなら内側にジャージでも着てみたらどうだ？ きっと格好よいであろう」

めだか君の提案にほほうとなる俺。

確かにカツチヨよさげな気がするからね。

んで案の定半信半疑で中にジャージを着てから制服を羽織るとあり

不思議、トライックの運ちゃんみたいな格好の出来上がりだ。

「テツ、テビルかつけえ！！ 反骨精神のカタマリみてーだ！」

「良いなあ善吉君……オリジナリティある格好に加えて普通に似合つてるし……」

「や、そうか？」

テレテレしてゐる善吉君に対して普通に羨ましいと思つ俺。
いや、普通に格好良いつしょアレ？ なんか世間じやダサイみてー
な事言わてる氣がするが、少なく共俺は良いなあと思つべ。

「ねえねえ、時々真似して良いかな?」

「おうー、どんどん真似てくれーー!」

「お、おおふ……一カッと笑つ善吉君が眩しいぜ。」

「制服の話はそこまでにして、そろそろ田安箱のチェックの結果を
『いい三』

会長専用の机の上に田安箱を置き中に入つてある紙を取り出す。
あ、ちなみに俺は普通に制服着てるだけです。」

「明日から田安箱の管理は庶務である善吉の仕事だ。 本生徒会の最
優先事項だから、決して手を抜かぬ様に」

「へーー

けだる気に返事をする善吉君。

彼の役職は庶務で、ちなみに俺は……。」

「ねえ、俺に対する仕事は何か無いの?」

“役員補佐”である貴様は今の所は善吉の補佐をしてくれ、今の所私が手を貸して欲しい所は無いからな

「うう～

これが俺の役職“役員補佐”で内容は他の生徒会役員の手伝い及び意見出しで、なんでも緊急時には生徒会長と同じ権限を持つ事が出来るとか……。

まあ緊急時以外は庶務と殆ど（・・）変わらないのだがね。

「でもさあ、俺の役職って十代前の生徒会で無くなつたとか聞いたんだけど、何で今更復活させたのさ？」

「先日も言つた通り、私は貴様……零に手を貸して欲しいとは言つたが、お前が私の下というのは私自身納得がいかないからな。だから緊急時に会長と同じ権限を持つ事が許される役員補佐を復活させたのだ」

「ふうん、別に俺は下でも構わないんだけどなあ

「それじゃあ私が納得出来ないのだ。とにかく貴様は役員補佐で決定だ」

「へこへへい」

「では早速来た依頼を片付けるが」

「ウーッスー」

「ねいー。」

「ま、この子の近くにいっやあ、いずれでかいヤマが来るはずだし
その時までは無難に従わせて頂きますよ。」

ついで田安箱に投書された依頼をやる事に。

「ふむ、今回ばかりはと記念されてるみたいだな」

「あの……」「めんなれい。本当は「んな」と下級生のあなた達に相
談する」とじやないかもしけないんだけど……」

「下級生？…………って事は貴女は先輩？」

「え、ええ……（なに）のナ……」

「なんだ貴様、ちゃんと投書の内容を読んで無かつたのか？」

「まあ、一人が内容を把握してりやあアレかなつて……で、ちなみ
に学年は？」

「一年九組……だけぞ」

「ほほう、な～るほど、へえ？」

「お～零、急にニヤニヤしてどうしたんだよ？」

フツ、後ろの二人が俺の好みの女性のタイプを知ってる筈無い、か。
それにしてもフムフム、年上かあ。良いね良いねえ、テンション上
がつて来ましたたよ？

「よし、遠慮はいりません。俺達は誰からの相談を受け付けるがモ
ツト～ですか～、ササツ！　お茶をどうぞ」

先輩……いや有明さんにお茶を出す。

一応精神年齢から考えたら年下なのだが、肉体年齢的にはこの方のほうが上なので最上級の敬意を表するぜ。

結局俺は言つてる事が曖昧なのだよ。

「あ、ありがと……（わざわざまで死んだ魚の様な目だつたのに急に態度が変わった……）」

しまつた、露骨過ぎたか？ へへ、テンションの上げ下げがむずいぜよ。

「貴様……私の台詞を取るなよ。わざわざ下がれ」

「お前ホントにさつきからおかしいぞ？」

善吉君とめだか君が俺を無理矢理後ろに下げる。畜生終わったよ、この野郎が。

（一時間後）

それから俺は、意氣消沈な状態で依頼を聞く。

なんでも陸上部に所属している有明先輩のスパイクが悪戯でズタズタにされたとかで、犯人を突き止めて欲しいとかで、何だかんだで一時間が過ぎたのだが……。

「善吉君よ。あの子ってコ○ンも真っ青の推理力だよな？」

「ありすぎて逆に引くぜ」

校舎の陰から陸上部の練習風景を覗きながらの俺と善吉君の会話。

「んで？ 不知火さん、どれが諫早先輩？」

横目で直ぐ横に居る不知火さんに犯人であろう諫早先輩の姿を教えて貰う、正直また先輩だつてんでテンションが上がり始めてるぜ。

「あの水道の所にいるのがそうだよ。三年九組諫早先輩、有明先輩と同じ短距離専門のアスリートで利き腕は左、同じスパイク履いているのはみてのと一り」

「ほう、俺と同じ左利きか、話が合ひ……とは思えないな」

氣難しそうな田つきだしな。

「お住まいは23地区で二年前から文庫新聞を購読中
だつてさ！」

「……いつも思うのだが、不知火の情報つてどつから引っ張つてく
んの？」

「あひやひや！ 人吉が正義側のキャラにいたいのなら知らない方
がいいね」

様は人には言え無いような事つてか？

「ちなみにあの諫早先輩、有明先輩が代表に選ばれたせいでレギュ
ラー落ちしてまーす」

「ふうんて事は、だ」

「ああ、決まりだな」

上級生が下級生に出し抜かれたのが面白く無い故の犯行つて所かね。
やはりあの子の推理は正しかつたつて訳だな。

「意外とあつけなかつたな」

「といつても、ほんとめだか生徒会長の推理のお陰だがね……おおっ！ 水を飲んでる姿がなんかセクシーだ！……ってオイ、二人とも何故俺から距離を取るんだよ」

「いや、なんかお前の言い方がヤラシー感じだつたから」

「アタシも」

「フン、いずれ善吉君にも分かる時が来るさ。そして不知火さん、心配しなくとも俺は君に人間としては興味あるが、女性としては興味が1ナノも感じ無い！！」

「言つてやつたぜ馬鹿野郎が。

「……それはそれで傷付くかなーなんて」

「零。お前はもうちょっとオブラーートに包んで言えないのか？」

「フツ、曖昧な供述をした所で意味なんて無いからな、ハッキリと言つてやつた方がお互い良いのさ……」

「いや、そんな無駄に格好付けながら言つ事じやないぞ」

とまあ、こんな感じでグダグダとやっていると、めだか君が後ろからやつて来て、物的証拠も無い癖に諫早先輩に『貴様が犯人か?』とメジャーリーガーも真つ青な直球180キロストレートで聞き出す。

諫早先輩もいきなり核心を突かれたのか、返つてテンパリボロを出しまくつた揚句に逃げ出しが、身体能力のスペックからして違うめだか君に直ぐに追い抜かれ結局捕まるのだが、めだか君も先輩を捕まえ様とはせずに何かを語つた後その場を立ち去る。

その後、その場にヘナヘナと座り込む諫早先輩の所へ行つて善吉君がめだか君について語り、いい感じで事件は解決の方向へと向かつて行くのだった。

余談だが、善吉君の格好を諫早先輩がダサいと評した時は一人してマジでガッカリしたのは言うまでも無い。

（次の日）

「クッソー どうしてこのカツコ良さが伝わらないのか……」

「全くだ……諫早先輩にはガッカリだよ畜生……」

善吉君と二人して制服の中にジャージを着た格好をしながら鏡の前で唸る。

やつぱどつから見てもカツチヨ良いと思つんだがなあ。

「あの……人吉君と霧生君、ちょっと良いかな?」

「え?」

「あ、有明先輩!-?」

いつの間にか有明先輩が後ろに居たのだが、なんか最近背後を取られる事が多いな。

「人吉君のその格好、個性的でカツコイイと思つよ?」

「な、なぬっ!-!」

「あ、アリガト!」ぞいます

「ちょっと、ちょっと有明先輩俺は? ねえ俺は!-?」

「あ、ああ、うん。格好良いんじゃないかな?」

「な、何で疑問形なんすか！？ せめて俺の田を見て置いて下さいよ……」

「うんカツコトイイカツコトイイよ」

あからさまに田を逸らしながらの発言に、俺の心はズツタズタ…
…グスン。

「お、落ちつけって、な？」

「善吉君は良いよなあ、先輩にカツコトイイって言つて貰えてやあ…
…グスツ」

鬱だよ……死にたいぜ畜生。

「あ、ああ。そう言えばどうしました？ また何か変な事でも？」

俺の事など無かつた事にしゃがつた。

「今度はロックから代用していたスパイクが無くなつてて……」

「は？」

「代わりに新品のバイクとこんな手紙が入ってたんだけど、どういつ事だと思つ？」

「これは　「何々『ジメン』か……」　おい零、話に割り込んで来るなよ」

「うつせ、色黒はだまつてうー。」

（かなり弓を引いてるな……）

先輩にカツコイイって言われたんだ、会話に割り込む位でガタガタ抜かすなや。

「……有明先輩、見た限りですがこれからはあんな悪戯も無い」と思っていますので、もう大丈夫ですよ？ 心配無いです」

「そ、そつかな」

「ええ……陸上、頑張つて下せこや。応援しますよ」

うとうん、良い感じで解決出来たから自然と頬が緩むのが分かるぜ。

「あ……」

「へえ？」

「なにそれ。善吉君に有明先輩」

俺の顔見て新発見でもした様な顔して「コツチを見る善吉君と有明先輩。

何だよ、照れるじゃねえか。

「あ、俺が言つより有明先輩お願いします」

「うん、霧生君って笑うと結構カッコイイかも」

「えつ？ マジっすか！？ イヤツホーイ！－ 壱められたぜー！」

「この喜びをどう表現しようか…… そうだ！」

「俺は鳥になるぜーー！」

何か今なら飛べる気がするので、窓を豪快に空けて窓枠に足を乗せようとするが。

「ぱはー、馬鹿ーー！」「4階だぞーー？」 飛び降りようとするなーー！」

「うせやーー！ 離せ、喜びの表現じゃあああーー！」

「アハハ……」

後ろで苦笑いしている有明先輩の事などつゆ知らず、俺は喜びの余り窓から飛び降りようとするが、善吉君に後ろから羽交い締めにされて出来なかつたのだった。

続く

8：「勝つぞ……！ 絶対に勝つぜえ……」とか言つた瞬間負け確定さ（後書き）

主人公つてもしかしながらも真黒と相容れないかもしない。

9：「ん？ 間違つたかな？」（前書き）

主人公の淋しい放課後の過ごし方です。

9：「ん？ 間違つたかな？」

スパイク事件の後始末も済み、帰ろうと校門を出る。

俺は走っていた。

学校にいる間は、タバコを吸わない……と勝手に決めたのだがそんな俺の一大決心を無視するかの如く俺の身体は『ニコチン！ タバコ！ 紫煙！ 早く……早く摂取しやがれやああ！！』と頭の中でリピートしまくつてゐる。

（け、煙を吸わせろおおおおお！）

何時もなら学校から少し離れた所で胸ポケットに隠してたタバコを取り出すのだが、あのガキ女……いや、めだか君がタバコを発見するや否や俺の目の前で真つ二つにしてくれたのだ。

当然俺は烈火の如くキレたのだが、学校で吸うとか未成年をだしに正論で返してきたので何も言え無くただ黙認するしかなかつた。いくら精神年齢が二十歳過ぎても、この世界での俺はまだ16歳。本来ならパチンコにも行けない歳なので酒やタバコは以つての外なのだ。

まあ、普通にそんなルールは破つてるのでが。

(つ、着いた……)

呼吸を整えながら、我が家であるボロアパートの階段を上がる。なんだかんだでこのアパートに住み始めて一年が経過している、そして後三年……いや一年半位で俺がこのボロアパートに永住するか、死ぬかが決定するのだが、この世界に永住となつた場合……あくまでも場合であつて永住する気なんて更々ないのだが、もし永住決定となつたらまた一から進路を考えなアカンのかと思うと異常に気が重い。

「ハツ……くだらねえ」

馬鹿馬鹿しい何を考えてるんだ俺は違つだろ零。お前は帰るんだろ？死んで家に帰るんだ。婆ちゃんがいない世界なんて……鬱の無い雄ライオンじゃねーか……チヨイスが何かおかしい様な気がしたが気に入ら駄目だ。

「……よしつー！」

両頬をバシンと叩き気合いを注入しながら、部屋へと入る。

「帰つたぜえー……つて誰もいないがね」

もう何回目になるか分からぬ淋しい光景。

まあ、普通に考えれば孤独な独り暮らしの部屋に『ただいま』って言つて『おかえり』なんて返つてきたり、間違いなく空き巣か酔っ払いだけど。

「……先ずは一コチン摂取からつと」

学校を出た時から、ずっと頭の中でリピートしていたタバコを吸う、口に含んだ煙を肺に浸透させてから吐き出す……う～む、マイルド。我慢して我慢させられた後の一服の爽快感と開放感は最高だ、心が落ち着くぜ。

「さて、と所持金は……野口の兄さんが5人に福沢の兄さんが8人……先ずは夕飯の買い出しだな」

財布の中を確認してからバイクのキーを取り、上着を着る。

ちなみに口座の方には、おおよそ人様には胸を張つて言えない様なやり方で得た金がうん百万単位であり、しかも元の世界に居た時から持つてた大型二輪と車……普通免許がこの世界に来た時も所持してたのだが、よくよく免許証を眺めてたら何故か今いるこのボロアパートの住所になつていたのは嬉しい誤算だった。要は、この世界で免許を取得出来る年齢になれば、わざわざ教習所に通わなくとも車やらバイクに乗れるようになれる、という訳だからだ。

んで16歳になつた今。現在は原チャリと250CCまでの二輪車が青の国家権力さんを気にせず、堂々と乗れるようになつた。ちなみに大型二輪と車は18……即ちこの世界へ永住する事になつた瞬

間、解禁されるのだ。

「ガソリンは……あんまり無いな、帰りに入れとくかな」

ガソリンが高騰してゐる世の中の情勢に軽くイラッとしつつバイクのエンジンをいれる。

ちなみに俺が乗ってるバイクは、ローソンレプリカ仕様の“Z1000”カウル無し、通称“ジエイソン”だ。

今年齢では乗ってはいけナイのだが、たまたまバイクを買う時に目に入ったのがこれだったので『まあ、いいか』の精神で乗ってる。サツにも捕まつた事無いしね。

「さて、とエンジン音に違和感無し……行きますか」

軽い曇り空の中、ハンドルを握りアクセルを入れ、近所の大型スーパーに向かう俺だった。

『リーチ!』

「おっ? 赤オーラ……激熱リーチってか?」

スーパーでの買い物も終了し、家に帰りました。……ところが、
だつたのだが、たまたま走ってた時にたまたまイベント開催中の旗
があるパチ屋が目に入ってしまい、フラフラン店に入つて、何となく
打つてみたのだが……。

『世紀末覇者拳〇ー！』

「おおい！ いきなり文字赤ラ〇ウリーチかよ…… これはもしかし
たらもしかするぞ？」

座つてから打ち始めて、まだ一千円しか使つてないのだが、いきな
りの激熱リーチに心躍る。

『ハアア～』

「あん！ ケンシ〇ウ対ラ〇ウリーチかい…… ジッセンラト〇対
リ〇ウが良かつたが…… 後は時の運だな」

『フォアターアー！！』

『ヌオリアアー！！』

ケンシ〇ウとラ〇ウが正面からぶつかった瞬間上のロゴが揺れる……

…ヤバイ、来たんじゃねえか？ 後は……。

「頼むぜえ……しゃつ！…！」

画面の中の一人が空中戦を繰り広げた後地上に降り、振り返りながらお互い睨み合う画面……そしてボタンプッシュのマークが出たので『頼むぜ……お小遣！…』と思いながらボタンを押すと……。

『お前は……この時代に必要な男！』

(お……おおつ！ 来た、来たぜ！… プレミア縦カットイン！…)

本来なら、ケンシ○ウが何か一言言つカットインが、プレミアであるレ○のカットインになつてる……といつ事は。

『フンッ！』

ラ○ウの兜が割れ、そして。

『ハ○ウ……！ そんな駄馬の上ではこの俺には勝てん！…』

当然ケンシ〇ウ勝ち、更に……。

「フフフリーチだつたから何もせすともハイパーboroナスつてね」

大当り……といつ訳だ。やつべ、周りのおっちゃんやおばちゃんやら兄ちゃんやら姉ちゃんやらがスゲエ羨ましそうに俺を見てくるぜ、ククツ此処は余裕の表情でタバコだね。

「フウ……」

この後、夕方から入店して閉店ギリギリまで打つてた訳で、総額15万の臨時収入が入つたのだった。

「すんませ～ん、LUCKY STRIKEのBOXを4カートン
くだわ～い」

「かし」まつました～（あら、超イケメン……）」

「～」

いやあ、今日は色々あつて疲れたけどあのパチ屋での臨時収入のお陰でいくらか疲れが飛んだぜ。と、擬似的な疲労回復に酔いしれながら勝った金を必要な分を財布に入れて残りは口座に預けた後、タバコの買い溜めをする。

「ありがとうございました」

「フンフン つと……夕飯買った材料が生物でなくて良かつたわあ～」

これが生物だつたら、腐つてた事間違いなしだからねえ、ホントに良かつた。

後は家帰つて飯食つて寝る、大体これが俺の放課後の過ごし方だ。

続く

9：「ん？ 間違つたかな？」（後書き）

次回は再び本編？ に戻ります。

10：「いいか？ 何度も言つては無いけど俺は年上好きなのだー」（前書き）

主人公は結構我が儘なのかも知れない。

つてな訳でクオリティー 最低ですが宜しければどうぞ！

10：「いいか？ 何度も言つては無いけど俺は年上好きなんだー。」

「でも良いのだが、何故あの学校はバイク通学が駄目なんだろうか。

恐らくは学校の品格とやらを著しく下げるとかつてのが理由だと思うのだが、と何時に無く「ちひりや」と言い訳がましゃ言つてゐるかと言うと……。

「9時、遅刻決定か。痛つて……しかも一日酔い」

おもつゝそ寝坊＆一日酔いで遅刻決定なのだ。

いや、遅刻だけならこんな「ちやーちやー」と御託めいた事を考へる必要は無いのだが、つい先日辺りにめだか君に勝手な約束を交わされたのだが、その内容が『遅刻及び授業のサボつた場合は黒神めだかによる特別補習』だというお互いにとつて全く利益の無いものだ。中坊の頃からそうなのだが、何故かあのガキ女^{タレ}……いや流石に可哀相だからあの子にとくか、とにかくあの子は事ある」と俺に突つ掛かつてくるのだ、いわく『授業は楽しいぞ』だとか『そんな物を吸つてると早死にするぞ』等など、正直何回本気でブチのめしてやるつと思つた事か……。

（また新しい田覚まし時計を買わないとな）

田の前で『ひでぶうー』となつてゐ田覚まし時計に黙祷を捧げながらポリポリと頭をかく。

多分煩いとかいう理由で無意識に目覚まし時計の営業妨害という名の破壊をしてしまったんだろう。ありがと、……君の事は忘れないよ目覚まし時計君6号、と柄にも無い事を思いながら遅めの朝食と軽いシャワーを浴びて鉛の如く重い足どりで学校へと向かうのだった。

「で？ 学校に行く途中にお前好みの女性が居たからといって、ついフラフラと着いて行つた……それが遅刻の原因か？」

「そうです、一日見た瞬間雷が走つたもんで」

学校に着いて早々担任から遅刻の原因を聞かれるというある意味お約束の展開を迎える訳だが、まさか一日酔いで寝坊しましたとは言え無いので適当にごまかす。

目の前でコメカミをひくつかせながら自身の理性を抑えてる教師と、その流れを呆然と見ているうん十人単位の餓鬼共もといクラスメイトがタルい二人のやり取りを眺める。

「もういい……早く座れ」

「うーー」

暫くジト田で俺を見てた教師だったのだが、やがて折れてお咎め無しで俺を席に着かせると授業を再開したのだった。

座つた時に善吉君と不知火さんが軽く苦笑いしてたのは何故だか印象的だつたぜ。

席に着いて早々に睡眠学習モードへと移行した俺はいつの間にか放課後に突入、更にいつの間にか生徒会室へ召喚されました。

「一組の担任から聞いたぞ。今日遅刻したそつだな？」

「……」

そして何故だが、正座をさせられます。

目の前には生徒会長さんであるめだか君が居てその後ろで田安箱のチェック中の善吉君、そんな物（投書）より俺をフォローしておくれよ……。

「スマン。これはエベレスト山より高く、マリアナ海溝より深い訳が……」

「まう、言つてみろ

口元に扇子を当てながら何処かの時代劇風な取り調べを受ける俺なのだが、ハッキリ言ってそんなデカイ例えにする程の理由なんて無い。

だって昨日は深酒をしてからの只の寝坊だもの。“響30年”とかいう少々値が張りそうだが、なんとも美味そうな名の酒が5本限定で売つてたのをついつい買い占めてしまつて案の定美味かつたから、ついつい夜遅くまで飲んでしまつただけだもの。

「どうした？ 言え無いのか？」

「……」

どうしよう、よくありそうな言い訳『両親が危篤だったんですね』は、両親がいないという事を知つてしまつているこの二人には通用しないし、かと言つて正直に答えた所で動機が不純過ぎて普通に怒られてしまう。

最悪それが原因で『ガチ補習コース』直行だ。

それだけは何とか避けなければ……クソッ！ 何で俺がこんな馬鹿らしい言い訳を考えなければ……これが年上でしかもお姉さん氣質がバシバシの家庭教師だったら『色々と至らないと思いますが、何卒ご鞭撻の程宜しくお願ひします！』と嬉し涙を流しながら言つと思うのだが、その補習教師が目の前居る、1万歩譲つて同年代の餓鬼……そんなの、何が悲しくて一緒に勉強をせなアカンのだ。

「ね、寝坊です」

結局言い訳らしい言い訳も浮かんで来なかつたので、正直に言う事になつた……ああ、もう嫌。

それから約2・30分程の時間を使い、めだか生徒会長様のありがたいお言葉といつ名のお説教を受け、説教だけで補習は無しになつた。

このサプライズにはその場で小躍りする程喜んだ。

「そんなこんなで本日の投書は3件 バスケ部部室の普請要請に学食の新メニュー開発そして、子犬探し、だ」

「子犬探し？」

（むづ！ 来週の日曜日は設定Aイベントか……）

ありがたいお説教も終わり、生徒会のお仕事モードへと移行した一人の後ろでパチンコ屋のイベントを携帯でチェックする俺。仕事よりも趣味を優先するのが俺なのだ。

「ではバスケ部は私、学食の方は零、貴様が担当しそう……零?」

(フム、新台60台導入か……少しあも捨て難いな)

新装開店は大体オールラウンドにしててくれるからな。
だが、少し遠めだな。

「おい、聞いてたのか!？」

「つおつ! な、何!？」

耳元で呼ばれたので、一瞬心臓が止まるかと思いながら、何事かと
声のした方向へと向くとめだか君が不機嫌そうな顔をしながらコチ
ラを見ていた。

「ええつと、何か?」

話を聞いて無かつた俺からして見れば、この状況は訳が分からない。

「……貴様は学食の件を担当だ、だ。聞いて無かつたのか?」

「あ、ああ～ハイハイ分かりました。頑張ります、ハイ」

「聞いて無かつた様だな……」

「みたいだな」

何やら俺の背後で一人分のため息が聞こえたのだが、うん、次から気をつけますかな。

「ところで、善吉君は何をするんだ？」

「やっぱり聞いて無かつたる？ これだよ」

「ハハ、面白ねえ。どれどれ…………善吉君一生のお願いだ、この学食の仕事と交換してくれ頼む、いやお願ひします！」

何気無く話を聞いて無かつたのをカミングアウトしつつ、善吉君の

担当する投書の内容を見てもの凄く善吉君と仕事を代わって貰った
い衝動に駆られ、自分でも歴代1・2位にランクインする勢いのあ
る土下座をかます。

「なつ！？ オイトイ、いきなりビーフしたんだよ！？」

「頼むっ……！ 僕は昔から犬が大好きなのだ！ 頼むうう！！」

超困り顔の善吉君を無視した土下座だが実際問題、犬好きだからつ
て代わって欲しいのでない。

投書の差出人の名前と学年を見て代わって欲しくなったのだ。三年
二組、秋月。かわいらしい犬のイラストに文字……間違いなく女子、
更に年上、俺のやる気ボルテージは一気に上がったという訳だ。
正直学食の新メニューなんて善吉君にも出来る仕事だからな、変わ
つて貰えればお互いハッピーだ。

「うへん

「どうだらうか？」

何やり考え込んでいる善吉君。

それに対しても俺は『考えるな！ 感じるままに俺と仕事を交換しろ
！』と念じまくる。

「いや、ほらめだかちゃんが俺に指定して来た仕事だし本人に許可も取らずに仕事を代えるってのは……」

横目でめだか君をチラ見しながら言ひ善吉君、対してめだか君は目をつむり紅茶を飲んでる。

「フツ、なら本人に聞けば良いのだ……めだかちゃん！ 別に代わっても良いよな？」

妙に絵になる姿で静かに紅茶を飲んでるめだか君に、確認を取る。暫くするとゆつくりとティーカップを受け皿に置き皿を開ける。

「私は別に構わんのだが……」

よしそしゃあ！ 言動取つたあ！

「ほら見ろ聞いたか善吉君……後は君が首を縊に振れば……『だがー』 アン！？」

会話に乱入して来た主であるめだか君を見ると、皿をカツと見開いて俺を見ていた。

思わず喧嘩を売られた様な返事の仕方をしてしまったのは仕方が無いだろう。

「何だよ？ 何かあんのか？」

「零よ……貴様、そこまでして代わって欲しいのなら、それなりの理由があるのだろうな？」

「は？」

「そうだぞ。お前、時たまおかしな事を言い出すからな」

善吉君とめだか君に理由を言えと迫られた。

まあ、理由位は言つても良いかな？ 別に邪な理由じや無い……筈だし。と思い正直に理由を述べると、段々とジト目になりつつあるなっていく一人、そして。

「分かつた。代わって貰いたい理由は良く分かつたよ……」

「おおつー なう」

希望の光が見える未来を想像しながら『オラ、ワクワクすっぜ！』の気持ちで次の言葉を待つ。

「善吉……」

「ああ

(ワクワク)

「早く行け、子犬捜しにな……」

「了解

「えつ……?

「零、貴様は学食担当だ。私がやつた人選振り分けに変更は無い。
早く行け！」

「あ、あれ？ さつき『代わる事は別に構わない』……って

「私もバスケ部の仕事を開始するかな……」

「おう、じゃあまた後でな

「ねえ、聞いてる?」

何処からか出して来た虫取り網を引っ提げながら生徒会室を出る善吉君とめだか君。
出てつた事で独りになる俺。

「な……何故じゃああああああ……」

思わず頭を抱えて叫んでしまったのはじょうがないだらつ。

滞る事無く学食の件が終わったので、報告&帰宅の為に生徒会室へ
と向かいながらブシブシと独り言を呟つ。

「クソッ！ 犬探しの方が良かつた……」

腐った女みたいに未練タラタラな状態で歩く。
確かに学食の件の時に上級生が居たのだが、いかんせん全員餓鬼臭
かつたのだ。

ああ、でも教育委員会とか変わった名前の委員会と今回で学食新メ

「ユーを考えた時に会った、米良 狐呑さんとかいう人は少し違つたかな、軽くクール入つてたぽいし。まあ、俺がサンプルとして作った飯が気に入ら無かつたのか、終始ガンつけられただけだったがね。」

「フウ、早く帰つて酒でも飲みたいぜ……」

「今日の俺は良いこと無しだし、そんな時はさつやと帰つて寝るに限るな。」

「で？ 犬畜生にズタボロにされた揚句に捕まえられず、のこのこと戻つて来たのか？」

「……ハイ」

「上から下までズタボロの善吉君に、鬼の首を取つたの如く罵言を浴びせる。代わってくれ無かつた恨みはデカイよ？」

「……というわけでございまして、不知火と一緒にターゲットを発見するも捕獲には失敗。その後の逃走を許してしまいました」

めだか君に報告する善吉君の後ろ姿が寂し氣に見えなくも無いが、俺は全く同情はしない。

俺に代われば犬ヶ口の一匹や一匹、即座に捕獲してやつたんだからな。

「やうか……まあなんというかアレだな。取り敢えず貴様等の仲の良さは不愉快だな」

「ふわあ～あ

既に興味が失せた俺はソファーにねっこりがりながら、一人のやり取りを右から左で聞き流す。

「要するに、行方しれずとなつていた約半年もの間に、子犬は成犬になつてしまつたというわけか？」

「あー……まあ、そんなトコだ。いやそれどころか、あいやあ完全に野性化しちまつてるよ」

（今日の夕飯何にしようか。たまには外で食つのも悪く無いな……）

「一応投書主にも会つてみたんだけど『なぬつー』……なんだよ零？」

夕飯の事を考へてながら何となく聞いてみると、晩御飯の発音に超反応する。

「お前……会つたのか？ 秋月先輩！」

「ああ、やつだね……」

「どんなだった？」

「は？」

「いやだから、どんな感じの女性だった？」

会つたんなら是非とも感想が聞きたい。
聞く位なら別に罪にはならんしね。

「あ～ それがいかにもつて感じのお嬢さんでな？ とてもじやねーが犬の事は言え無かつたよ」

お嬢さん……か。

「あつせ、善吉君」苦労

何か急に冷めるのを感じながら、再びソファーに寝転がる。

「何だよお前、急に態度が変わったな」

「ああ、うん。まあいいじゃん、ほら続きを続き」

「あ、ああ」

報告を再開する善吉君。その後ろで急に冷めた感情になりながらソファーにダイブする。

お嬢様タイプは俺の趣味じゃ無いので、一気に興味が失せた。

つーか秋月つて人は馬鹿なのか？ 犬を学校に連れてくるのかよ普通。

このクソ広い学園で逸れたらそう簡単に見つからぬ事ぐらい考慮しろよ、第一何で犬の種類がウルフバウンドなんだよ。よく今まで人を襲わなかつたな、犬の方がよっぽど利口じゃねーか。

「やはつこの件……私が動いづ」

俺が秋月さんの事を考えていろと、どうやらめだか君が動く事になつたらしー。

なら俺はお役御免だよな、ってことだ。

「んじゃあ、俺は帰つていいか？ 学食の件は片付いたし〜」

「む……まあ、良いだろ。学食長からも元アの報告を受けたからな」

「そういう事だから俺は帰るぜ」

「ウム、では明日な……遅刻するなよ？」

「わかつてゐるって

一々念を押すな。遅刻しそうだらうが。

「じゃあな零一。」

「おひ、善吉君も頑張れよ〜」

軽く挨拶を交わし、俺は生徒室を出た。

「たりり～つり～つ」と

少し早めに学校を出るのか、少し「機嫌に近い気持つで昇降口を出る。

「塙～ 塙～ 先前で良へあるのはよしそ～」

適当に考えた歌を歌いながら歩いてると、周りの餓鬼共にクスクス笑われた……が今の俺は気にしない。

「～ ん？ ありやあ

裏口の門から帰らつと歩こうとして、何かが俺の目の前を行つた。

「……何だありやあ？」

身体中傷だりけで『俺に構う奴は食つやがれ』と言わんばかりの雰囲気全開の、おおよそ犬には見えない单なる獣だ。

「あれが善吉君達が探してた犬か？　ハードルたっけーなオイ」

あんな出で立ちの犬ッ 口口なら善吉君のあの傷は納得だわ。
ん？ 目が合つた、アレ？ 懇つてゐぞ？ そして何故低姿勢なん
だよ…… オイまさか。

『ギヤオオオ！…』

「うわっ…」

いきなり俺に向かつて飛び付いてきやがつた。

咄嗟の事だったので、右腕を前に出したら見事に噛み付かれた。

『グルルルル！』

「イ、デデデ！ 何で俺に噛み付くんだよ、しかも犬なのに。『ギヤ
オオオ！』 つて……」

普通なら腕が食いちぎられる位の頸の強さなのだろうが、生憎俺の
肉体は普通を通り越してるから血がドバドバ出る程度だ。

「オイオイ、犬に噛まれて死ぬ実験はもう体験済みだから、テメエに噛まれても嬉しかねえぞ？」

『ピクシー』

声色と顔つきと気配を変えて、右腕を食いちぎりとする犬口を睨むと、急に犬口の様子が変わりだし、噛み付いて離さなかつた右腕から離れる。

「フンッ！」

『キャインツ！…』

すかさず、調教目的のゲンコツを食らわせると、雷に怯える犬みたいな鳴き声と共に気絶してしまった。

「ハア～ 制服に穴が空きやがったな……あの秋月つてセンパイを齧して……いや、やめとこ傷は無くなつたし」

既に傷が塞がつた右腕を眺めながら、齧迫材料が消えた事を残念に思いつつ、気絶した犬を踏ん付けながら学園の門を出たのだった。ちなみに、その数分後に犬のコスプレをしためだか君とその後ろに

着いていた善吉君と不知火さんが氣絶した犬ツコロを見て大騒ぎしたのは次の日になつて知つた事だ。

続く

10：「いいか？ 何度も言つては無いけど俺は年上好きなのだー」（後書き）

それではまた次回

111：「反體王ひて呼ばれてる位だからこいつきり鉄仮面と水平一連式ショットギ

前半と後半に分けます。

てな訳で前半です。

ちなみにこの主人公は変に正直と言いますか……キャラ男予備軍と言いますが……とにかくどうぞ。

あと後書きに質問的な奴を載せてみました。

11・「反則王」って呼ばれてる位だからつきり鉄仮面と水平一連式ショット

昨日は疲れた……。

なんせ、めだか君に恨みがあるとか無いとか吐かしてたエセ不良君達を善吉君と一緒にになって叩きのめしたのだ。

と言つても手を出したのは善吉君であつて俺は一切手を出してない。だつて、手を出したら向こうが死んじゃうし、それじゃあ『死ぬ』が行動理念の俺からしたら考えられませんからね。

なので、向こうがどつから引っ張つてきたのか知らない、釘バットやら鉄パイプやら模擬刀などの凶器で俺に襲い掛かつて来たのを真っ向から受けたやつたら、顔を真っ青にした揚句氣絶しやがったのだ、『自称グレてます』の癖してチキンな野郎だ。

まあ、殴つて蹴つてを繰り返して作った傷がまるで“元に戻るかの様に”修復していくのだから普通の人間の神経だつたら氣味が悪くでしょうがないだろうけど。

ちなみに俺の外から貰つたこの力、再臨リセイツの力についてだが、善吉君とめだか君と他数名はある程度知つてゐる。……といつても、彼等の認識は“傷の治りが異常に早い”程度だがね。

EP:11 Start

てな訳で昨日の事を思い出しながら、善吉君と並んで生徒会室へと向かつてゐる。

お互い何気ない談笑つて奴だ。

「しかし昨日の出来事クーデター（笑）は間違つたつて事にし

て、本人に言わん方が良いかもね

「そうだな、これは俺達の胸の中にしまつといひ

誰だつたかのくだらないクーデター事件についての話だ。

「てか今更なんだけど君等つてさ、よく俺と一緒にいられるよな？」

「は？」

突然話の内容をすり替えたので、キヨトンとした表情の善吉君。

「いや、さ。俺の身体つてさ、どんなに殴ろうが、蹴ろうが、刺そ
うが、斬ろうが、落とそうが、すり潰そうが、その場で出来た傷が
瞬く間に修復するんだぜ？　君等から見ても気持ちの良いもんじゃ
無くな？」

むしろその逆だ、近付きたくも無いと思うのが普通の人間の考え方だ、
と何時に無く弱ネガティブ思考になつてると、善吉君は「んな事か
よ」と言つた後、続けた。

「まあ、なんだかんだでお前の場合は“アイツ”と違つて他の人間の書になつて無いしな。お前、中学の時は単なる素行の悪い不良中学生で通つてたし」

「ふ～ん?」

確かにあの頃は、授業をサボる程度に留めて置いてただけで、暴力沙汰は無かつたなそつこや。

それに、善吉君の言ひつ“アイツ”とこゝのは、恐らく球磨川君の事だろつね。

善吉君つたら彼の事を死ぬ程毛嫌い＆怖がつてたし、でも今はどうなんだろつか、会えればトラウマ再発かな？

「まつ！ そりこりつ訳だから零。気にせずめだかちゃんを手伝つてやつてくれや

柄にも無く頭を下げる善吉君。

うん、まあ……手伝つちやあ手伝つねば、俺の本当の目的を知つた時はどんな反応をするんだろつね。

「ああ、可能な限り手伝わせて貰つよ

「おうー。」

まあ、時期が来るまでは君等に従わせて貰うよ時期が来るまで、ね。

「！？」

「およ？ 考え事をしてたら善吉君がひつくり返つてらあ。

「どうしたよ？ 善吉君……ってああ、なるへそ」

「善吉、零。今日は柔道部に行くぞ」

下着姿のめだか君が柔道着を掲げながら言つてゐる。

相も変わらずの露出狂つぱりに感心するぜ。

うーん、これが年上のお姉さんだったらと思つと悔やまれるぜ。

「鍵をかける！ カーテンを閉めろ！ 人目をばかれ！！ 何遍
いつたらわかるんだ！！」

疾風の如き動きで扉、窓、カーテンを閉めてめだか君に怒鳴り散らす善吉君だが、その手のタイプの人間にやあ無駄だろうぜ、と思いながら一人の不毛な争いをボケーッと眺めるのだった。

「柔道部？」

「つむ、柔道部部長の鍋島三年生は知ってるな？ 彼女から日安箱に投書があつたのだ」

「鍋島つて、特待生チームトクタイの鍋島猫美さんか？ あの有名な柔道界の反則王と呼ばれたあの人？」

反則王？ 誰だそりやあ。

生憎、最近まで人付き合いもへつたくれも無かつたのでその鍋島とかいう人の事は知らない。

唯一分かるのは女性……しかも三年生つて事か。

「フーム……興味あるな」

「ほう、貴様がそんな事を言つなんて珍しいな」

「まあ、人間ですから興味位は持りますぜ？」

「まあ、何にしても行つてみよつではないか。柔道部といえば懐かしい顔にも会えるだろうしな」

「あ、ああ……」

「懐かしい顔?」

「零。貴様も知ってる顔だ」

俺も知ってる? ううん……ますます分からない。
まあ、行ってみれば分かる事か。

「失礼します」

「おお、やつと来たか」

「……チツ」

「あからさまな舌打ちは止めろ」

つー訳で俺は柔道場……では無く職員室に居た。本来なら俺も一緒に

に行こうとしたのだが、悪意のあるタイミングでの担任の呼び出しを喰らつた、呼び出された内容は大体分かる為に苛々する。

「……今度から気をつけよう。」

「…………ハイ」

「よし、この話は終わりだ。早く行け」

「失礼しました」

予想通り、似たり寄つたりな話題での説教を喰らつた。頭の中で何百回になるか分からぬ程、目の前でウダウダ吐かしてる教師を様々なシチュエーションでSAT SUGAIしていたので8割は話を聞いて無かつたがね。

その後、得に何も無く柔道場に到着。

例によつて剣道場と同じ位にデカイ道場なのは言つまでもなく、こんなもんに金を掛けるのが理解出来ない、俺なら売り飛ばして直ぐ金にするね。まあ、所詮人によつて価値観は違うのだから、只の道場に無駄に金を掛けまくる人からしたらそれはそれは素晴らしいのだろう。

「すんませ～ん、遅れますい～た……って、うわ～お、モウレツウ」

柔道場の中はまあ～凄かつたわ。

いやだつて数名以外の人間がお昼寝タイムなんですもの。

「むつ……零か。遅かつたな」

「「ゴメンよ、思いの他長引いたんでね」

「フン、普段から真面目に授業に出てればそんな事にはならなかつたんだ。自業自得だな」

「返す言葉もないません」

「まあ、良い。後少しで鑑定も終わるからお前もあそいで居る善吉と一緒に待つてろ」

「ほいー

めだか君が後ろ指を差した先に居る善吉君の元に行くと、他一人の柔道部員がいる。

つーかその内の一人つて……そういう事かいな。

「よお零、遅かつたな」

「君は……」

「ほお？」

何時もの様に挨拶する善吉君にちょっとびり顔が青い様な様子の金髪ロングイケメンに、誰だか分からない人。

「ん、先公の話が嫌に長くてね……っと、久しぶりですね阿久根センパイ?」

「……」

善吉君に理由を説明しつつ、金髪ロングイケメンもとい阿久根君に挨拶をするが、あからさまに警戒してますな顔で俺を見てくる。

「へえ？ めだかちゃんが俺も知ってる顔つてんだから誰かと思いま
いや……いやはや、まさかの阿久根センパイだったとはねえ……意
外だわ」

普通に言つたつもりなんだが、阿久根君は氣に入ら無かつたのか睨
みが強くなつていぐ。

「意外？ ビックリの意味だ……」

「んだよ……そんな睨まなくとも良いんじゃありませんか。俺が言
いたいのは、中坊の頃の貴方から考えてたら今の状況が信じられな
いって意味ですよ」

まあ、それもこれも俺が勝手に阿久根君に期待しただけなんだが。

「……」

警戒と軽い恐怖が交じつた睨み方で俺を見る阿久根君。

その空気がキツイのか流石に善吉君と……誰かさん、得に善吉君が
オロオロしだす。

「お、オイ一人共。落ち着けって、な？」

「俺は至つて平常心だぜ？ 善吉君。だけど向こうが敵意バンバンだからねえ？」

「……うー。」

ニヤケ顔の俺が氣に入ら無かつたのかより一層睨みを効かすが、殺氣を出すならもうちょい真面目にやって欲しいもんだね、これならヤー公の睨みの方がまだ怖いしな。

「まあまあ、阿久根君に……霧生君つていうたかな？ 何があつたか知らんケド思い出話もやいまでこしきや」

「あ？」

横からいきなり話に割り込んで来たもんだから、例によつてまた喧嘩の口調が出てしまった。

この癖早く治さないとマズイな。

「そんな睨まんといつてーな……」

「「」みんなさーい。」」れ半分癖になつちやつてて……」

「本当だぜ、早く直せよな？」

「わ～とるわい」

「グホツ！」

後頭部に両手を組ながら軽口を叩く善吉君に軽くイラッとしたので、空いていた脇腹に軽い肘打ちをすると良い感じで入ったのか、その場で悶絶する。

「つたぐ、一タリアクションが大袈裟なんだよ……。つとんな事より自「己」紹介を、生徒会“役員補佐”の霧生零です」

悶絶する善吉君をほつと/orて、名も知らぬ女性に自己紹介をする。相変わらず阿久根君は睨んでくるが、これから先もつ君に用は無いから何もしないんだがなあ。

「ハハハ～寧にどつも。鍋島猫美です、ビーナンショウ」

握手をしつつ名前を告げられた、がその名前を聞いた瞬間思わず鍋島さんの顔を見る。

「？ なにか？」

珍しい物を見る様な目をしたのが気になつたのか、聞いて来る鍋島さん。つーか、え？ この人が善吉君の言つてた反則王さん？

「いや、善吉君から反則王さんの話を聞いたから、どんな人なんかなあつて思つてたら、まさか貴女が……」

「それはどういう意味や？」

「うーん、俺の勝手な想像ですが『俺の名前を言つてみろ』とか『兄より優れた弟など存在しねえ！！』や『馬鹿め勝てばいいんだ！』とかいう鉄仮面被りの人みたいな外見を想像してたもんで」

「や、そつなんや」

反則の“王”つてんだから、そもそも男だと思つてたしね。

「それがこんな美人さんだとは……うん、来て良かつたです」

「はー?」

「お、お前何言つてんだよー!?」

「まさか君がそんな事を言つとは……意外だ」

俺の言葉にビックリした様子の鍋島さんと善吉君。阿久根君は冷静に俺が言つた事が意外だつたらしい。

つーか鍋島さん普通に美人じゃん、事実を言つて何が悪いんだよ。

「意外つて阿久根センパイ……貴方は俺がホモか何かに見えたんですか?」

「い、いや。そういうつもりじゃ……」

「それと善吉君。美人さんに美人と言つて何が悪い? 僕は美人には美人、バスにはバスとハツキリ言つぞ?」

「あ、あのなあ……」

俺が言つた事に、呆れ顔の様子で返す善吉君。

今に始まつた事じやないが、コイツ等つて美人を見ても案外平氣な

顔して会話するよね。

俺なら迷わずナンパに走るってのしさ。

といつても今回はナンパじゃ無くて純粋にそう思つただけだがね。

「いやあ、こんなイケメンに言われるなんて、何か照れるわあ

ううすらと顔を赤くしつつ照れる鍋島さん。

う~む、やはり美人だ。

「アハハ！ ありがとござります。つてそつだ、後でメルアド交換……ギャン！…」

連絡先の交換を持ち掛け様としたら横から結構な衝撃を喰らつた。衝撃の正体は名も知らない柔道部員で、どうやらめだか君がこじらに投げ付けて来たらしい。

鍋島さんと善吉君と阿久根君がそろつてピックリ顔だもん。

「イツテテ……オイめだかちゃん！ 何すん……だ？」

途中で言葉が詰まつたのは仕方が無い、何故だから知らないがめだか君がすんごい氷点下の目で俺を見据えてやがるのだ。

「あ、あのお？ 黒神生徒会長、一体いかがされました？」

場合にもよるが、こういった眼力の持ち主から睨まれるのは、肉体の暴力より怖い時があるのだ。だからつい下手にしてしまうのは仕方が無い事なのだ。

「貴様……私は善吉達と談笑しながら一緒に待つことは言った。しかし、誰がナンパしろと言つた？」

「あ……いやだって美人さんがいたら声を掛ける事位は常識……いや申し訳ございません、だからその柔道部員さんをコチラに投げ付けるのは勘弁して頂けないでしょうか？」

いつの間にか発射体制に入つてた柔道部員さんを見て、瞬時に謝罪をする。

こんなアホみたいな事で死ぬのはビーセ無理だし、だつたらせめて投げ付けるのは男子部員じゃ無くて女子部員……あつ、また男子部員が飛んで……。

「あべしつー」

上手い具合にお互いの頭がヒットして、余りの痛さにその場で悶絶する。

「ひ、人は余程の事が無い限り、真つ直ぐ飛ばない筈なのに」

「フン」

俺の疑問も『そんなもん知らん』といつ顔をされてバツサリと切り捨てられた。

「零、今のはお前が悪いと思つぞ？ あの柔道部員には悪いが

「オレもこの虫の言つ事に同意する、君が悪い。……しかし、相変わらずめだかさんは勇ましい！」

「あ、アハハハ～」

どうやら善吉君と阿久根君は俺の味方では無いようだ。……覚えてやがれ。そして鍋島さんは苦笑いした顔も美人だつた。

「さて、鍋島三年。阿久根一年以外鑑定は終わつた、後は先程も言った通り善吉と阿久根一年の試合で最後だ」

「し、試合？」

「ああ、そういうれば貴様には言つて無かつたな。阿久根一年は善吉と試合をする形で鑑定するのだ」

「あ、ああそりでっか……」

つーかこの状況を誰も心配してくれないのであれば……おじさん悲しいよ?

「霧生君……大丈夫かいな?」

と思つたら鍋島さんが普通に心配してくれた。
何だろう、目から汁が出て来た。

「グスッ……貴女だけです、俺に優しい言葉を掛けてくれるのは、
やべえ惚れそうになりました」

「……………ま、まあ、黒神ちゃんが怒るのも分かる気が
するわ、ナンパはアカンでナンパは」

「いや、別にナンパなつもりは無いのですが……一応以後気をつけ
ます」

そもそも美人な女人に話掛けただけでナンパ扱いしやがるめだから
君の認識が異常なだけであつて、普通の人間からしたらあんなのは
挨拶みたいなもんだ。

それと何故か『惚れそう』の件をスルーする鍋島さんがチョイと氣になるが、取り敢えず頭の隅の方に置いといて、善吉君と阿久根君の試合を見学するのだった。

続く

111：「反対に呼ばれてる位だからこいつ鉄仮面と水平一連式ショットギ

恋愛描写って入れる方が良いのか？ それとも入れないべき？

このお粗末話を読んで頂いている皆様はどう思なさるかね？

12・「おじテメー！ やのわせ笛吹くの止めないと鼻に一発痛いの食らは

後半ですが、タイトルに意味も何もありません。

つーかもはや原作沿いでは無くて単なる主人公の長考タイムになつていて、その上主人公のキャラ男予備軍全開モードの回だつたり……。

まあ、読んで後悔しないという鋼の精神力を持つ方はお読み下さい。

それと、いつの間にか評価が340位になつてました。
いやホントに恐縮です。これをバネにしたいと思います。

それと、感想をくれたアキスマンさん超ありがとうございます。

ちゅう訳で、俺は善吉君と阿久根君の試合とやらを見学をしている訳ですがハッキリ言おつ……退屈だ。

めだか君と鍋島さんは善吉君と阿久根にお熱（試合の様子を見ている意味で）で他の柔道部員も同様だ。

その中で欠伸するのを我慢しながらボケーッと見ている俺は完全にアウエー感全開つて訳だ。

あつ……阿久根君の巴投げが綺麗に決まつてらあ。

「退屈そつだな零

「んあ？」

阿久根君の一本背負いが決まり、投げられて早四回目の善吉君を身体にフワフワした感覚を覚えつつ見ていたら、不意にめだか君から話し掛けられる。

「まあ、柔道のルールを知らないので何がアレなのががサッパリとわからなくてね……」

「フム、なら私が実践を交えながら教えてやろうか？」

「結構だ。只単に自分を痛めつける趣味は無いんでね」

「そうか……」

めだか君の提案を断ると、そのまま視線を戻す。先に言つて置くが、俺は死ぬのが目的であつて、自身を痛めつけるマゾヒストの氣は無いと胸を張つて断言する。

第一あの程度では死ねない、たかだかスポーツの柔道なんかに興味は無い。

いや、柔道をこよなく愛する人達に失礼だから『なんか』呼ばわり事は訂正しよう。

話が変わるが、さつきから何か隣に居るめだか君と鍋島さんが天才だかどうとか『こちや』『こちや』と言つてる気がする。

盗み聞きするつもりは無かつたのだが、どうやら鍋島さんは天才がお嫌いらしく、対してめだか君は「天才等いない」と言い張つてる。俺は思う……めだか君よ自分の姿を鏡でみたまえねつて。

正直、努力だけではどうにもならん事が世の中にはごまんとあるし、この目の前で何やら語つてるがきんちは人間の持つ得意分野を集約した様な存在だからな。

これは俺の勝手な目測なんだが、めだか君近い将来、限り無く“俺に近い存在”になりえるかも知れない。

と言つのも“人から聞いたり見たりした事を自分なりに吸収し更に上げる”は俺の中にある力と似ている節があるのだ。

さしづめ、俺が無限^{ブラックホール}吸收だとするなら彼女は完全^{コンピュート}つてところか。

まあ、俺の力の様に“特技を吸収された人間が永久にその特技を発揮出来なくなる”とまではいかないと思うがな。

「お……せ……る……？」

まあ、めだか君がいい感じで成長してくれた時は俺の力を覚えさせて、その後に俺の中から力を奪い取ってくれればハッピーエンドなんですかねえ？ 上手く行けば良いのだが……。

「おじ零ー？」

「は？」

考え込んでいた俺を揺さぶる様にして現実に戻してくれためだか君が田の前にビアップで見えた。

「ええっと……何か？」

「何か？ ジャ無いだろ？ 阿久根一年生と善吉の試合は終わった帰るぞと、やつきから言つてたのに貴様……聞いて無かつたのか？」

「あ、ああ。悪い、考え方をしていて聞いて無かつた」

深く考え方をすると周りが見え無くなるのよどりやら本当の様だな。聞くところによると、善吉君が最後にナントカ刈りだつたかで阿久根君から一本取り善吉君の勝利らしいてな話を半ば右から

左へと受け流しながら聞いた。

まあ、これで視察が終了したって事なので……。

「てな訳で鍋島先輩……早速メールアドの交換を……っ！」

「あれ本気やつたんや？」

「な～にを言つてるんですか、俺は冗談で連絡先の交換を持ち出す程暇な人間じゃないツスよ」

そんなこんなで、人から聞いた連絡先の数はもう二百件近くになる。まあどれもこれも連絡先の交換止まりな訳ですが……。

「ナハハハ！ 全く、霧生君にはある意味じゃ敵わへんなあ。ええやうう、今から着替えて来るからちゅうと待つててな～」

「マジっすか！？ イヤツホーイ！ いつまでも待つてます！～！」

俺は正に今“飛び上がる程喜んでいる”を素でやつてる、周りの奴らの生暖かい視線なんてこの喜びに比べればミジンコみたいなもんや。

「あ、阿久根先輩……俺達つて」

「嘘うな……俺だって思つてたんだから」

「……」

後ろにいる善吉君と阿久根君からブルーな空気を、そしてめだか君からは何とも言えない視線を浴びせられてる気がするがもはや知らんの領域に入つた俺には効かないわ！

続く

おまけ

零

「送信つと……来ました？」

鍋島

「うんうん、來たでえ」

零

「暇な時は何時でもメールなり電話下さい。超喜んで受けますので

鍋島

「やくもで重って貰えると普通にうれしこわあ～

「フフン、俺は年上の女性（と重っても肉体年齢的ですが……）には一定以上の敬意を払つてゐつもつですから……」とそれは置いて、これからお帰りですか？」

「これからお帰りですか？」

鍋島

「やうやナビ……何かあるさん？」

零

「ん～ むし良かつた～」これから一緒に飯食いがてらの下校でもと……どうですか？ 門限とかあります？」

鍋島

「ん～ん、なによ。なんや？ こきなりテーーーーのお誘いかいな

零

「そう取つてくれて構い……こやうやく

鍋島

「ねね、重つて結構でキコする事を平気で口走るタイプやねえ

零

「『女性を誘う時はまごついて喋らばハツキリ言え』……そう教えられましたからねえ」

鍋島

「わうなんや。まあウチは構わないんやけど……」

零

「？ 何か？」

鍋島

「いや、後ろ後ろ」

零

「は？ 後ろ？」

「一体何が……と思いながら後ろを振り向くと。

めだか

「……」

妙に変な空気を醸し出しながら零を見据えるめだかがいたりした。がこの男、自身の好みから外れてる女子には一定以下の興味しか持

たないので……。

零

「何だいじつしたよ？ 早く帰れば？」

寧ろ邪魔だとあからさまに態度を表に出しながら言う零。
そして更にその後ろで、三人のやり取りを半ば忘れられてる節がありながらもオロオロしながら見てている善吉と阿久根の二人。

零

「あ？ 何だよ、さつきからずっと黙つてて……鍋島先輩分かります？」

鍋島

「さ、さあ？」

零

「まあ、この子が分からなくなるなんて何時もの話だから……とくだらねえ話は置いといて行きます……「オイ」 はあ、何だよ？」

軽くうなづいた口調でめだかの方へと振り返る。

めだか

「悪いが貴様にはこれから私の書類整理の仕事の手伝いをして貰つからな……今日は遅くまで学校に残つて貰ひうござつ。」

零

「はあつ！？ 嫌だよ、何で俺がやるんだよ。善吉君にでも手伝わせりやいいじやんよ」

めだか

「今日の善吉は阿久根二年生との試合のダメージがあつて無理だ。それに比べて貴様はダメージ処か今日に至つては仕事すらして無いからな、調度良いだろ？」

零

「べつ……。確かにそうだが、だが何も今からじや無べたつて……」

めだか

「もう決定事項だ。ほら、行くぞーーー！」

零

「グエッ！ 制服の襟を引っ張るな！ 嫌だ！ 俺はこれから楽しい楽しい下校TIMEなんだよーーー！」

めだか

「決定事項だから仕方が無い。それに、そんなに鍋島三年生と下校したいのなら、代わりにこの私が一緒に下校してやらん事も無いぞ？」

零

「ふ、ふざけんなっ！ 何が悲しくてテメエみたいなガキ女と一緒に帰らなアカンのじやい！ それにお前は歩きじやねえだろうが！」

！」

めだか

「知らんな、そんな事は」

零

「ぜ、善吉君、阿久根先輩、鍋島先輩！！ 誰でも良いからこの暴君を止めてくれ……って何で一斉に田を逸らすんだああああああああ！」

一同

「（ノ）愁傷様です」

ちなみに、零の学校滞在時間が過去最大を記録したのはいつまでも無い。

終了

12・「おこトメハ— やのいわせ笛吹くの上なこと事こ— 発痛この食らひ

フラグでは無い……筈だ—！

1-3：“『芸術は爆発だ……』って書いて、実際に国宝級の芸術品が爆発したこと

一時間で書き上げた為に結構おおむりっぽ感が否めないとは思いますが、悪しからず。

ちなみに最後のオマケについては“主人公がこの世界についてある程度心を許した”という描写みたいなもんなので、内容については「そんな事がありましたとわ」程度に捉えてください。

それでは鋼の心を持つ方はどうぞ。

なんやかんやで、その後阿久根君が生徒会“書記”として入る事になつた。

めだか君が決めた事なので別に俺としてはさして問題は無いのだが、どうも阿久根君と俺の仲はぎこちないとありますか、ギスギスしてると言いますか……つて感じだったのを見兼ねためだか君が俺と阿久根だけに生徒会の仕事をやらせた。

内容は手紙の代筆とかで、依頼人は三年の先輩しかも女性だったのに俺は珍しくやる気に満ちていたのだが、書かされる内容を知れば知る程にやる気が削げていつた。

というのも、八代先輩いわく書いて欲しい手紙の内容がラブレター的なアレだつたのだ。

俺としては何が悲しくて余所様のカップル成立の為に働くかなけりやならんと思うのと、その告られる野郎に殺意が芽生えていたのだ。その際、ブツブツと『呪詛してやる』や『両手両足をブツた切つて……その後』といつの間にか口に出していたのがマズかつたのか、二人には“危ない奴”的なアレだつたのだ。

その視線に腹が立つた俺は八代先輩に向かつて『テメエが告るんだからテメエの手で書いて渡せば良いだろうが。アン？ それとも何か？ 俺達に書かせりやあ告りが上手くいくとでも思つてんのかい？ だつたらパソコンで打つた文章でも印刷してそれを渡せば良いんじやねーの？』と仮にも先輩相手にタメ口＆因縁口調で凄んだところ、それが良い方向へと向かつてしまつたらしく一緒に居た阿久根君は何かに目覚めたらしく、八代先輩に半無理矢理な感じで直筆で書かせたのだ。

八代先輩も何かに気が付いたらしく、ものスゲエやる気と根性でラブレターを書き上げて告白したのだが、結果は知りません。んでその結果……。

「あつがとう」

とまあ、こりやかーな顔でめだか君に阿久根君とつこでに俺がお礼を言われた。

何ででじょう、先日（残業の件）のせいが全くと黙つていいほどに喜べ無いぜ、と田を回す程喜んでる阿久根君の横で思つ俺だつたりする。

これがここ数日に起きた面白い内容のダイジェスト。

EP14 start

「……ふわあ～あ

誰もいない日当たりの良い生徒会室にて俺は昼寝をしていた、じやなくてしようとしていた。
ソファーにねつこりがりながら思う事が一つ……俺つて何気に学校生活をきちんとしてね？ と。
授業はまあ……アレにしても、いつやつて何かに入つてただ働き同然の仕事らしき事をするなんて、以前の俺だったらまず有り得ないのだから。

「ん？ 霧生君か……君は相変わらず急け者だね」

長考タイムに差し掛かったところで阿久根君が入ってくる。
ちなみに阿久根君とは、ラブレターの件があつた後、少しだけ仲の
悪さが軟化した……と言つても阿久根君が一方的に毛嫌いしてたの
であつて、俺は別に阿久根君の事はどうも思つちゃいない。
そう……どうも思つちゃいない（…………）のだ。

「チヽツス！ 阿久根先輩。めだかちゃんも来て無いからこうして
ねつこうがつてるだけですからねえ」

俺の言葉にピクピクと口メカミが痙攣する阿久根君。
なんか知らないけど、俺が『めだかちゃん』と言つと音で反応する
玩具みたいに反応するのだ。
多分だが、俺がめだか君の事を名前で呼んでるのが気に食わないん
だろうが。

「……」

「……」

これ以上話す事は無いのでお互い沈黙する。

「お～っす……って何だ先に阿久根先輩と零がいたのか

お～、良いタイミングで善吉君の登場か、ナイスだね善吉君。

「よう！ 善吉君。授業は楽しかったか？」

「楽しくは無かつたが……お前出るよなあ

「やはりサボってたのか。全く、めだかさんが君を生徒会に勧誘した意図が全く分からぬいよ」

「ハハハ、手厳しいぜ阿久根先輩

「うして男三人になると自然と会話が成立するのだから凄い、流石は善吉君だね。

「絵のモデル？」

そう誰かが言つた瞬間に仕事が始まつた。

つーのも、依頼人の美術部員の誰かさん（名前を覚える気無し）が
言つには「コンクールに出展する絵を書いてるのだが、自分の満足い
く絵が書けなくなりスランプに陥つたのだ。

そこで絵のモデルとやらをめだか君に依頼した……つて流れな訳で。

「さあ、夕原同級生……存分に書くがいい！……」

美術室にての絵かきが始まりましたとさ。

「エッ…………… クセレント！… 素晴らしいめだかさん！
貴女は女神だ！…」

「おいおい阿久根書記、女神は言い過ぎであろう。せめて妖精と言
つたところではないか？」

「……」

水着姿でボディビルのポージングするめだか君の横で呆れ返つた顔
をする善吉君。

うん君の気持ちはわかるよ、かくゆう俺も「あ～あまたやつてるよ
つて気持ちだもん。

「つたぐ、なんで女神がボディビルのポージングをするんだよ」

「さあ？ 持ち上げられて気分が良いとか？」

めだか君はどうやら、持ち上げられると馬鹿みたいにはしゃぐ性
があるみたいだ。

「いや人吉君、阿久根さんの言つ通りだよ」

「何が？」

「今回の僕のテーマは『女神の浜辺』！ つまり女神でなければ描
く意味が無い！」

「あつや、そりやあ何よりだな……

なにやら力説している夕原君とやら。
てか女神で……。

「……ふつ」

「？ 何笑つてんだ零」

「い、いや別に……」

女神で、いや確かにめだか君は人間としての造りは良いかも知れないけど、女神はちょっと違うと思うのは俺だけか？まあ、そんな事は鼻から下のページが無くなつてでも言えないけど。

「駄目だア！ 描けない……僕には黒神さんが描けない！！」

俺がここに居る意味無くね？ と思い始めた頃に、いきなり絵を床に叩き付けながら芸術家特有の苦悩とやらに苛まれてる』様子の夕原君。

絵の様子を見てないので少し気になる俺は、床に放置された絵を善吉君と一緒に見る。

「ああ？ 何言つてんだ、いい絵じゃん」

絵を見ると、ポーズをして『いるめだか君がしつかりと描かれていた。

「うんうん、これでいいじゃん。いやこれがいい、てな訳で君の依頼は完了……」

「いや、人吉君に霧生君。僕には夕原君の言つてる事がよくわかる」

「……チツ」

クソ、上手く言いくるめひさつと帰れると思ったのに……余計な事を。

「この絵はめだかさんの『美』を表現しきれて無い！ モチーフ以上ものを描かなければ絵画とは言えんのだ！…」

知るかよ、君の田にはめだか君が何に見えてんだってんだよ。

「……その通りです。モチーフ通り描きたいのなら写真でも取ればいいんだ。僕達、アーティスト芸術家は常に現実以上を行かなければならぬ」

こりやあ、言いくるめる必要も無かつたな。

だつて言つた所で無駄だな面倒なタイプの人種だからねと考えてる中、夕原君は続ける。

「つまり、完成した『美』であるところの黒神さんには……芸術性がない！…」

めだか君を指差しながらバツサリと言い切る夕原君。
思い切り腹を抓り、爆笑しそうになつたのを押さえ込んだ自分に表
彰を送りたいもんだ。

「……フツ」

壁に手をつき『猿の反省』の如くポーズでブルーになつてゐるめだか君。

「お～いおい。君が余計な一言を言つてくれたお陰で我等が生徒会長様が面倒な事になりましたよ？」

「フツ、アーティスト芸術家とは勝手なものなんだよ霧生君。否！　勝手でなければならないのだ！！」

「あつや」

ああ、やつべ。多分何時もの俺だったら、この目の前に居る餓鬼を半殺しにした後に素つ裸にして屋上に逆さ吊りにしてるな。
だが、これは單なる餓鬼の我が儘だと思つてゐるから怒りは湧いて来ないのでこの餓鬼……いや夕原君は運が良いな。

「どーします阿久根先輩？」

「どーするもなにも、めだかさんがあんな感じじゃ……オレ達が代わりのモテルを探してくるしか無いだろ?」

「スマセーン。俺もう帰つていでですかね? 何かさつきから俺の存在意味が無い気が……」

さつきから処か、美術室に入つた頃から思つてたんだが。

「いや、お前はオレ達が代わりを探す間にめだかちゃんをなんとかしてくれ」

「本来ならオレがやりたいのだが、この際だから君に譲つてあげよう」

「ちょっと待て、それは単に俺に面倒な仕事を押し付け……『じやつ! そーゆー事で!』聞けよつ……!」

何時もの一人なら考えられない程の息のあつた動きで美術室から逃げた。取り残された俺は後ろをチラリと見る。

「ブツブツブツブツ……」

「舞い降りてくれえ！ 僕が描くに相応しい女神よーーー！」

「……」

正直こんな空間に1秒たりとも居たく無いのだが、仕方ないので俺はめだか君のブルーモードを取り除ぐのに心血を注ぐのだった。

「あー……なんだ。ほら元気だせよ、なつ？」

「モテルすら満足にこなせないなんて……私は駄目な会長だ」

「うわあ、面倒臭えええ！！！」

「いやまあ、今回は夕原君のイメージと君が合致しなかつただけだし、気にすんなよ」

「……」

「りや相当重傷だな……つむ、どうしたものか。
あつ、そうだ。」

「夕原君。余つてゐる画材道具つてある?」

「え? 準備室に行けばあるけど……」

「よし、ちよつと貰してくれ」

「? いいけど」

数分が経ち夕原君が画材道具一式を持って来てくれた。
さて、上手く行くか……。

「……」

「……! ? 霧生君、君は……つ!」

「あ~? 昔知り合いに絵描きの基礎を教えて貰つてね……と言つ
ても君等プロに比べたら月と鼈並だがね」「

(霧生君の手の動きが見えない! それでいて描かれてる絵はしつ
かりと絵になつてゐる……これで素人だと?)

しょ「うがないから、そこでブルーになつてゐるめだか君を描いてるんだが、はたして上手く描けるかど「うか……。つか、後ろで俺が描いてる絵を凝視してゐる夕原君がちょっと怖いんだけど。

約2分後

「まあ、素人が描きやあこんなもんかな？ 夕原君ど「う思「う？」

「……僕から見ても凄いと思「うよ。僅か2分足らずでこれだけ描けるなんて」

「まあ、全部鉛筆描きだがな……ホラめだかちゃん？」

「…………何だ？」

「…………」

めだか君の背後から蜃氣楼みてえな何かの幻覚が見えたので一人揃つて思わず半歩程下がつてしまつた。

「い、いやほひ。これ見てみん?」

「これば……私が?」

虚うな田を通り越した田で俺の描いた絵を見る。

「俺が今、そこまで落ち込んでためだかちゃんを描いてみたんだけど
く、どう思つ?」

「……絵は上手いが、モテルが酷いな

「あ、ありがと。でも今の君はこの絵みたいなもんさ。落ち込
むだなんて人間誰しもある事だからとやかく言つつもりは無い、だ
けどめだかちゃん? 俺はどちらかと言えば凛々しい顔ヅラをしながら
『生徒会を執行する!』って言つめだかちゃんが好きだぜ?」

「はあつー?」

「ーー?」

おつ、どうやらめだか君のブルーモードが徐々に解除されつつある
な? 後一押しって所か。

てか夕原君は何をそんなに驚いとるんだ。

「つー訳だから、や。俺は今“元気な姿のめだかちゃんを描きたい病”に罹ってるみてえだから、書かせてくんねーかなあ～」

これでどうだ?

「…………フツ、仕方ないな。そんなに描きたいのなら…………存分に描くがいい!!!!」

閉じた扇子で俺を差しながら、何時ものポーズを取るめだか君に『ミッショングランプコード任務完了』ミッション・コンプコードと思いながらも、慣れない事はするもんじやねーなど苦笑いしつつ、めだか君を自分の技量限界を掛けて描き上げるのだった。

「まさか、お前がめだかちゃんをここまで元気付けるとは……何をしたんだ?」

「ああ、色々な」

「てかわしきからめだかちゃんがすりと見てこるあの絵は誰が描いたんだ？ タ原のやつでは無いし」

「ありやあ、俺が描いたんだよ」

「ふ～ん零が……つて、お前が描いたのか！？ この壁に手をついてるめだかちゃんの絵もー…」

「やうだな～……なにか？」

「こやだつて、この絵……普通に上手いぞー…」

「あ～ そうなんだ。付け焼き刃程度の技術で描いてみたんだが」

（零の意外な特技を発見してしまった……）

なんか、変な事を考えてる善吉君の事はこの際スルーするとして、だ。

「何で諫早先輩がいんの？」

後ろで壁に掛けてある誰かの作品を見ている諫早さんの事が気になり、善吉君に聞く。

「あ、ああ。モデルだよ、絵のモデルをあの人人に頼んだんだよ」

「ナイス善吉君」

善吉君が連れて来るってんだからどんな奴を連れて来るんだろ? うと思つたら……。

「ふむ、どうやら人吉君。考える事は一緒のようだな」

善吉君の偉業を内心褒めていると、いつの間にか阿久根君が鍋島さんを連れてやって来た。

「阿久根先輩……」

取り敢えずお礼を言おうとするが。

「同じイ!? ハア!? オレの諫早先輩ナメないでくださいよー。この人脱いだらスゴいんですよー! ?」

「何をほざくか虫が！ オレの猫美さんは脱がなくともスゴいぞ！」

「

あつ？ この一人今何つた？ 脱いだらスゴい？ つて事は。

「オイコラアーーー！」

「「はつ？」」

いきなりデカイ声で俺も参戦したもんだから、ビックリした様子の善吉君と阿久根君。
だが今はそんな事はどうでも良い。

「見たのか？」

「は？」

「霧生君、君は一体何を言つてんだ

「だあかあらあーーー！ この一人の裸を見たのかつてんだよおーーーー！」

後ろで呆然としてた鍋島さんと諫早さんを指差しながら聞く。
答えよつよつては死刑執行だ。

「は？」

「へ？」

「『は？』とか『へ？』じゃねえよ」の野郎…！ なんて羨ましい
んだ馬鹿野郎おおお…！」

自分の欲望が前面に押し出されてる気がするが、気にしない。
それくらい重要なのだからな。

「いやいや、見せてないから…？」

「ウチもやで…？」

諫早さんと鍋島さんの一人の言葉を聞くまで、延々と阿久根君と善
吉君の一人に尋問紛いの行動を取り続けたのだった。

「最後に聞くが、ほんつと~~~~~に！ 見てないんだよな？
阿久根先輩に善吉君」

「「はい、お一人の裸体を見るなんて恐れ多い行為等、一切いたしておりません」」

田の前で正座させた一人は、心の底からやつてませんと土下座までしている。

……まあ、そんな事は初めから分かつてた事だから良いんだがね。

「フム、ならよい……釈放！…」

二人を正座から解除させ、そして……。

「いや～どうもお見苦しい所を見せて申し訳ございません……諫早先輩に猫美先輩」

「う、うん。それは別に良いんだけど」

「アツハハハ！ 相変わらず面白いね、零君は」

「いやいや、俺は結構本気でしたぜ？ もしあ一方の裸を見たとか吐かしてたら、そのまま処刑してましたからね～」

「「ゾクッ！」

俺の言つた事に反応して顔を真つ青にしてる阿久根君と善吉君、まあしようがないよな。君等がんな事を口走るのが悪いんだから。

「なんや知らんけど、地味に嬉しいわあ。零君にそんな風に思われるなんて」

「そうすか？ ハハハ、あざーす」

ザキ○マ風に挨拶を交わす、ちなみにお互いが下の名前呼びな理由は、俺がその旨の提案したら猫美さんが乗ってくれたのだ。とまあ軽い過去話はこれまでにして、いよいよ諫早さんと猫美さんがモデルとなる夕原君の絵描きが始まる。

「つてな訳で、アスリートとファイターの夢の共演やーー！」

先輩方一人の思い思いの衣装でモデルとなる。その姿に俺の心は『我が生涯一片の悔い無しーー』ぱりの満足感で

満ち足りてたのだが。

「次の方……お願いします」

バッサリとタ原君は切り捨てた。
そして多少なりとも回復しためだか君の横で『猿の反省』のポーズ
が二人増える。

「つ……」

「次々と犠牲者が……」

「芸術は人を脅す為の道具では無いというのが僕の持論です。正直、
あの二人は怖いです」

「……そこまでの信念でやつてるから何も言わんが、普段の俺なら
間違いなく君をミンチにしてたろうな」

うん、てかこの瞬間にも消し炭にしてあげたい位さ。

「ハア、仕方ないな。善吉君と阿久根先輩の一人はまた代わりを探
して来てくださいな。俺は先輩一人の心のライフポイントをなんと

か回復させますから

「す、すまねえな」

「あ、ああ。頼む」

今度は一人か……何とかなるかしら?

（更に数分後）

「ふう」取り敢えず二人の峠は越させたんだが……モデルがいな
いだつて？」

「ああ、断られた」

「オレもだ」

「チツ……参ったな」

どうやら誰だかは知らないが、モデルを頼みに言つたら普通に断ら
れたんだとさ。

「……仕方ねえ。」うなづいて、最終兵器を呼び出すかな

「「最終兵器?」」

「ああ、俺としては対価がデカ過ぎて呼びたくは無かつたが……」

とブツクサ言いながら携帯を取り出し、先日（10日前）に無理矢理メモリーに登録させられた相手を電話で呼び出す。
出るかな…………あつ出た。

「？ 誰だ？」

「まあ、奴いわく一分以内に来る 「やつほー 霧生君。呼ばれて飛び出てパンパカパンだよーーー！」…………な？」

「成る程ね、不知火か…………でもなあ？」

「うん、難しいと思うが…………」

「これで無理ならもう知らんな…………ってな訳で夕原君、ざいづよ？ 夕原君？」

何だ？ さつきから夕原君が「」 」 」 」とか言つてるが、鶏の真似か？

「これだあああーー！」

火山噴火の如く夕原君が叫びまくる。

「イツツ・ショータイムーー！」

あれよあれよと、不知火さんを着替えさせ、物凄い気迫で絵を描き

始める。

不知火さんつたらキヨトンとしとるぞ。

「そのあどけない横顔！　寸胴のようなボディ！　未成熟な四肢！
！　これまでのモデルとは比べ物にならない！　これが芸術だあ
ああ！！！」

「　　はうつ！」

多分無自覚であろう夕原君の言葉に再びダメージを喰らう不合格の
烙印を押されたモデル三人。

ああ、せっかく元気付けてあげたのに……。

そんな訳で無事描き上げた夕原君……俺の財布の中身を犠牲にして。

続く

おまけ

程無くしてコンクール課題の依頼を完了した俺達は。

不知火

「ううん、良く分からぬけど、霧生君が夕飯をご馳走してくれる

んだよね？」

零

「うん、 実際君のお陰で依頼が終わつたからね。 好きなだけ良いぞ？」

？」

不知火

「やつたーーー！ じゃあ早速行こーーー！」

零

「ちよい待て。 その前にやる事がある…… 善吉君、 阿久根先輩に諫早先輩とめだかちゃんと猫美さんーーー！」

零がその場に滞在している人間全てに声を掛けると皆、 零の方へと向く。

零

「つー訳で…… 僕はこれから不知火さんと夕飯を食いに行くんです
が…… 良かつたら皆も来ます？」

零以外
『へつ?』

零

「いやほら、皆さんには……得にモデルを頼んだ人達には色々と迷惑掛けちゃったし、お疲れ様でした」を込めた意味でどうかのファミレスで食わねえかなあ……と

一応、今回の依頼を通して何か思う所がある様子の零。
誘われた全員の反応は……。

善吉の場合

善吉

「いいのか？ 不知火だけでもかなりキツイぞ？」

零

「ああ、今財布には十萬位はあるからな、なんとかなんだろ」

善吉

「そうか……なら俺も同じに行しようかな

零

「そうか……サンクス！」

阿久根の場合

阿久根

「オレなんか誘つて、大丈夫なのか？　俺は君を……」

零

「フツ、その謝罪を込めての意味での……と言つたら？」

阿久根

「……いいだろ？、オレも是非行かせて貰いつよ」

零

「あつがどうぞこます！」

諫早の場合

諫早

「てか私つて、君と余り接点無いよね？」

零

「ハハツ！　そんな事気にしてたんですか？　俺としてはこれから仲良くなれば良いかなあ……って思うのですが」

諫早

「そう……なら私もお願ひしちゃおうかな？」

零

「ありがとうございます！」

めだか&不知火の場合

めだか

「フム、私は……」

零

「ああ、別に無理しなくてもいいぞ？」

強制参加じゃねーし

めだか

「そうでは無い……只、な」

不知火

「……」

零

「あ～そう言えば君等って……ふむ、なら今日だけはそんなしがらみを忘れてってのは無理？」

めだか

「……」

不知火

「アタシは別にかまわないよー 霧生君がいるしい？」

零

「……？ まあ、良くなは分からなが、めだかちゃんはどうすんの？ やつぱ無理？」

めだか

「いいだろう、不知火とは一度話てみたかつたからな……」

零

「そ、そな、ありがとう。不知火さんもいいかな？」

不知火

「あひやひやひやー！ アタシは霧生君に奢つて貰えれば構わないつて言つたでしょ？」

零

「うん、二人共ありがとな」

不知火

「うつ！ そんな愚まらなくともいいじゃん。気持ち悪いよ」

めだか

「ああ、それは不知火に同意出来るな」

零

「ハハツ！ 手厳しいぜ」

鍋島の場合

零

「てな訳で最後に猫美さんになりましたが、どうします？ てか俺としてはこれが本命だつたり？」

鍋島

「零君は、相変わらずドキリとする事を平氣で言つなあ？ まあ、ええよ。部活は引退したし、これから何があるって訳ぢやつ」

零

「つしゃあー ありがとつりやりますー イヤツホーイー！」

鍋島

「アハハ、子供みたいにはしゃいじゃって」

そんなこんなで、全員誘つ事に成功した零。自身の財布の8割のお札が消える事になつても、不思議と心は満ちてた。

不知火

「ほら霧生君。早くー！」

零

「痛たたたーー！ そんなに腕を引っ張んないでくれよーーー！」

鍋島

「あの二人、仲がいいなあ？」

善吉

「といつよつ……」

阿久根

「うん……」

零・不知火以外

『兄妹？』

終

13：『『芸術は爆発だ……』って言つが、実際に国宝級の芸術品が爆発した

前書きにもありました、主人公はほんの少しだけこの物語の世界に心を許してしまつてます……ある意味では危険な状態かも？

14：「実写版の利根川さんが『fuck you! ぶり殺すやつ』めりー

ちょっとカイジネタがあつたり無かつたり。

14：「実写版の利根川さんが『fuck you! ぶひゅあハハハ』めりー」

「結構いるなあ……」

「ああ、中々にシユールだな」

俺は初めての体験をしていた。

そう、田曜日の朝つぱらから学校に登校したのだ。その理由つてのは余り深くは無いのだがご説明させて頂こう。

今から約6日位のこと俺は何時に無く真面目に仕事、まあ世間一般に例えるならデスクワークだ。

しかし。

「……」

「……」

「また部費についてかよ。面倒だなチクショイ！ てか君等寝てる暇無いぞ！」

机に突っ伏している阿久根君と善吉君に激を飛ばすのだが、イマイチ効果が無い。この場に鞭か何かがあれば、バシバシとブツ叩いたのだがそれは流石に酷なかも知れない。てのも、机に置いてある書類の山、山、山！…が5つはあるのだ。

最初に見た時は思わず『えつ？ 何処の漫画？』と呟いてしまったのだが今更ながらここは漫画の世界だったと、最近この世界に馴染んでしまってる自分がいたりする。

まあその事は置いといて今は書類のお片付けをしなければ。

「……人吉クン。オレ 生徒会やめちゃ駄目かなあ？」

「あつはつは！ 逃がしませんよー 阿久根先輩」

阿久根君と善吉君が死にそうな顔をしながら、何やら言い合つてゐるが仕事片付け無いとまた居残りになつちまつ。

えーっと次の山は……また部費陳情かよ、金にがめつゝいなこの学校の奴らは。

「しかし……流石にめだかさんはさすがだなあ」

「俺達の十倍は働いてる筈なんですけどね」

「……ついで氣になるのは……」

「ええ」

「何故零（霧生君）がめだかちゃん（せん）と同じ動きが出来るんだ？」

「んだよ、俺がめだか君バリに働いてるのがそんなに信じられないのかい。」

「別に……柔道視察の件の時に、めだかちゃんにあの後本当に手伝わされましてね……その時にめだかちゃんの動きを大体真似てみただけでっせ」

「本當……あの時は二人だったから大変だったぜ。日付が変わる前に終わらせられたのが奇跡に近いよ。」

「……てかよ、無駄口叩いてないで、アンタ等もキリキリ働けよつ

「……」

「「は、ハイ……」」

充血した目で睨むと、即座に仕事に戻る。

（20分後）

「めだかちゃん、取り敢えず4山終わらせたぜ～」

「（汗）苦労、流石だな……が、まだ私の席の後ろににあるからそれも片付けてくれ」

と後ろ指を差すめだか君の背後を見ると、確かにまだ書類の山々が……。

「ううそーん？ 死角になつてて分からなかつたけど……まだこんなにあるのかよお～」

流石に限界だぞ。“秘技・ペン6本持ち”的お陰で地味に指が痛てーしょ。

「しかし、流石に私と零だけではこれだけの書類を片付けるのに時間がかかるな」

「ああ、それには全面的に同意だ。所詮俺は君の動きを猿真似しただけだし……つてオイ、二人共寝てねえで働けやつー！」

「あだつー」

「つぐつー」

机に突つ伏して睡眠モードに入っていた一人を叩き起しす。全く、油断も隙もあつたもんじやない。

「書類内容の殆どが各部活動の部費に関する陳情なんだよな」

「ウム、勧誘期間が終わり、部活動が本格化したのが大きいな」

「カツ！ 副会長はともかく、会計の不在はやっぱ痛いな」

「ああ、痛い所じや無いよ。そもそも今の時点で役員が揃つてないのがキツ過ぎだぜ」

まあ、その分の仕事をめだか君が全て兼任してるので凄い話だ。てか善吉君、なにナチュラルに会話に混ざつてるんだよ、お前の分の仕事はまだあるぞ？ まあ、言わないケド。

「元柔道部員の人間として言わせて貰えれば、部費は一円でも多い方がいいですからね。連中の気持ちもわかりますよ」

「ふむ、何をするにも先立つものには必要か」

「うとうん、まあ何をするにも先ずは金……だからな」

「この二年弱で一番身に染みてるからな……金の重要性つて奴を。

「とはいえ……増額できる部費の予算枠は限られておる。全員で分け合えば雀の涙程度しかならん。それだと公平性を欠くことになりそうだな」

「めだか君の言う通りだ。この学校は、馬鹿みたいに部活の種類がありすぎる。

なので、予算委員会から出た予算程度では足りないので。

「……だつたらこいつしませんか？ いつその事、増額枠を一つの部の総取りにしてしまつといつのは？ 例えば……オレが担当している業務の中に部活動対抗リレー大会というのがありましたでしょう？ あれで優勝した部が予算増額とか！」

「成る程……でもそれって陸上部辺りが有利になりませんかね？ 走るんだし」

「まあ、確かにそうだが……」

俺の呴きに阿久根君も考えるのだがその提案は良いこと思つ。
なんとかして上手い方向へ持つてきたいものだが。

「あ、だつたら丁度いいのが……えへつと、あ あつたあつた」

何かに気が付いた様子の善吉君が机の上にある書類をガサゴソと探
り一枚の紙を俺達に見せる。

「 「 「ん?」 「

「後で話そうと思つてたんだけど、田安箱にこんな投書があつた
んだ」

んで畠頭に戻る。

様は田安箱に投書してあつた内容“新設された50メートルプール
の活用”つてのを使い、部活動対抗水中運動会を開催したつて訳だ。

「結構集まつたなあ」

「陳情していた部活が全て参加か

「急なイベントだつてのによへあつまつたものだよ」

阿久根君の言つ通りだ。余程予算が欲しいのか。

「知つてゐる顔もいるじやん、剣道部に陸上部

「美術部に柔道部……つて猫美さんじやん。引退したんじや無かつたつけ？」

「あ、ホントだ」

ナチュラルに混ざつてゐる猫美さんに脱帽つてか？ と同時に田の保養だなあ、と親父臭い事を思つてると、後ろからマイクを持つためだか君が「」登場。

マイク片手に開口一番の言葉がそれだつた。

『さあ、貴様達。戦争の時間だ』

『働くがやる者食つべからずと申つが、これは真理に反している。私達は寧ろいひつ申つべきなのだ』

お得の演説を開始し、一息入れ。

『働いた者は食つてよい！ 貴様達、欲しい部費は勝つて得よ！』

めだか君の言葉がプールサイド全体へと響き渡る。この瞬間、水中運動会が始まったのだ。

『えーそれでは競技の説明に移りたいと思います』

善吉君が競技の説明をする、大まかなルールは以下の通り。
一つの競技につき、各部から3名の代表者を選出し競い合つ。
それに加えて男子生徒はハンデとしてヘルパー（浮輪）を装着。
んでこれが一番重要、もし生徒会より総合点が高かつた場合は、無
条件で予算が三倍となる……めだか君の私財とやらで。とまあ、ル
ールを説明したのだが、俺には関係が無い為死ぬ程やる気が無い。
阿久根君と善吉君がプールサイドのタイルに両手を付いて『あ、
！』とか言つてるのが愉快だが。

『それではここに第一回水中運動会の開催を宣言 する前に』

つてオイ。いい所で止めんなよ、みんながズツコケてんぞ。

『我々生徒会に所属する“役員補佐”から話があるついだ』

「はあ！？」

いきなり俺に話を振ってきたので思わずデカイ声が出てしまった。
そりやそりや、だつてそんな話俺は聞いて無い。

『では霧生役員補佐、頼む』

「お、オイ。そんな話、聞いて無い……」

「頼む」

マイクを俺に押し付ける様にして渡すめだか君。他の生徒達は俺をジーット見てるし……ええい！……じつなりやあ破れかぶれだ。

『ええ～っと 只今黒神生徒会長から紹介に預かりました～霧生

零で～す。万年彼女募集中だつたり……ああ、『めんなさい。冗談です』

取り敢えず無難な挨拶から始める。ちょっと私情を挟み掛けると、隣に居ためだか君に睨まれた。あ～あ、こういつのは苦手なんだが……。

『さて、お前等に聞く……部費カネが欲しいか！？』

『おおーーーー』

全員……とまではいかねえが、かなりの人数が雄叫びをあげる、よし触りはいいな。

『そんなんに欲しいのか！？』

『おおーーー』

『それなら、そんなんに欲しけりやあ勝て！　めだかちゃんが『楽しめ』と言つてたのもあるが、それ以上に部費カネが欲しいなら、勝つて！　勝つて！　勝つて！　勝ちまくれ！！！　金と女は勝ち取るもんだ、勝つ事が全て……　勝たなきや『ゴ!!』だ！…』

『……』

かなりの私情が入った発言がまづかったのか、耳鳴りがする程辺りに静寂が走る。

うーん？ 間違つたか？

『うおおおお！－！』

と思つたら軍隊の士気が最高潮になつたような雄叫びが再びあがる。フツ……どつやら成功か。

『では第一回戦、水中玉入れだ……総員準備に取り掛かれや－！』

かくして、血で血を染める様な……とまではいかない水中運動会が開催された。

マイクパフォーマンス終了した後にめだか君に引っ叩かれたのが納得行かなかつたが。

続く

14：「実写版の利根川さんが『fuck you! ぶり殺すやつ』めりーーー

水中運動会編は次回で終わらない……かも？

15・『幸福は金で買ひ』の津勘吉（前書き）

見てみたら総合評価が500にアクセス数が10万を越えてました。

いや、ホントにありがとうございます。

評価して下さった方々には感謝してもしきれませ。

そういう事で中編つてといります。

特に言う事も無いので、駄文に我慢出来る鋼の精神力を持つ方はどうぞ。

15：『幸福は金で買ひ』 由々戸〇津勘吉

どつかの受け売り臭い俺の演説もめだか君の拳骨で終了し、いよいよ第一戦“水中玉入れ”がスタートする。

ルールは得に説明する必要も無い、陸上玉入れが水中に変更しただけだし。

『部活動対抗、水中運動会！ 第一種目水中玉入れ！ でわでわつ！ これより開始したいと思います！！』

実況らしく女の子の声がプールサイドに響き渡る。

姿を見たのだが、アレ（・・）で三年生だつてのを聞いた時は、世の中つてオカシイと再認識したもんだ。

『おーっと申し遅れました！ 本大会実況はわたし、放送部部長代行、阿蘇短冊が解説は』

『この世に知らぬことなし！ 一文字流、不知火ちゃんでーっす！』

EP15：start

一回戦の水中玉入れでのウチ（生徒会）のチーム分けは阿久根君、善吉君そしてめだか君だ。

なので俺は……。

「フレーフレー」

応援に回る。
てか出来たら全ての競技を応援する役で行きたいのが本音だつたり
する。

『位置についてよおおおおこつ……ビニー……』

水中玉入れがスタートした。

おー開始早々面白い事になつてゐるな。

「くそつー……やつぱヘルパー邪魔でもぐれねえ……」

「バカ！ 足で掴めばいいんだよ！……」

「やつ……これ別にヘルパーしなくても……」

「てかプール深すぎ！ 足がつかない！」

とまあ、色々な声がし、予想以上にシユールな絵だ。

あつ、不知火さんつたら実況席でプールにいる奴らを指差しながら大笑いしてやんの。
とと、変なもんに気を取られて無いで俺達チームを応援せな。

「おや？ 善吉君と阿久根君がプールからあがり、めだか君の姿が見えない……へえ？」

既にプールから上がった二人は見に入つたか、だとすると。

『おっ、おおおおっ！？ 黒神めだかっ！ お手玉を一気に！ まとめて投げ入れたああ！！ 生徒会執行部20P！！』

潜水していためだか君がお手玉の塊を一気にシュート、それが決まり我等が生徒会は20P獲得した。

程なくしてタイムアップ今の所は何個かの部活と同点トップになつた。

「おつかれえ！」

中休憩の間に電光掲示板を眺めてる阿久根君と善吉君の元へと出向
き、労いの言葉を掛ける。

といつてもこの二人は何もして無いんだが。

「ああ、零か

「あん? どうした?」

「いや、ほぼ横並びの順位になってしまったってね」

「あー 確かに」

俺も一緒になつて眺める、確かに“何個”かどころか殆どの部活が食らい付いてきてんな。

「まあ、主催者がトップじゃあ不公平感は否めませんし、そういう意味では不知火に感謝ですか」

「いや善吉、不知火に感謝する必要など無い」

善吉君が顎に手を置いて語る背後にて、何時ものじ登場をするめだか君。

「あー、おつかれめだかちゃん

「……………」

「つむ、どの道私達はトップではなかつた、あやつらを見よ」

めだか君の目線を追うと、皆とは少し離れた場所にたむろしてゐる二
人組が。

「ありやあ……競泳部か？」

「つむ、その通りだ」

「あれが不知火の言つてたトビウオ三人衆つて奴か？」

ああ、水中運動会の準備の時に何か後ろで言つてたな。

金大好き三人衆つて聞いたが。

おや？ いつの間にかめだか君があの三人に何か話てんな、どれ……

「どうしたんだ零？」

「ん？ あの三人の人とナリを知りたいつてね」

さて……俺と馬が合えばそれなりに警戒、じゃなければその時点で興味の対象外だな。

そう思い、めだか君が去ったタイミングでの三人の元へと向かつ。

「どーもー 競泳部の皆さん。楽しんでますか?」

「あ? 何だオメー」

「確か……開始直前に中々に素晴らしい演説をかましてくれた、霧生って名前だったか?」

「あー! 思い出した思い出したわ!」

「……」

無駄にテンションの高いガングロ君」と種子島君に対して冷静な態度のオールバック君こと屋久島君。

そして全く喋らない女の子、喜界島さん。

「フフ、覚えてくれて何よりですよ…………ふ～ん?」

「何だよ?」

「いえ別に、あなた達三人共、いや得にそこの女子さんが一番かな……三人共『人生悟つてます』つて目エしてて、自分が中々に好きになれそうなタイプかなあ、つて」

「……」

「何？」

屋久島君の目が若干細まる。

大方、俺の言つた事に引っ掛かりでも覚えてんだろ？

「まあ、あれですわ。“それなりの対価を支払わなければ金は手に入らない”って意味での応援みたいなもんで声掛けただけですでお気になさらず、それでは」

そのまま軽く手を振り、その場を後にする。
三人の視線が突き刺さつてる気がしますがね。

つー訳で第一回戦、水中一人三脚が始まる。

出場するのは阿久根君と善吉君なので、相変わらず俺は応援をする、手持ち無沙汰なので、パフォーマンスに使用したマイクを弄りながらだ。

「競泳部の代表は、屋久島先輩と種子島先輩か

「……」

「あん？ どうしたよめだかちゃん」

何時もなら一言一言返してくれるのに言葉が返つてこない。何やり考えてるみたいだが。

「いや別に

「

「なーんや黒神ちゃん、一回戦は見学かいな」

「おっ、

めだか君が口を開いた瞬間、話に割り込んできた人が、この聞き覚えのある声。

「鍋島三年生か、私ばかりが出張つては団体戦の意味があるまい。貴様も同じ考えではないのか?」

「ククク! まあ後輩にも出番やらんとなー」

「チイーツス! 猫美さん」

「やつ、零君も元気そつやね」

「何だかんだで今日初めての会話だつたりするんだよな。」

「はつはつは! 元気だけが取り柄……って訳でも無いですが、俺はまだ今日競技に参加してないんでね」

「やついやそつやね、出場せえへんの?」

「う~ん正直俺より、めだかちゃんや阿久根先輩や善吉君の方が動けるような気がしませんかね?」

出る気が無いってのもあるのだが、俺が出るよりあの三人の方が遙かに動けるからな。“勝利”するつて考えれば、俺は補欠扱いみた

いなもんぞ。

「そりか？ 私には“面倒だから出たく無い”って本心が見え隠れしてる様に見えるのだが？」

「まあ、それもあるが」

「めだか君よ、何時も思うんだが、何で俺の考へてる事の大半を言い当てるんだ？ ちょっと怖いよ。」

「なんや、ヤツパリそりなんや。あ～あ、ウチは零君が出場しどる所が見てみたいなー」

「めだかちゃん、気が変わった。次の種目は俺が出るからーー。」

猫美さんの言葉に、ソッコーで心変わりをしてしまった。
しかし安いな俺の決意って。

「貴様は何故鍋島三年生の言つ事は聞くんだ？」

「え？ 猫美さんだからだけど？」

「貴様は……もう……」

寧ろそれ以外に何があるんだ？ それと正直に答えたつもりなのに、めだか君にはジト目で俺を睨まれたあげく『ブイツ』ってされた。

「何を怒つてんだらうつかあの子は」

「アハハ……相変わらずやね。平氣な顔してドキリとする様な事を言つといふとか」

「そうですか？ ううん、思つた事を言つたつもりなんですがねえ

「もしかしたら零君は天然ジロロさんなのかもね？」

うんうんと一人で納得している様子の猫美さんだが、それは違う。

「そりやあ違いますよ。俺は『好きな人には常に正直であるべし』って信条をもつてますから、貴女に対しては、殆ど正直に話してるんですよ」

この信条は元の世界に居る爺ちゃんの教えた。

「…………それ、一步間違えれば告白やで？」

「え？ そのつもりでしたが？」

「ほえー？」

そう言つた瞬間、めだか君と猫美さんがビックリした様子で俺を見て来た。

「…………鍋島三年生。コイツの言つ事は余り本気にしない方ばいいぞ？」

「は？ 僕は本気だ」

「そ、そういうわ……」

「ちよつと待つてよ、最後まで言わせ

「話は変わるが、は屋久島三年生について何か知つてるか？」

「あ、ああ。それなら同じクラスやからわかるで？」

「オーライ、二人共……特に猫美さん聞いてますか？」

何か知らないけど、俺の話を最初から無かつた事にされた気がある。
言うタイミング間違ったのだろうか……。

とにかく一人から『これ以上言うな！』ってオーラが出てる為、
話はそこで終了した。

「もとより特待生は変人奇人ばつかやけど、中でも屋久島クンは輪
アかかるとるよ。阿久根君や黒神ちゃんとは違う種類の、あつさり
天才ゆう男やな」

先程のやりとりが、ホントに消去されたかの様に話が進む。
なんだろ、急に悲しくなつてきました。

「その実力 자체は素直に尊敬するけど、何を考えてるかわからへん
し、何がしたいのかわからへんねー」

「ふーん？」

これ以上腐つてもしょうがないので会話に参加する。
どーでも良いのだが、俺が思うに、あの屋久島つてのは三人の中じ
やあ一番常識的な気もするがな。

「……別にわかつてもらおーなんて思つてないよ。あたし達は」

「「「」」」

「お?」

三人で屋久島君を眺めてると、またもや背後から声を掛けられた。
確か喜界島さんだっけか。

「でも何がしたいかは教えてあげるよ、あたし達はね札束のプール
を作つて、そこで泳ぐのがあたし達三人の夢なのさー！」

バブル時代に実際あつた様な夢を淡々と、そして無表情で語る喜界
島さん。

あらやだ、この子つたらホントに夢も希望もなぞ氣な田をしてんな。

「ふ~ん?」

「なに?」

その濁つた目で俺を軽く睨む様にして見て来る喜界島さん。

成る程ね“顔の整つた女が睨む程もの怖いものは無い”って誰が吹いたかのかは知らないが、実際に田の当たりにするとながち嘘ではなのかも知れないな。

それにしても、札束プールで泳ぐって考えは頂けないな、泳ぐだけなら誰だって出来るんだからな。よし、此処は精神年齢年上のお兄さんがご教示してあげよつ。

「いやあ？ 僕としては札束プールで泳ぐより札束風呂でドンペリかゴーレムシャンパン飲みながら女はべらして高笑いしつつ『全て愛ですよ』と全く持つて説得力の無い言葉を嫌味全開な顔して言つて札束をばらまきながら……」

「貧乏人よ拾え拾え……」まで言おうとしたが、途中で言葉が止まる。だつて……。

「……」

「……」

「……」

「「ゴメン、軽く妄想入つてました」

だつて、冗談のつもりで言つたのに、目の前の三人から来る「ああ、可哀相な人なんだ」な視線に耐え切れずに平謝りをしてしまつた。ホント、女の軽蔑の視線程心に突き刺さるようなものは無い。

「軽いジョークだつてのに本気にしゃがつて……」

隅っこの方で膝を抱えて座つても、今なら誰にも攻められないだらう。

「まあまあ、ウチは冗談やと思つとつたよ」

「うん……」

喜界島さんは壁に激突した鳩を見る様な、めだか君は着地に失敗して腹から落ちた猫を見るような目でそれ俺を見て来たのに對し、猫美さんだけが何故か異様に優しかつた。

その優しさが逆にキツイつすよ猫美さん……。

第一回戦での生徒会のは3位という戦績で終わつた……終わつたのだが。

「捻挫、だな」

「ぐつー。」

「あんな馬鹿な走り方をすれば、ああもなるわ」

「す、すまねえ」

「返す言葉も無い」

只今、阿久根君と足を触診しつつ氷嚢を乗つける。

理由は、第一回戦の時にこの一人が馬鹿をやらかしたからだ、一人三脚だつてのに何を思つたのかお互いを潰し合ひう様にしながら爆走した結果が……これだ。

「ホントにすまねえ、頭に血が上りすぎた」

「今更遅いよ、もつ……」

「ぐつ、これくらい……平氣だーー。」

阿久根よ、絶対平気な訳無いだろ。普通に生活しててなる皮膚の色
じゃ無いし、確実に数日間は痛むぞこれ。

「しょうがない……次からは俺も入るよ

「むひ、せひと貴様も出す気になつたか

「まあ、こんな怪我状態で無理矢理出させて『俺知りませーん』は
流石にねえ？ つー訳で早速次の競技から準備運動がてら入んでも

うん。そこまで俺も鬼のつもりは無いし。

「頼むぞ」

「ウッス、まあ笹船にでも乗つたつもひで待つててくれ

「それ、沈まないか？」

「ナイスツツ」^{ハリ}ありがと^{ハリ}善吉君

善吉君のナイスツツ^{ハリ}で自身にカツを入れつつ^{ハリ}回戦である“鰐

“掴み取り戦”に参加したのだが。

「ヒヤーッハツハツハツアアアー！ 鰻だああー！」

『……』

ちょっとびり張り切り過ぎたのもあってか5匹しか取れ無かつた。

しかもプールサイドに居る奴、果てには実況席にいる奴らすら俺を不審者を見る様な目で見てきたのがこの上無く腹が立つ、人がこんなにも真剣に鰻を掴もうとしてんのに。

そんな何かを失った気がした三回戦を終えた俺達の戦績は38Pになり、只今の順位は4位。

1位である競泳部は10P差だ。

つーかあの喜界島さんってのは、俺が“世紀末・モヒカンモード”になつて周囲に恥を曝してゐる間に顔色を変えずに淡々と鰻を狩つていたのかと思うと、いかに自分がハシャイでいたんだろうと思い返せば思い返す程に、段々と恥ずかしくなつていった。

「んで、最終競技が

『ヒヤツハーー！ 水中騎馬戦だああー！』

世紀末モヒカンモードになつてた俺に若干影響されたのか、阿蘇さんの口調に変化が訪れてたのは置いといて、遂に最終競技“水中騎馬戦”に入る。

続
<

15：『『幸福は金で買ひ』』由○津勘吉（後書き）

主人公は、黙つてれば格好良いのに性格と馬鹿な言動のお陰で三枚目キャラが確定しつつあったり。

外：「不死身って言つても一応は空腹感に襲われるんだよな……襲われるだけだ

番外編つて奴です。

主に主人公がこの世界へと飛ばされて、徐々にチャラ男予備軍に性格が変わる軌跡です。

因みに時系列中学生時代で、安心院さんが封印されて暫く経つた位です。勝手な設定も盛り込んでしかもクオリティーも最低値なので、鋼の精神力を持つ方はどーぞ。

外：「不死身って言つても一応は空腹感に襲われるんだよな……襲われるだけだ

「これは……俺がこの世界へ来てから一年の時が過ぎた年末の出来事。

世間はX-mas一色で、メディアの方もそれはそれは「もう聞き飽きた」て程に取り上げていたのだが、当然の事ながら知り合いなんて者が存在しない俺にとっては、ただただ辛くそして寂しい思いを強いられるイベントだつたりする。

そんな時は家に閉じこもつてDVD鑑賞会に洒落込みたかったのだが、そういう時に限つて冷蔵庫の中が空っぽだつたりするもんで、只今買い出しにの為に駅前のスーパーに向かつてゐるのだが。

（ドイツもコイツも幸せそうな顔しゃがつて……）

寒い、そしてカップブルが多いの一拍子が揃つてゐる陰で、早速帰りたくなつた。

だが、晩飯の材料を揃え無ければますます寂しいX-masを送る嵌めになるのだけは避けたいので、腹の中にあるどす黒い感情を一杯表に出し、スエット上下着用、オマケにポケットに手を突つ込みながらのヤンキー歩きで街中を歩く。

一応死ぬパターンに餓死を取り入れてみたのだが、約半年程何も食

わざに水だけの生活にしてみたが、見事に死ねなかつたのは記憶に新しい。

ちなみに脱水症や熱中症でも死ねなかつた。

「ハハハ…」

「ハ、怖い……！」

そんな感じで歩くもんだから道にいる人間共（カップルが殆ど）は俺を見た瞬間に顔を逸らしたり、逃げたりする。

まあ、こんな事をした所で誰も得をする訳じゃ無いし、寧ろ迷惑千万だつてのは自覚はしている……自覚しているのだが考えてみる、道を歩く先々でカップル共が手を繋いで歩いているのを想像してみなさい…………どうだ、殺したくならないか？ 寧ろ「X-masに躍らされてんじゃねえし」とか「告白して玉砕しろ……そして絶望しやがれ！」等とか思わないだろ？ 少なく共俺はそう思つてしまつ。

身勝手だつてのりも解るのだが所詮人間はそういうつた生き物なのさ。

（……ケツ！）

これが世間で言う所の「リア充爆発しろ！」の現場をリアルタイム放送で見せられてる俺は、どす黒い感情全開で買物を済ませ、帰宅しようとしたのだが、一件の服屋を見て足を止める。

(せうじょば……最近服買って無かつたな)

必要最低限以外の物は、余り買わない主義で通していた俺は、その服屋を見た瞬間、買いたいといつ感情に襲われた。

(たまにはいい、かな?)

びつせなら適当に服も買い込んで置いても損は無いと思ふ、その服屋に入るのだった。

～2時間後～

「ありがとうございました～」

(つこつこ田移りして買ってしまつたが、まあ、いいか……)

どうも、ああいつた店に入ると馬鹿みたいに衝動買いしてしまう俺がいるなと思いながら、店で着替えた服を着ながら街中を歩いて家に帰る。

だが、数分歩いている内に妙な違和感を感じる。

(なんだ、あちこちから視線を感じる?..)

そつ、そつときまでは視線を逸らされたのだが、今度は逆に視線を周りから感じる様になつたのだ。なんていうか……こいつ、嫌な視線じや無い事は確かなんだが。

（服が変……なのか？）

自身の姿を確認しながら思う。今着ている服は黒く若干生地が厚いパーカに黒いジーンズという真っ黒スタイルで、別にぶつ飛んだデザインじや無く、『ぐぐぐ』普通にありそうな服……な筈だ。

（何か……居づらっこ）

ともかく、このチラ見感覚の視線に耐え切れずにその場から退散するしかこの嫌な視線から解放される手だけが無かつた為、真っ直ぐ帰る事にした。

（ふう、食料だけだったのに……やはり慣れない事はするもんじや無いな）

X-masだつてだけで慣れない事はするもんじや無い……そう思

いながら何も入ってない郵便受けを覗き、家の鍵を開けて中に入る。よし、これから予定は飯を食つてから買って来たつまみとビールないし酒を片手にDVDもしくはTV鑑賞会だな、うむそれがいい。さて、今日の飯は何にするかなあ……。

「おや、お帰り。遅かったね？」

「うん……」

うーん……中華を昨日食つたし、だからと言つて洋食は余り好みじやねー事を考えれば……。

「」飯にあさりの味噌汁そして生姜焼きだな

うんうん。X-masだからってわざわざ七面鳥なんて馬鹿らしく
からな。

普通の家庭の食卓レベルで充分だなうん。

「随分と寂しいね、X-masだよ？」

「別にX-masだからって他と会わせる必要性が無いって言つか
他所は他所、家は家つて言つか……」

「ふ～ん? まあ、さつさでも戻ってやどけ。おつ、僕は少し多めね
」

「は～いよ……………あ?」

ちょっと待て……俺今誰と話してたんだ? 此処は俺家でしかも俺一人の筈だよね? てかどつかで聞いた声なんだけど。幽靈…………にしてはフレンドリー過ぎるし。

「……………」

「何ボケーッとしてんの? セカヒ作ってよ

とつあえず声がした方向……台所を出て直ぐにある俺が寝ているベッドをみると、異常に髪の長い女が、さも当然ですよと言わんばかりの顔をしながらベッドに腰掛けていた。それが全く知らない顔だつたらどれほど良かつた事か……その時ばかりは心の底から思つた。

「……………何故に?」

「何故に? じゃ無くて早く作ってくれよ。じゃ無いと僕のお腹と背中がくつてしまつよ

いやいやいやいやいやいや、だから何でアンタが居るんだよ。
しかも普通に晩飯を催促してるし……いや待て、此処は迅速にかつ
的確な言葉と大人の対応で、この俺の城マイ・キャッスルから出て行つて貰おう。
うん、それが良い。

「えーっと……どなたかは存じ上げませんが、とりあえず出てつて
貰えませんかね？ うん、てか出てけ」

貼付けた様な笑顔で言い切つた。

「決まつた……」と心中で咳きながら。

「君はこんな美少女を寒空に放り出して心が痛まないのかい？ あ
あ、お姉さんは悲しいなあ……」

「そんな事は知りませんな。住居不法侵入した犯罪者に情けを掛け
る程、私は器が大きくありませんので」

「風呂法を思い切り破つてる君に言われても説得力のカケラも無い
よね」

「……」

「……」

沈黙する……。

俺としてもそこを突かれると痛いのだ。
仕方ない……ほんつつつとーに！ 仕方ないな。

「はあああ～ 何しに來たんですか？ 安心院先輩」

これ以上言つた所で、俺がこの人に口で勝てる気がしないので、俺
が折れる事にした。

「何つて、そりやあX-masだから遊びに來たんだよ。それと僕
の事は安心院^{あじむ}じゃなくて安心院^{あんしんいんさん}と呼びたまえ……ってこれで通算1
〇〇回は言つたよね？」

「うん、そんな建前は要らないし呼ぶつもりも毛頭ござりませんの
で、せつざと要件及び目的を迅速に話す事を要求します。さもなく
ば、貴女の身ぐるみを全て剥がして真っ裸で外を歩かせる嵌めにな
りますので……」

完全に脅し口調にシフトチェンジさせ、何が目的か吐かせる。

この人とは一年前の“球磨川君に封印されちゃいました事件（仮）
”以降、ある理由があつてちょくちょく我が家に出没したりする。

「霧生君つたら……そんな激しい告白を……キャッ！」

「……」

キレるな……キレたらこの人の思い通りだからな。COOLになれ
零、冷凍庫の様にCOOL DOWNだ俺。

「うん、山椒魚みたいにクネクネしても誰も得なんかしないし、決
して可憐く無いんでせつと用件を喋りやがれでござりますコノヤ
ロー！」

日本語が若干おかしな気がしたが……まあ、何が言いたいかは伝わ
つただろう。

「だから、遊びに来ただけなんだけど？」

急に真顔で答える安心院さん、口口口と表情が変わんなこの人。

「本当にっ。」

「本当か。僕が何か企んでるとでも？ あ、まさか自分が物語の

主人公だとか思ひやがつてゐる？ 自意識過剰だなあ

「んな事たあ言つてませんよ……俺が言いたいのは、もつと消え
うつて事ですよ」

「ちえ……単に遊びに来ただけでいつも邪険にされるなんて、流石
のお姉さんもビックリだよ」

「今に始まつた事じや無いでしょ」 てな訳で玄関はあちらで
「す」

ジョンタルマン風に玄関の場所を示しながら心の中で「帰れ」コー
ルを連発する。

「お腹が空いて空いて、力が出ないよ……ああ、僕はX-masの
夜に死んでしまうのか……」

「いや、腹が減つてんのなんてアンタ自身の事だから俺は知らね
よ。それにアンタがんな事で死ぬ様なタマには見えんないし。まあ、
仮に死ぬんだつたらこの部屋では勘弁してくださいよ？ 死体処理
も簡単じや無いんですからね～」

紳士的な振る舞いも虚しく失敗した揚句、逆に人のベッドの上で一
人芝居を始めた安心院さんを放置しながらの夕食作りに取り掛かる。

多分「トイツ帰る気無いな……とか思いながら。

「くすん……お姉さんの硝子で出来たハートは脆くも砕け散ったよ

「んなもん知るか」

そんなやり取りをしつつの夕食作りも終わり、テレビのある居間に持つていく。

「さて、と。今日の出来も中々つて事で、いただきま～す

「ちよつと待てよ。僕のは? 僕の分は無いの?」

「ちよつと待てよ。僕のは? 僕の分は無いの?」

いつの間にか俺が座るテーブルの反対側に座つてた安心院さんに止められました。

そして何かを期待した田で俺を見る。

チツ……ショーがないな。

「カロリーメイトなり…………」

「えへ？ 出来れば君が作つたご飯が食べたい……」

「水道水なら……」

「こやこや、レベルが下がつてゐよな？」

「…………じやあ帰れよ」

「最終的には何時もそれだね。それが出来るなり、とつて帰つてゐる。だけどそれが出来ない……君はその理由が分かつてゐる筈だよ？」

そう言われてはみるものの、この女がこじて開いた理由なんてたかが知れてゐる。

なんでも“球磨川君に封印されちゃいました（仮）事件”のお陰で“表”に出れなくなつてしまつたのだが、何故か俺の家の空間だけは能力制限付きで行動が出来る。

と、前に言つてた気がするのを右から左で聞き流してたのだ。
だから俺が言つ『帰れよ』つてのは『とりあえず消えてる』つて意味だ。

「ハア～ 他に実体化出来る空間とか無かつたんですか？」 いつも

「チョロチョロと家に出現してとなると、いい加減鬱陶しいし、口^{ウチ}チにもプライバシーってもんがありますからね~」

「真に残念ながら未だ無いよ。人の見る夢の中ならチョロチョロと動けるけどね」

「じゃあもう夢で良いじゃん。それなら腹も減らないし」

「君が作ったご飯が美味しい…… そう“先生”が言ってたからね、なら食べてみたいと人間の心理的に思つたのさ」

「人外とか吐かしてやがんだか…… つーかあの野郎、余計な事をベラベラと」

豚生姜焼きを箸で突きつつ、俺を若干変えてくれたこの場にいない進路相談員の先生に恨み言を言いつ。

「まあ、その情報を教えてくれたお陰でますます僕は君と仲良しになりたくなつたつて訳なんだ。おめでとつ、これで君は僕と仲良しさんだ」

「鳥肌が立つような事は言わないでくださいや、あ~やべえ、寒氣

もしてきた

「おやおや、風邪でも患つたの？　お姉さんが看病してあげようか？」

「煩い、一やけるな、そしてコッチに近付くな、ええい！　頬つぺたを突くな食いつらいだらうが！！」

「つんつんと人の頬を突きやがって……本当の意味でこの世から消してやりてえわ。

多分、普通の人間の感覚だつたら嬉しいポジションにいる筈なんだが、俺にとっちゃあ意味が無いというか……ああ！　もつとにかく嫌だ。

折角婆ちゃんが隣にいなくても何とか生きる事が可能になつたのに、「クローン人間かつ！」と思つてしまつ程似てるこの女のお陰で、俺の感情が嫌な意味で揺さ振られる。

「（）飯（）飯～」

「るせえつ！　食いしん坊かアンタは！～！」

「食いたいんだよ、霧生君の味が知りたいんだよ～！　僕だつてね、女だつて事さ！～！」

「そんな逆ギレされても……てかそこは「霧生君の作った飯」じゃなくね？ 飯の部分を省略するから、なんか生々しく聞こえるんですけど」

と言しながら、勝手に取られない様にテーブルに並ぶオカズをカーデしながら飯にありつぐ。

むり、この味噌汁……味噌の量が少し多過ぎたな。

「あら？ 変な事を言つて無い筈なのに霧生君つたら何を想像したの？」

「……球磨川君が貴女の顔面を剥がした時つてどんな気持ちだったんでしょうね？」

「お？ 今流行りの“ヤンデレ”かい？ 大丈夫、君の為ならお姉さんはどんな愛も受け止めるぜ！」

「……」

ピシッと俺の胸辺りに指を差しながらポーズを取り、何かぶつ飛んだ事をほざいてるなあ、と思いながらアサリ貝の身をほじくりながら思つ。

無理……未だかつてこんなに噛み合わない会話があつただろうかと。

そんな事があつたお陰か、1年に1度の筈のX-masなのに、普段の倍以上に飯が美味く感じられなかつたのだった。

因みに、何時まで経つても帰る気配か無かつたのに根負けした俺は、安心院さんの御所望通り飯を振る舞つてやつたのだが、それがイケなかつたのか勝手に人の家の箪笥からスエット上下を取り出した揚句着用し。

「今日は帰りたく無いから泊まるね？　いいでしょ？　答えは聞かないけど」

とまあ、毎度勝手ながら人の了承も聞かずにお泊り宣言した揚句に俺の寝るベッドを占領しやがつた。

一瞬本気で顔面剥がしを実行しようと思つたのだが、何故だかやううと思うと出来ずになし崩し的に了承してしまい、結局俺もチキン野郎だったと改めて思うのだった。

そして就寝前。

当然予備の布団なんて準備してゐる訳も無く、俺は固い床で寝る嵌めになつた。

「そりいえば先生つて元気なの？」

電気を消し、携帯のアラームをセットしている最中、安心院さんに

聞かれる。

“先生”つてのはさつきも説明した、俺を再び中学生生活をさせてくれた進路相談員の事だ。

「ああ、元気過ぎて腹が立ちますよ。こないだも『行こうぜナンパ！…』ってサムズしながら言つて来ましたしね」

「相変わらずだね……」

「しかしそれ、アンタと先生が知り合いだつて知つた時は地味に驚きましたね」

「うん、僕が初めて会つた時は『君のお陰で仕事が無くて楽だよ、君には感謝だよワッハハハハ…！』って言われたよ」

「ああ、超言いつこう。その人つて自分の仕事を全力で他人に押し付ける気がある」

殆ど、いや俺以外にあの進路相談室を使用する生徒はいないだろうな。

なんせ皆の記憶があつた時は、悩み事等があつた生徒は安心院さんに相談してたし。

「まあ、僕が消えたんなら先生の仕事も増えたんじゃない？」

「ん~ 余り変わつてなさ氣でしたぜ? 貴女の後釜的なのが出て
来たし」

「後釜? ああ、めだかちゃんか。確か霧生君と同じクラ
スだったね? 彼女は元氣?」

「さあ? 僕はあの子とはあんまり関わつて無いから知りませんな。
多分元氣なんじや無いツスか?」

黒神めだか、この世界での主人公。

あの子とは時が来るまで関わらない、そう決めてる為敢えて授業に
も出ない..... 箕だつたのが災いして逆に俺の顔を見るたんびに絡ま
れる事になつた。

だが、いくら絡まれると言つても俺があの子の事を知らないのもま
た事実だ。

「ふ~ん? まつ、どうでもいいんだけど」

黒神さんと関わつて無い事を話すと、完全に興味が失せた様子の安
心院さん。

あつ、聞きたい事思い出した、調度だから今聞いてみよ。

「安心院さんつて『自分以外の人間に興味が無い』みたいな事言つて俺には絡んで来ますよね、何でですか？」

「さあてね、何でだと思つ?」

常田頭から疑問だったので聞いてみたら、逆に聞き返された。

「う~ん? 体の良い宿泊施設の持ち主だから?」

「……うん、ビツヤーリ君には一生分かりそつと無いね

「じゃあアレだ、暇潰しの相手にたまたま俺が選ばれた

「おやすみ」

「おー、答え位教えてくれたって……」

「……」

「寝付きが良いな……てかこの人寝るんだね……」

結局答えは知れなかつたが、何時か聞き出すと心に誓いながら俺も意識を手放すのだった。

終

外：「不死身って言つても一応は空腹感に襲われるんだよな……襲われるだけだ

先に言つときますが、主人公はいくら自身の性格が変わらうと、最終的な目的である“死んで家に帰る”は忘れてません。

16：「大丈夫勝つよ？ だつて笑い飛ばしたくなる位にスペックの高いあのN

え～つと……申し訳ござりません。

アレな感じになってしましました。

16：「大丈夫勝つよ、だって笑い飛ばしたくなる位にスペックの高いあのN

「ムカついた、だからあの女を……売り飛ばす！」

「「お、おひ……」」

最終競技、水中騎馬戦の始まる前に言つためだか君の一言のお陰で、喜界島さんのやる気……いや殺^ヤる気は大気圏突破しています。

下の一人が冷や汗ダラダラなのを見て若干同情してしまい、思わず俺と善吉君で作った土台の上で仁王立ちしているめだか君に一言物申す。

「おーおー、何でわざわざ本気になれる様な真似してんだよ

「何を言つてこる。お互に全力でやつてこそ意味が在るのだ

「あん……」

相変わらず“意味の無い事”がお好きな子だな。

『それではラストバトル、よおーい……』

阿蘇さんの号令が掛かり、皆の表情が本気になつて行く。

『どんづー』

スタートと同時に両者が組み合つ。

一人は楽しげな表情で、一人は憤怒の表情で。

「さて……競泳部の事は善吉君とめだか君の二人に任すとして、だ

競泳部についてはめだか君に任せて何の問題も無いだろうと判断した俺は、周りで俺達が潰し合つてゐるのを伺つてゐる何組かの部活を見渡し……。

「お疲れ」

誰にも気付かれ無い様に腕を振つて“北〇の拳”にでてくる拳法“南〇紅鶴拳”のように水を還した衝撃波を送り込む。

と、言つてもこれを喰らつて皮膚が切れたりする事は無い、精々騎馬のバランスを崩して脱落させるのが関の山だが今はそれで充分だ。

「うわあー！？」

「急にバランスが！？」

『おーっとー？ 理由が解らないが次々と騎馬から墜ちていくチムが！？』

おし、こんなもんかな。後はめだか君達だが……まつ、大丈夫だろうな、主人公だし。

「あたしが死んでも誰も悲しまないよー！」

「おわつー？」

「くつー。」

『あーっとー 生徒会、黒神めだか！ 一二三で突き飛ばされたーつー。』

阿蘇さんの言つ通り、喜界島さんがめだか君を突き飛ばしたのだ。バランスの影響とはいえ、めだか君と力比べで勝つとは……いやはや、この子も中々ジーしてだな、それに“金は命よりも重い”ね……ククッ、つづく話しが合いそうな子だよな。

確かに金に困つて無い連中からしてみたら『金より命が優先』とか言つが借金まみれの人間からしてみたら『綺麗言だ』と言われるだろうな。

まあ、それも人によつて考えが違つたゞ、俺はぢりかと言えば喜界島さん寄りの考えだな。

だけど悪いね、俺も割と本^{ガチ}氣なんでね、例え君等の考えが変わつてしまつても今回はめだか君に力を貸させて貰つよ。

「善吉君…」

「わかつてゐよ…」

俺の声に返事をした善吉君は、腕に括りつけられたヘルパーを投げる。

よし、あの子のスペックならやれる筈だ。

対する喜界島さんは、力を出し尽くしたのか息切れをおこしてゐる、やはりめだか君との力比べは骨が折れた様だな。下の一人も勝つた様な顔^{シラ}をしてゐる様だが。

「甘えた事を吐かすな……！ 例え貴様等が地獄の様に不幸でも、命を粗末にしていい理由になるか！！」

「…」

勝つたと思ってた競泳部の三人が驚くのも無理は無い、なんせめだか君は今、ヘルパーを介して水の上に立つてゐるのだから。

「金が大切だと割に随分と高い買い物した様だな喜界島同級生……貴様は私の怒りを買った！！」

『ぐ、黒神めだか生徒会長！ 水の、上に、立っているだとおー！』

うん、まあ普通の人間の神経なら驚くわな、俺だって何も知らないでこんな光景を見たら、取り敢えず『人型未確認生物（U.M.A）か？』と思ってしまうだろうよ。

「別に俺は勝敗とかビーでもいいと思ったけどな、今のは流石に力チンときたぜ。だから珍しくけしかけてやる、やつちまえめだかちやん」

どうやら喜吉君も喜界島さんの考えが許せないらしくしかめつ面をしながら言い、めだか君が競泳部の騎馬に……具体的には喜界島さん飛び付いた。

「貴様等が死んだら、私が悲しむ……」

とかなんとか言いながら、多分本人には自覚の無い百合っぽい絵面をVIP席並の場所で見せられた。

正直「あ～あ」って気持ちになったと同時に、俺程命を粗末に扱つてる人間も居ないだろうなあと思つていたりする。

だつてそつだ、元より俺は“死”がこの世界での最終目標なんであるからな。

ナイフで自身の頸動脈を搔き切つたりとか、自作の爆弾で爆死（誰も居ない場所で）したりとかな。

「イツ等が知つたら、フフッ……どんな顔シラをするんだか……。

『おおつとー！ 同時着水だあああーー！』

「ん、終わりか？」

考え事をしてゐる間に決着が着いたようだな。

どうやら喜界島さんに飛び付いた時に、ちやつかりハチマキを掠め取つてたみたいで総合点で引き分けになつたみたいだ。めだか君も喜界島さんを抱えて競泳部の元へ行き、何やら語つてるのが見える。どうやら……若干修正せられた様だね。

「やれやれ……慣れねー事はするもんじゃ無いな」

「そつか？ それにしちゃあお前も結構本気な顔してたぜ？」

「あ？」

おつと、どうやら喜界島さんに聞かれてたみたいだね。

「まあ、エンジンが掛からなかつた……って言つたら嘘になるが」

「だろ？ まつ『終わり良ければ全て良し』ってなー！」

「余り綿まつてないぞ？」

「うつせー。」

善吉に小突かれながらも少し笑つてしまつたのが自分でもわかる。そして試合終了のホイッスルが鳴り阿蘇さんが優勝した部活の発表する。優勝したのは……。

『優勝は鍋島猫美率いる柔道部チーム！ おめでとうござります！』

「やーどーもどーもー！」

「…………は？」

折角いい雰囲気になつていた空気をぶち壊すかの如き事実に、俺以外の生徒会のメンバー及び競泳部の空気が固まつた。

なんでも俺達が『じりゅう』『じりゅう』とやつてゐる合間に、猫美さんがあれよとハチマキをかき集めて見事優勝したのだ。
全くもつ……。

「流石ッス！ 猫美さん……！」

「ジーもジーもー！」

後ろで『えへ？ そんなのアリですか？』 みないな空気が出でるが、
んなもんは知らん。
勝ちやあ良いんだからね、しかも別にルール違反じゃ無いし。

「ククク！ 『綺麗な相手に汚く勝つ』 卑怯と反則、確かに貫かせ
てもうたわ」

ピシッとめだが君を指差しながら叫び猫美さん。

「やつべ、ベリーザー！」

そんな姿が眩しく映る俺はとこかくボキヤ貧なのを自覚しつつ色々
と褒めひがる。

「けじまあー 次こそは直にやつて黒神ちゃん！ 顔洗つて出直

「……」首を洗つてしまつたるわ……

そして、ピッヒ手を軽く挙げながらその場を去る。俺以外の連中は『うわあ、卑怯なのにカッコイイ……』つて顔をしてる。

「やべえよ猫美さん……何か知らないけどヤバイっすわ……」

「ホホホホ！ そんなに褒めんといヒーな零君」

「よくは分からぬケド愛してます……」

「ウチもやで～！」

お互にテンションが高いお陰で恥ずかしい事を人前で言つても恥ずかしい感情が全く沸いてこない、周りから見たら愛の告白に見えたと後に聞かされた、そんな水中運動会も無事終了した。ちなみに部費については「いらん」と他の部活へ適当に分配したらしい。

流石に猫美さんだぜ。

～そして次の日の放課後～

「そんな訳で先日のイベントは成功に終わった。が、私が学校行事に置いて私財を投じた」とについて批判が多くつたのもまた事実である」

「あ？ 何だよ怒られたんかい……俺が意味無く頑張った意味ねえ

「うしごと、そんな軽口つなよ」

「だつてよ、結局思い返してみたら、只単に疲れに行つたよつなもんじやね?」

「船せどりしていいわ、アレなんだよ」

「いやだつて……」

と男三人で先日のイベントを思い返す中、めだか君が続ける。

「よつて今後このような事が無いよう、生徒会にお金の専門家を雇い入れることにした」

あ？ そうなんだ。てことは俺の仕事も減るつてか？

「紹介しよう、これから会計職を任せる喜界島同級生だ。競泳部のレンタルなので大切に扱うよに!」

紹介と共に扉を開けて中に入つて来る喜界島さん、お~眼鏡属いや、どうでもいいか

「荒稼ぎに来ました。無駄遣いしたら売り飛ばすのでのつもりで!」

キリッと眼鏡を持ち上げながら何処に売り飛ばすつもりなんだろう、と疑問に思つてる俺に向とも言え無い表情をしている善吉君と阿久根君。

「ちなみにレンタル料は一日320円!」

「驚きのお値段つー!」

「値上げ前のタバコの値段と一緒に……」

「「そこ繫げるなよ……」「

ナイス突っ込みサンキュー二人共。

続く

オマケ?

零

「で? 喜界島さんの紹介はアレって事にして今日の仕事は?」

めだか

「ほつ、貴様にしては熱心な所だが……今日は特に無いな

零

「v e r y n i c e! じゃあ帰るー!」

仕事が無いと分かった瞬間にいそいそと帰る準備を始める、喜々した表情とオマケ付きで。

善吉

「何時もながら、お前つい仕事が無いこと分かった瞬間そそりと
るよな」

零

「だつて俺が残つたてしょがなくね?」

善吉

「そつだナビズル……」

零

「だつ? じゃあ、後はアロペー山へ喜界島へもベイビーー。」

喜界島

「えー? あ、う、うん、じゃなかつた、ハイ……」

零

「あ? ノリを間違えたか?」

喜界島

「そつこつ駄じや……ない、です……」

零

「なんで敬語？ 同い年だよね？（肉体的に）」

阿久根

「世の中、君みたいに初対面でも馴れ馴れしい性格の人間の方が少ないからね」

零

「そうですか？ まあ、どうでもいいですが……じゃつ、帰りま

す

喜界島のキャラがイマイチ分からない零は何も考えずに帰るのだった。

終了

16：「大丈夫勝つよ？ だつて笑い飛ばしたくなる位にスペックの高いあの

主人公自身のスペックは高いんだか低いんだか良く分からぬ。

外：「刺さない蜂に勝利（カチ）は無い」（前書き）

また番外編でしかも駄文ですいません。

外：「刺さない蜂に勝利（力チ）は無い」

ふと思うのだが、何で『ほつといてくれつて』と思つてゐる時に限つて、人に絡まるんだろうか。そりやあ絡む人間が嫌いじや無い人間だつたらまだ我慢出来るが、逆だつたら取り敢えず殴りたくなつて来る衝動に駆られてしまう。……絡んだ人間からしたら堪つたもんじや無いがね。

EP Extra Start

一年目のクリスマス＆冬休みが終わり3学期が始まつて数日の事、例によつて俺は授業には出ず、サボリに勤しんでいた。

「毎日毎日、同じ事の繰り返し……」

「あ、な～にを言つてんだ？」

「いや、別に」

冷たい空氣に晒されるながらのお昼寝が出来無いので、進路相談室にて一向に傷付かない自分の身体にうんざりしつつもボケーッとしていた。

同じ様にボケーッとしている“先生”も暇そつだ。

「先生って、仕事しないインスか？」

「やうない（…………）じや無くって、仕事が無い（…………）ん
だよ」

仮にも聖職者の一端を担つてゐるつてのこ、呑気に緑茶をすすりながらヤンキー漫画を読んでいる先生。

「うこのつを“給料泥棒”つて言つただらうか。

「何でまた……」

「ほり、アレだアレ。お前と同じクラスに居る子で良くオマーに絡
む子、え～つと何だつたつけ？あの喋り方が面白こ子」

「ん、あ～黒神さん？」

喋り方が変で絡んで来る子つてのはあの子位だからな。

「やうやうやう、あの金持やう娘。あの子が俺の代わりにやつてくれてるお陰で、今まで以上に仕事が無くなつてあ～あ～」

「なるへン」

安心院さんが消え去った後から、元々その氣があつたからね黒神さんつたら。

しかし、安心院さんが消えたあの日に偶然生徒会室を通り掛かつた時に、球磨川君が黒神さんに半殺しにされてる現場を見た時はまあ凄かつたね。何が凄いかつてお前……その現場の室内だけ、廃屋みたいにボロボロになつてて、とつくな意識が飛んでた球磨川君にマウント取つてぶつぶつと何か言いながら殴り続ける絵を見た時はもう、ね？そのまま横で安心院さんは顔が消えた状態で横たわつてたし。

まあ、アレ多分偽物だけど。

話しは戻るが、あんなリアル殺人現場を見たらそらアソタ、いくらあの球磨川君と黒神さんに絡みたくは無いとは言え、止めないとと思つて思わず止めたけどさ、その後がまた傑作だよね。

何が傑作かつて？ その後いつの間にか意識を取り戻した球磨川君が泣きながら言つたのがさ。

「『僕が悪かつた』『許してめだかちゃん』『一度と人の心は傷付けない』『一度と君達の前に姿を現さない』『だから僕に罪を償う機会をくれ』」

とまあ、なんの法則か知らないケド白っぽい髪になつてた黒神さんに言う球磨川君、いや嘘つしょ？ と思いながら俺はただ黙つて見ていた。

それから一言三口程あつて、遂に許してしまつた黒神さん、そしてボロボロになつた身体で学校から去つていく球磨川君。魂の抜けた様にその場にへたり込む黒神さん。

んで八割空氣となつていた俺に、いつの間にか消えていた安心院さ

ん。

「……」

「……」

空気がスッ、ゴク重い。

このままほつたらかしにして逃げても良いのだが、それはそれで罪悪感的な何かがある。

「あ～」

「……」

取り敢えず声を出してはみたが無反応。

「布団が吹っ飛んだ」

「……」

お次は小寒いギャグを言つたがやはり反応が無い。

「あの～」

「……？」

「おお？ 今度はコッチ見たけど、ヤツパリ魂が抜けた感のある表情だな。」

「なんだ？」

「いや」

「マズッた、反応して貰つたは良いが、何話して良いのかが分からん。第一この子とは仲が良く無いし……ええい！ ままよ！！」

「ええっと、部外者だから余り気の利いた言葉は出ないけど、元気出せよ、なつ？ キミにゃあ友達が居るんだしや」

「……」

「じゃあ、まあ頑張つてくれ」

結局気の利いた言葉もクソも無くその場を逃げる様にして立ち去った。

こんなだったら止めなけりや あ良かつたよ、と遅すぎる後悔をしながら。

まあ、そんな事があつて約半年以上が経過したが、今では何事も無く過ごしている黒神さん。

だけど、俺からしたらその後が最悪だった。

「フ～ 玉露最高」

「つーかオメーよ? 授業出なくて良いのか? 逢えてツツ」「まなかつたけどよ～」

玉露に舌鼓をうつてゐる俺に言つ先生。
漫画面に視線を集中させながらだが。

「いいよあんなの。出た所でアウター感が半端無いし」

「ふ～ん?」

「 気の無い返事をする先生。いやいやアンタが、仮にも教師なんだからやつは授業に出る様に説得した方がいいんじゃ無いの？ いや、して貰つても困るがね。」

「 まあ、此処に来て貰つのは、俺の暇潰しとしては良いんだけどもさ、オメーが此処でサボつてると、その金持ちつ娘が来るから困るんだよね」

「 なんで？」

「 何か苦手なんだよね、あの子」

「 ふ～ん？」

先生に苦手なタイプとか居るんかい、結構意外だなと思ひながら玉露を啜つてると半ば忘れ去られてる進路相談室の扉が開かれる。この扉を開ける人物は限られていて、先生と俺そして……。俺と先生は若干引き攣つた顔をしながらその開けられた扉を見ると、そこには黒神さんが凛として突つ立つてた。
噂をすれば何とやら……まさにそれだな。

「 やはり此処に居たか霧生同級生。さあ、私と一緒に来て貰つぞ！
あつ、先生はそのまま結構です」

「ほり零、お前の彼女が来たぞ」

肘で俺を突きつつ小声で言つ先生。

「止めてください鳥肌が立つ」

「じゃあ何だ？ 通い妻か？」

「寒気がするから止めやつてんだらつが『コラアー』」

これ以上本氣で言わせ無い為に半ば本氣ガチでネックブリーカーをする

「ぐえつー？ や、止めろ……！ 死ぬ死ぬ……！」

「ハアハア……！」

ワニとマジで絞めたせいか先生の顔色が土氣色に変化してたので、俺は息切れ混じりで解放する。

「ゴホッ！ わ、悪いケド黒神さんや。後でコイツを引っ張つて行くから教室へ戻つてくれないか？」

「……。わかりました。おい霧生同級生、絶対に来るのだぞ?」

「……」

未だに顔色が悪い先生に頷き俺に念を押して相談室から退室する黒神さん。

くつ！ 驄目だな、自分でも解る位に顔が引き攣つてゐる。

「オメーよーそんなにあの金持ちつ娘が嫌いな訳?」

黒神さんがいなくなつた後にお茶のおかわりを用意しながら先生からの一言。

「いや、別に嫌いじゃ無いんだけれども」

「じゃあなんだよ?」

なんだよ……と言われてもな。主人公だから、とか言え無いしなあ。そもそも主人公だからとか関係無いし。

「……。言いたくなけりやあ、言わなくても良いけど、あの子つて

将来絶対美人になるぜ?」

「だからなんだよ

「今之内に仲良くなつとこでも損はしねえって事だよ」

「コイツ、事ある」とにそこ」に結び付けるケド、アンタも嫌いみたい
な事言つてたよな? まあ黒神さんの造りが良いつてのは認めるけ
ど、俺は絶対に「そんな目」では見れない、そもそも趣味じや無い
し。

「好みじや無いんでね。万が一、いや億が一にでも有り得ない」

「じゃあどういったのが好みなワケよ?」

「年上……しかもお姉さんみたいな?」

つて、何で答えちゃつてんだよ俺。

「好きだねえお前も」

「『小学生が大好き!』何て言つよりかは百倍ましだと思わんかね?」

「違ひねえや」

出されたお茶を飲みながら一服する、うむ、美味しいな。

「それ飲んだら授業出るよ? また来られてもアレだし」

「……………わかつてりあ」

結局その後教室行き授業に出る事になったのだがクラスの連中の意外そうな視線を一斉に浴びながらの授業になった。

黒神さんは満足そうに、うむうむと頷いてたけど、そこを無視して寝始めたので再び絡まれる事になつたのは当然の流れだつた。

やはり俺はこの子とは会うううになさそうだね、そりやあ俺も一応大人だから表面上普通に会話なりなんなり出来るが、心の底から笑いながの会話は無理だ。

餓鬼だな俺も……。

終

外：「刺さない蜂に勝利（カチ）は無い」（後書き）

“先生”的前振りが何とかしきり……。

オリジナルキャラ設定（前書き）

先生の設定？

オリジナルキャラ設定

先生（名前不明……というより考えて無い）

年齢：25歳（原作時点で）

身長：180？

体重：81？（若干筋肉質な為）

血液型：AB型

“備考”

主人公が通わされていた中学校にて進路相談員の先生として働いていて、主人公を中学校に通わせた張本人。

生徒に平気仕事押し付けて自分はサボつてばっかりで、主人公の中では「給料泥棒」レツテルが貼らせてる。

軽い性格で、美人を発見したらすぐに声を掛けてナンパをし、その的中率は80%の確率で成功する。（残りの20%は彼氏持ちとかの理由）

その性格のせいで三年間もの間に主人公をチャラ男予備軍へと導いたある意味での師匠なのだが、ナンパな性格の癖に趣味は意外にも釣り。

容姿は一応それなりにカッコイイ（ワイルド系）。

ちなみに、主人公がこの世界に飛ばされてから一番絡んでいる人物で、中学校時代はよく“腐”的”の付く女子から良からぬ噂をされてた

りする程周りから仲の良さを認知されていて、主人公が高校生になつた今でも、主人公の家に転がり込んだり遊び歩いたりする。

その他

喧嘩は滅法強普通の人間……と思いまや主人公の能力についてある程度知つてたり、安心院さんを普通に覚えてたりと何かしら謎の多い人物。

オリジナルキャラ設定（後書き）

名前が……出てこない。

17：「1に氣をつけ2に構え、3・4が無くて5にパイプ椅子ー！」（前書き）

史上最つ悪ー、こ出來の悪い回です。

鋼……いや超合金の心を持つ観者様はよろしければどうぞ。

17：「1に気をつけ2に構え、3・4が無くて5にパイプ椅子！！」

突然だが俺は自分の部屋にいる。
しかもあのアパートの部屋では無く、元の世界に住んでいた自分ち
の部屋だ。

「うーん？ 俺って死んだんだっけ？」

意識がある前の記憶が田茶苦茶になりつつも視界に映る景色を観察
する。机にテレビ、ベッドや本棚……窓から見えるのは約二年ぶり
の景色　　やはり間違いない、否定しようも無い、此処は俺の
部屋でそれが意味することは。

「帰つて、來た？」

何のトリックで帰つて來たのかは分からぬ、だけどこの景色は懐
かしい感覺がする。

帰つてこれた　　その事實を知つた時、俺の中で何かが弾け飛
んだ。

「我が家よ！　私は還つて來たあああ！　ガハハハハハハハ！」

何かのパクリ臭のする台詞と腹の底から込み上げてくる感情を、押
し込む事無く吐き出す。

「ハア、ハア、ハア」

余りに笑い過ぎて体力が大幅に削られたがこいつじけやおれん、マイ
ハニーよすぐに逢いに行くぜ！

「待つてろよ婆ちゃん。すぐこ会つてあ～んな事やこ～んな事を…
…ククク、悪いな爺さん今日の俺は野獣と化すぜー！」

そつこには戦争なのだ！ と意氣込んでこるのは良いのだが現実は
残酷である。

「おこ、起きる」

「グヘヘヘ」

「寝ながら氣持ち悪い声出してんじやねえー。」

「あでつーー？」

「起きたか？」

「え？ あれ？ 此処は何処？ 婆ちゃんはーー？ マイハーーはーー？」

？

「寝ぼけんのか？ 教室に決まつてんだるーが、早く行くぞ

確かに、居間に後ろ向きで突つ立つてた婆ちゃんにサイレント飛び付きをした瞬間に、B2爆撃機並の音と衝撃がしたと思ったら田の前に善吉君が居る、て事はだ。

「夢…………？」

「何の夢だか知らねえが、お前は今の今まで寝てたぞ？ 気持ち悪い笑い方しながらな

淡々と事実の『』開張をする善吉君。

「そんな馬鹿な…………マイハーーに【ページ】する事無く現実世界に戻されてしまった

「何を言つてんだわかんねーけど、最低だなお前」

ドン引き顔をしている善吉君にちょこっと傷付きながらも、夢オチか……どせなら最後まで見せてくれよと、欲望全開な俺だった。

「全く何時まで寝てるんだ。もう放課後だぞ？」

「んあああ……」

どうやら放課後までノンストップで爆睡してたらしくな、軽く呆れた表情をする善吉君を尻目に、俺は呑気に欠伸と共に身体を伸ばす。机に長時間突っ伏してたせいか、「コキコキ」と背中の関節が鳴る。

「フウ……どせなら最後まで夢を見てから起きたかったよ」

「知るかんなもん」

なんだらう善吉君が冷たい、やはりあの夢の内容が寝ながらにして顔に出てたのが問題だったか。

「まじ行くぞ」

「あ？ 何処に？」

「ボケてんのか？ 生徒会室だよ」

「あ～」

「放課後になれば生徒会室に行く」というのがもはや口課となっている。今日は、仕事がなけりゃあせつとと帰つて夢の続きを洒落込みたいな。

「ふわあ……」

善吉君の後ろを欠伸混じりで歩く中、高校生になつてから一・二番目に絡んでるのって善吉君だよなあとか思つ。仕事の為とは言え、律儀に俺を起こしてくれるし一緒に仕事をする回数も多い。

「て、聞いているのか？」

「は？」

「だから、今日めだかちゃんが遅れて来るつて話しだよ」

「え？ ああそつなんだ……」

「どうやら一人で考え込んでいた間、ずっと俺に話しあげてたらしくな。傍から見たら“話しているのにシカトこころる”って絵だったわうね。」

「お前本当に大丈夫か？ 具合でも悪いんじや」

「いや大丈夫。ちょっと考え事してただけだよ」

「考え事つて、さつきの夢と関係あんのか？」

「え？ あー……まあな」

まさか「君の事考えてました」なんて言つて気持ち悪い解釈されたら堪つたもんじや無いしな、『いはテキトー』に言つとくのが無難だ。

「何の夢見てたんだ？ あん時すつげえ危ない奴みたいな顔してた

ぜ？ クラスの奴ら及び教師までが引きまくつてたぞ？

「マジか……。そんなに変態な顔シラだったのか、恥ずかしいな。

「まあある意味、酒池肉林を越えた夢だつたかな

あのタイミングで善吉君が起しきなれば、と思つとかなり悔やま
れる。

「相当スゲエ夢だつたんだな

そう言つて再び前を歩く善吉君。

「それにしてもよお、なんで俺達が最初に入つたつてのに後から入
つていく奴らの方が階級が高いんだろうな？」

「ああ？」

それから、生徒会室に行く間ずっと善吉君の愚痴っぽいのを聞いて
いる。どうやら後から入つてくる奴らの階級が上なのが気に入らな
いらしい。
平和だな……。

「でもお前の場合は微妙に違つんだっけか？」

「いや、俺の場合は緊急事態にならないと意味を成さない役職よ？
それにめだかちゃんが生徒会長やつて緊急事態に陥る事なんて
あると思つ？」

「今の所想像出来ねえな」

「だろ？」

多分その内緊急事態になるとは思つなかつたが、だからって俺が何
かする繪が浮かばないな。
それにも、何でめだか君は俺なんかを取り込んだんだろうなあ
とか思ついたら生徒会室に到着、先にいた善吉君が扉を開けると。

「……あ」

何か固まつてゐる善吉君。一体どうした、デケエ蛾でもいたか？ と
思いながらヒョイと中を覗くと。

「……」

制服を脱いでいる喜界島さんと田代が言い、気の利かない台詞が言え無い俺は。

「露出狂その3ついか？」

全てを台無しにする言葉が思わず口から出てしまった。
後に「キミは、もう少しデリカシーのある言葉を選んだ方がいいよ」と言われるのは別の話しだ。

EP17・Start

「お金！ お金払って！」

喜吉君がボロボロにされてからの喜界島さんの第一声がそれだった。ついでに俺は喜吉君以上にボロられたりする、机の角で殴られたりパイプ椅子で叩きにされたりとか、普通だったら死んでるぜ？

「ば？ 何言つてんだお、前？」

「痛つつつ……鼻血が止まらない」

全身ズタボロの善吉君は呪律まで田茶苦茶になつてゐる、相当殴られたらしいなちよこいつと善吉君に同情してしまつ。ちなみに鼻血が止まらないつてのは決して興奮してゐ訳じやあ無い、鼻を思い切り殴られた為だ。

「アタシの裸見たでしょ？ だからお金払つて！」

「……これだけ人をボロボロにしといて更に金払えつてか？ いい性格してんな、え？」

「裸つてなあ……ブフツ！」

「何ですか？」

思わず吹き出してしまつた俺に反応した喜界島さんが何故か敬語で俺を睨み付ける。

「だつてなあ？」

そんな痛くも痒くも無い睨みを軽く無視しながら視線を善吉君に向けながら話しきを振る。

「俺は言わんぞ？」

んだよ俺が代わりに言えってか？ しょーがない。

「え～っとさあ、取り敢えず何で君の半裸を見たからって金払うワケ？ ここは風俗ですか？ あ、キャバレーでもやつてんスか？ だったらポーラダンスでもやつてくださいよ。え、出来ない？ じやあ金なんか払えまへんなあお嬢ちゃんよ？ 大体ねえ餓鬼の肢体見たからって興奮する程俺は餓えてませんし、もしかしてそう思われてるとか思つちやつてる？ うわあ～お、勘違いちやん&自意識かじょ～！」

ちょっとびりハツチャケながら言つちやつたけど、何とか思いの丈をぶつけてやつたぜ。

「あ、おこ零！ わよつと言つて過ぎがじや」

「あん？ 良いんだよ、ハツキリと言わないといつこつたガキはドンドン付け上がるからね。じやないと近い将来、身体に触れられただけで『この人痴漢ですっ！』とか言つぞ？ 全くこれだからガキは……」

「あ、おいーー！」

何か知らないケド冷や汗混じりで俺を止めようとする毒舌君、何だよ自分だって言いたげな顔だった癖によ。

「なんだよ……！　俺が言わなかつたら善吉がだつて似た様な事言つてた癖によ」

「へ、やつじや無くて…」

「何だよっ！」

「ほ、ホラ」

と言つながら顎で差した場所を見ると、喜界島さんが爆発まで5秒前な状態だった。

「いひ……」

「言つ過ぎだ。泣きそつだぞっ！」

確かに田を潤ませているが……。

「へへ　なんスか、今度は泣いちゃいますか？　泣けば勝てるとか思つちやつてますか？　」めんなさいねえ、俺つて土下座されても何も感じ無いタイプなんですよ、ハイ残念！

更に追撃をしてみた、と言つよつ泣かせたくなつた。

「ば、馬鹿！」

「うわ～ん！..」

おっしゃあー 遂に泣き出したー！ と内心喜んだのもつかの間、なんと喜界島わんは泣きながら近くにあつたパイプ椅子で殴り掛けつて来る。

「あぶなつー？」

「ほり見ろー お前のせいだぞー？」

横ステップでパイプ椅子攻撃を避けつつ善吉君に怒られてしまつ。

「何だこのナメンタル弱すぎつしょー？」

「あんだけボロクソに言われたら誰でもああなるわー。」

確かに自分で言つといてたが「無いわ～」とは思つたが、理性が吹
つ飛んでるお陰か、関係無い善吉君まで攻撃されてる。
仕方ないな。

「アチヨ～！」

ちょこっとヒートな状態で、喜界島さんが振り下ろしあうとしたパイ
プ椅子を蹴り飛ばす。

「あやつー！？」

「今だ、無効化ダイブ！」

そのまま喜界島さんに飛び付いて無力化し汗を拭う、汗なんかかい
ちゃいないケド。

「痛いだけは勘弁だよ」

「あ、危なかつた～」

「……クスン」

アレだな、余計な事なんか言わなければ……よかつた……あの程度じゃ
痛いだけで死ね無いだろ？し、何より掃除が大変そつだぜ。

散らかった生徒会室を片付け終わつた後、俺達はそれぞれ財布を取り出していた。

「ま、ひ、…… 750円」

「わ～い、ありがと～！」

善吉君に渡された750円に田を輝かせる喜界島さん、アレとは言
え安いな。

「ホントに払うのかよ」

「だつて、見たのは事実だし……」

「律儀なこつて。あん？ 何だその手は？」

「霧生クンも、お金……」

「ああ、善吉君だけで満足して忘れて欲しかったが覚えてたか……。

「分かったよ。冷静に考えりゃあ95%俺が悪いし、ゴメンね……つて許しちゃあくれんか」

「い、いえ。あたしもすいません」

「こいつと頭を下げる喜界島わざ、また口調がおかしくなってるな。ペー

「口調

「え?」

「こんな状況で言つのもアレだけビ、やのよながこ口調は止めてくれないか? 背中が痒くなる」

さつきから処か水中運動会が終わった辺りから俺に対する口調がかしい、それが何と無く嫌だ。

「でも……」

「でもモヘチマも無い。止めてくれないなら金は払わんぞ。」

「えつー？ わかりまし わかった、これで良いー？」

「……現金な奴」

金を払わないと言つた瞬間に口調を普通にじやがつたな。

「よしそれでいい。えーっと財布の中身は……チツ、小銭が無い……しじうがねえな、ホレ！」

「えつー？」

財布から諭吉さんを1人取り出して喜界島さんに渡す、対する喜界島さんはビックリ顔だ。

「お前……金額デカク無いか？」

「札しか無かつたし、それに俺も火が点いて余計な事言つちやつたし? これから喜界島さんも一緒に働くのにギスギスした感じは嫌だしね……つてそうしたのは俺だけど、や」

「で、でも……」

「あ? 今になつて何ビビつてゐるんだよ?」

「い、いやもうこつ訳じやあ……」

「だつたらその金は募金でもしてくれ。とにかく、『めんなせこ』

ペこつと頭を下げながら謝罪の言葉を述べる、でもいれつて全部自業自得なんだよな。

「うそ、じゃあ貰つよ……アリガト」

やつ言いながら綺麗に札を折つて蝦蟇口財布に入れる。

「うそ、じゃあ……ビバよ。」

「懲こ」オレに振るなよ」

「つーか阿久根先輩ビリしたよ?..」

「オレが知る訳無いだろ? よ」

「やつややうだ……会話さんの仕事もなあ? こなじだ全部片付け
ねまつたしなあ」

「やつなの?..」

「つよ、やつなの」

手持無沙汰だったので、キヨトンとする喜界島さんの頭をポンポン
と叩く、おー! 髪がサラサラだ。

「かと云つて勝手に帰ると後々面倒な事になるからなあ。とにかく
めだかちゃんが来るまで待機かな」

「だな。じゃあ漫画でも読みよつと」

そう云つて最初から用意してた漫画を机に拡げて読み始める善吉君。

さて、俺は何をしようか。

11

「あ?
どーしたよ喜界島さん」

急に黙りだして、何だ？ でも最初からこんなだつたか？

「あの……頭

「頭？俺の頭に何かくっついてる？」

「でも引つ付いてるのだろうかと思い、自分の髪を隈なく触る。

「そーじや無くて、アタシの頭」

「な？」

「霧生クンの手がアタシの頭に……」

そう言われてフト氣付く、先程からずっと喜界島さんの頭をポンポンと叩いていたんだつたな。

うん、俺の団体が無駄に『カイから、喜界島さんの頭が調度良いポジションなんだよなあ。

「あ～ ワリツ！ ん…… 何か調度良い感じだつたからわあ？」

「こや、べつに良一んだケドれ」

と、冷静に言つてゐつもつなんだりつけど、田線を逸らしてオマケに若干顔が赤い……ああ、でもこれも元からか？ よし、試してみつか？

「もしかして……照れてる？」

「うーー いや、違つ

お？ あからさまに動搖してゐるな？ やつべ、画面へなつておつたつ！

「へえ？」

「な、なに？」

ジーッと喜界島さんを見つめる。
「む、みくみく見ると……。

「喜界島さん！ あ？ 結構カワいいよね」

「はーーー？」

「ぶつーー？」

素つ頼狂な返事をする喜界島さんに吹き出す様なリアクションをする善吉君。

てか聞いてたんかい。

「な、ななな何何つてんだよお前ーーー？」

壊れたじロみたいな口調で俺に迫る善吉君、うようよと面狂い。

「こや善吉君だつてそつ思ひつてしま、実際この子かなつレベル高い
と思つんだけど」

「お、お前、高校に上がつてから随分変わったよな」

「今更だな、まあ中坊の頃は色々あつたんだよ」

実際俺が変わつたのは中一くらいだったかな。

「へ、今はそんな話しじゃ無いんだよ。喜界島さんだよ喜界島さん……つて喜界島さん、茹鰯になつて固まつてらあ

喜界島に元気を戻されたお陰で喜界島さんがフリーズしちまつたよ。

「お~い、戻つてこ~い

ペチペチと頬を軽く叩いてこちらの世界へ意識を還さないと、何時まで経つても話しが進まんぜ。からかい過ぎたのもアレだけじも。

「うう……！ あたしは一体？」

「おお、戻つて來たけど、からかうのは止めとくかな。やつぱーの子、見た通りに免疫がなさずあるわ」

「やつした方が良い。お前、何時か刺されるだ

「はつ、刺殺じや俺は殺^ヤれないな」

「ワロとマジな氣があるから恐ろしい……」

ワロとじや無くて本当なんだナゾね。

刺し傷が短時間で塞がる様は結構ショックキング映像なんだぞ。

「その話しあは置いといて、マジで何しよ?」

「「「「「うへん……」」」

椅子にも座らずに三人で唸つてゐる絵面つてのは中々にシユールだな。
そんな横道に逸れた事を考えていると、勢い良く入口の扉が開いて
誰かが中に入つて来る。

「ハロー霧生君! 暫だつて念話が届いたから飛んで来たよ〜ん!」

何やうすつ惚けた事を言いながら入つて来たのは不知火さんだつた。

「何言つてんの? 気持ち悪いよ」

「うわ～お、いきなりの毒舌せんせーーー。」

「えつ？ ちよひとかしけね？」

「向ひの子、酒でもかひへつたのか？ ちよひと怖いんだが」

「うそ、若干変だな」

「てゆーか何で普通に生徒会室に出入りしてんの？」

確かに喜界島さんとの言つ通りだが、そこには別に突っ込むといひやうが、

「ちょこちょい不知火さんよ、何しに来たんだよ？」

「ん～？ ベッヒ～？ 暇だから遊びに来た……おやおや、これははこれは喜界島選手じゃあ～りませんか！」

「うーーー。」

急に話しを振られたせいか若干顔が引き攣つてゐる喜界島さん。

「あたし不知火、よろしくね～！」

「よ、よろしく……」

引き攣つた顔のまんま挨拶する喜界島さんに対しても不知火さんは「見せたいもんがあるんだ」とか言って例の百合写真のパネルを掲げる。

それを見た喜界島さんが最上級にテンパる様を楽しんでる不知火さんは善吉君のメスが入り、程なくして鎮静化した。

その後漸くめだか君が来たのはいいが、ヤツパリ今日は仕事が無いらしくその日は解散、暇になってしまった。

出来たらあの夢の続きを…………見れる訳無いか。

続く

17：「1に気をつけ2に構え、3・4が無くて5にパイプ椅子！！」（後書き）

フラグじゃ無いからね！？

……多分。

17・5：「お前のカーチャンで～べ～そ～！」ってけなしてるつもつなんだ

18話にいく前の小話的なアレですが、クオリティーは潰れたトマト並に最低です。

我慢強い方はどうぞ。

17・5・「お前のカーチャンで～べ～そ～！」つてけなしつつもつなんだ

結局早めに帰る事になつた俺こと霧生零は、特に面白い事も無く家の前に到着し、ポストの中をチックするが何も無い。

「今日の夕飯何にしようかしら」

階段を登りながらもはや口課と化している夕飯のメニューを考える。あれ程わざと帰るつてキメていたのに……順応つて怖いわ。

「あ～？」

鼻歌交じりで家のドアノブを回すと、鍵が開いていた。行く前に鍵はちゃんと閉めたよな？

「……まさか

その瞬間頭に「空き巣」という単語が浮かんだ俺は、咄嗟に折りたたみ傘を伸ばして武器へと変化させ部屋に突入する。

「御用だ！！」

土足のまま自分の部屋に突入したが。

「お～零！ 先にやつてるぜ～」

そこに居たのはビール缶片手に挨拶する元・恩師だった。

EP18 Start

靴を玄関に置いて、制服から部屋着へと着替えた俺は、田の前で人が買い込んでいたビールやつまみやらを飲み食いする元・恩師に問いただす。

「で？ 何でアンタがいんだよ？」

「あ～？ 何時も通りガツコの仕事も無くて早めにアガつたからオーメンちに泊まりに来た！ お～、このつまみお前が作ったのか？ 中々美味いぞ、褒めてつかわす」

このチンピラ先生の言つた通り、仕事が無くて暇だから俺の家に來たらしい、しかも人が作り置きして置いた食料を貪りながら。

「……ハア。来るなら来るで連絡位してくれよな」

「悪いワリィ、突然思いついた事だつたし、オメーから合鍵貰つたから連絡不要かと思つてさ」

「それでも連絡しろや」

「だから謝つてんじやねえかよ」

「ビール缶片手にエビス顔で言われても説得力のカケラもねえよ」

「アツハハハ！ 違いねえやー！」

豪快に笑い飛ばす辺り、反省のはの字も無いだらうなこのチシンピラ教師は。まあ、慣れた感があるから諦めてるがね。

「とにかくアレだ。お前も飲めよ、なつー！」

「ああ、飲むケドよ。後ろにあるビールの空段ボール3つ分の説明は？」

そう、先生の後ろに無造作に放置されているビールの空段ボールが

気になつてしまつがない。

俺の記憶が正しければ、アレは俺が買い置きしたビールだったと思うんですがね。

「ん、これ？ 昼から家に居て暇だつたんでな、飲んでたらいつの間にかこいつなつてた！」

と、しつこい様だが全く反省していない顔で言われた。

此処までくると逆に清々しくて怒る氣にもならんと思ひながら一本目のビールを開けて飲む。

しかも昼間から来たつて、アンタそりや「仕事が早く終わつたから来た」じゃ無くて「怠いんでサボりました」つてのが正解なんじゃ無いか？

（約1時間後）

作り置きしていた料理はほぼ無くなつてたが、材料はあつたので有り合わせで作つた料理をビールないし焼酎片手に一人で談笑していだ。

「ングング……相変わらずお前の作る料理は美味しいな」

「まぐまぐ……そりどーも」

適当に味付けしたもんが褒められると思って無かったので、ちょっと嬉しい。

「で？ 学校はどうよ、楽しんでるか？」

「ん~……普通かな」

今まで女人の話をしたのに何故か急に学校の話題に変わった。

どーよと聞かれても別に普通な為に面白い回答が出来なかつたがね。 た男の子とかは元気なの？」

「元気なんじやねえの？」

“ソルティードック”を飲みつつ先生の質問に淡々と答える、本人達の体調なんぞ俺が知る訳無い。

「『じゃねえの?』つてお前……皆同じ生徒会じゃねえのかよ」

「あの子等とは“持ちつ持たれず”の関係みたいなもんだからな」

氷が入ったグラスを回しながら答える。

現段階ではあの子等に会わせてはいるが、時が来たらどうなるか分からぬ。「目的の為」とか言って生徒会を抜けるかもしれないし。

「成る程ねえ。相変わらずオメーも大変だねえ、能力だつたかに振り回されてるなんてさ~」

「別に振り回されでは……」

「振り回されてんだろ? その能力^{スキル}とやらのせいで、オメエは簡単には死ね無い……それじゃあ困るんだろ?」

「……」

先生の言つ通りだ。

顔^{ツラ}すら見た事も無く、恐らく何処かで俺を見てほくそ笑んでる神とやらが埋め込んでくれた力のお陰で、元の世界に帰る事が出来ない。それどころか、失敗したら永遠に生かされる羽目になるとか『何処の罰ゲーム?』と泣きたくなる事をいつの間にか強要されて早三年

だ。

しかもタイムオーバーになつた瞬間、完全にこの世界の住人になつてしまつ、そのタイムリミットが約一年半なのだが、不思議と焦りとかの感情が湧いて来ない。“この世界に俺が順応し始めてしまつたのか”それとも“帰れ無くてもいい”と心の何処かで思つてしまつてゐるのか……俺自身にも分からぬ。

「お～い、何シブイ顔して長考タイムに入つてんだ？」

「ん？」

一人で考えていたそぶりをしていた俺に不信に思つた先生が俺の顔を覗き込む様にして俺に話し掛けっていた。

「あー……ぐだらねえ事考えてたわ、悪いな

先生の顔を見ると、能力だとか何だとかを一々眞面目に考へるのが馬鹿らしく思える。

「オレから振つた話しだから別に良いけどよ、まあアレだこの話し止めよう、酒がまずくなるわ」

「それは俺も激しく同意するわ」

それからは俺の能力の話しから、何故か女の子の話にシフトチヒンジした。

しかも、俺が今通ってる学校の女子についてアレコレと、だ。

「で？ オレが紹介した箱庭学園はどうだった？ 言った通り、“猛者”が多いだろ？」

「あの時言つてた猛者って、ソッチの事も含まれてたのね……」

「たりめーよ！ 野郎の話しひ一割程度だよ、で？ ビうだつた？」

そんな興奮した顔して机から身を乗り出すみたいにして聞くくなよな、いい年した大人が。

「まあ、確かにレベルが高いよ。高いんだけど、皆ガードが固いっぽいな」

「へえ～？ 何人か声掛けしたんだ？」

「うん、殆どから当たり障り無い断られ方されたケドね」

一応生徒会の田や風紀委員の田やらを盗んで「おつー・好みだ」つて思つた女の子に声掛けしてはみたが、どれもこれも「何口イツ?」みたいな顔された揚句逃げられるのだ。
脈アリもあつたけどね。

「流石にヒロアート共が通う学校だな」

ちよつぴり割高の酒“山崎25年”をグラスに注ぎながら何処か羨ましそうな声色で話す先生、と思ひきやハツとした様に顔を上げて俺の顔を見る。

「殆ど……て事は何人か脈アリがいたのか?」

「え? まあ……」

しまつた……余計な事言つたじや無かつた。

「マジー?」

興奮した面持ちで言つて来る先生に「お前は中学生か!」と軽く引きつも答えよつとしたが、よくよく考えてみると、確かに脈アリとは言つたが、その人の場合は普段から飄々としてるからよく分からぬいな。

まあ、言つけど。

「ん~と、脈アリかと言えば首を傾げたるや無いんだぞ」

「うとうとー 早く早くー。」

何だこの“親におもひがせを買つて貰えるか貰え無いかの闘け玉きでギリギリ勝ちそつ”みたいな顔は。

「一人いた」

そつとつた瞬間の先生の顔は死ぬ程憎たらしかつたりもした。

「マジかよ……へえ~お前の好みに合つ子がいたんだね?」

「なんだよその言い方」

「だつて一年上好きだつけ? お前の好みつて」

「まあ」

「こればかりは譲れませんね。」

「更に言えば性格やら何やらが一つでも合致しなければ意味が無いとか豪語してたお前が、ねえ？」

なんだる、一矢つぶ先生見てるとムカツとするんですけど。

「ショーガないじゃ無い！ 最初に見た瞬間、俺の中へ直球200？ストレートで入つて来たんだもの！」

机をバンバンと叩きながら半ばヤケクソ気味で言う、あの人は俺が今まで会つた中でも一番田ぐらいに俺のハートに電流走つたからね。……異世界人だけども。

「へえ？ そこまで言わせる子なり一度会つてみたいなあ。ね、一回会わせてよ？」

「やだー。」

「な、なんでー？」

「アンタ絶対に余計な事吐かすから」

100%……いや120%の確率で人の人に余計な事を言いそうだ、主に俺の恥ずかしい過去とか平気でバラしそうだ。
それだけは駄目だ。

「チツ！ まいい、絶対何時か見てやるから」

「仕事しろよ！」

「そんな事より、お前があわてふためく顔見た方がよっぽど面白い
ね、クケケケ！…」

「ホントに最低だなアンタ！？」

悪役顔全開で笑う目の前の元・恩師。

ホントになんてコイツは進路相談員なんてやってんだらうか、永遠
に謎だな、と思いつつ酒を口に含んだ瞬間。

『面白そうな話しだね、僕も混せてよ』

突如俺の背後から声がして。

「うげ！ 重つ！？」

急に背中にGが掛かる。

「安心院さん？ なんだキミも来たんだ？」

そんな俺を余所に、先生は慣れた感じで恐らく俺の背中乗っかかってる安心院さんに話し掛けた。ヤバイ、体勢が体勢だから地味にキツイ。

「久しぶりだね、先生。なんか一人して面白そうな話をしてたから来ちゃった」

そうとは知らずにへラへラした表情で先生と話す安心院さん。ヤバイって、早くどいてくれないとヤバイって！

「オレの家じゃねーからそれは良いんだが、取り敢えず下敷きにしているこの部屋の主の許可を取った方がいいぞ？」

「ぐえー！」

その通りだこの馬鹿野郎！！……野郎じゃ無いか、でも性別が不明な点がある可能性もあるんだよなこの人。

そこは置いといてとにかく早く退けと叫びたかったのだが、潰れた蛙のような言葉しか発せられない。

「え？ あつ「メン」「メン、大丈夫零君？」

対して、某偽りの救世主の肩書きを持つキャラの如く「ん？ 間違つたかな？」みたいな感じで悪びれる様子も無く言ひ安心院さん。一瞬本氣で殺つてやるうかと思つてしまつたのは仕方がないのかもしない。

「あ、謝る暇があったら早く退け 退いてください、苦しい」

真面目に退いて欲しかつたので、俺の中では割りとへりだくつた感じで言ひつと、背中に掛かつてた負荷が無くなり肺に酸素が供給される。だが、それまで呼吸すらままならない状態で急に酸素が供給されたのでむせる。

「げほっ！ げほっ！ アフリカ象並にクツツツツソ重たかつたあ！！ 絶対太つたろアンタ！？」

開口一番にその言葉がマズかつたのか、後頭部に鈍い衝撃と痛みが走る。そう、ひつぱたかれたのだ、安心院さん。

そういう事は気にしないタイプだと思つてた俺の誤算だ。

「零君……そりやねえよ」

先生も呆れ顔だったのが無性に腹が立ったので言い返す。

「無くないから！ 何なのこの人！？ 暫く姿を消してくれたお陰でパラダイス気分だったのをいきなり現れたと思ったら人の背中に乗っかかってきやがつてよお！ しかも重いし、何気に俺を名前で呼んでるし」

安心院さんに指差しながら怒鳴り散らす。

先生も若干ビックリ顔だが更に怒鳴る。

主に住居不法侵入の件についてあらかた言つてやつた。

「ハアハアハア……」

「気は済んだか？」

「若干」

息を調べながら答える。怒鳴りまくつたお陰か、若干スッキリした。

「というのが零の言い分なんだけビ、安心院さんからは何か無い？」

そう先生が聞くと、安心院さんは半笑いの表情を変える事無く言つ。

「半泣きの表情で怒鳴る零君が可愛かったよ」

あ、あれだけ言われて感想がそれかよ！？
しかも謝る気無しですか！？

「ククッ……！ だ、そ、うだが？」

「K i l l Y o u F o r M e ! (頼むから俺の為に死んでくれや！)」

そう言いながら近くにあつたビール瓶で安心院さんに襲い掛けようとしたが、直ぐさま先生に止められた。
先生いわく「勿体ないから殺すな」だと。
一体何が勿体ないだよ。

それからは糺余曲折的な何かがあつて三人……特に俺と先生でギヤースカ騒ぐのだった。

結局安心院さんは、何をしに来たのかが分からずじまいだった。

17・5・「お前のカーチャンで～べ～そ～」つてけなしひつもつなんだ

先生の名前はもはや考へ無くてもよくな? と思ひ始めてまこりました。

18：「ルールと権力と障子は破る為にあるのだ…」（前書き）

あくまでも寒いギャグ97%仕様で「」であります。

てか、話が進むにつれてクオリティーが低下する……。

18：「ルールと襖と障子は破る為にあるのだ！！」

箱庭学園風紀委員会、ルールを破つた生徒を容赦無く取り締まる、通称“学園警察”又は“撃破りの処刑部隊”（主人公が勝手に命名）。

これはその風紀委員会と生徒会と主人公のじょーもない戦いの記録である。

「校一則違反です！！」

登校の時間帯に響く声。彼女の名は鬼瀬針音、風紀委員会の一人である。今日から学園風紀徹底週間とやらで、正門前にて制服を改造したり崩れた着方をしている連中を取り締まつていたりするのだが。

「だつて……」

「なあ？」

「うん、そんな事言われてもなあ？」

言われてる本人達は、余り反省する様子が無かつたりする。

「なんですかその態度は！ 口答えは許しませんよーーー！」

反省の色が無い態度の生徒達に怒鳴る鬼瀬だが、一人の生徒が反論する。

「アンタの言つ通りかもしれないけど、だつたらあいづらはどいなんだ？」

「あいづらあ？」

生徒が指差した所を見ると。

「あーー 頭力チ割れるの如くイテヨーー

「顔色が悪いが大丈夫か？」

「フム、本当に具合が悪そうだな？」

「一体何をしたんだよキニはー

「得もしないのに馬鹿な意地を張つた成れの果てって所かな……」

「意地？」

「うん、良い子の皆は知らない方が良いかもね……」

（（（一體何が……？）））

「メカニミを抑えながら何故かジャージ姿で歩く主人公に次々と質問をし更に言えば、個性的な制服の着方をする生徒会の面々だった。それを見て口から魂が引っこ抜けそうな顔をする鬼瀬。

その隙に逃げる校則違反者達。

そしてこれが、長い様で短い戦いへの狼煙となる事になるとはこの時は思いもしなかった。

EP18・Start

頭がイテエ……。昨日アレから調子こいて飲み過ぎたのがいけなかつたのか。

てか、なんとか半不死身状態な俺だつてのに風邪やら一日酔いやらにはなるんだよなこ身体……なるだけで致死量には至らないのがネックだがね。あ～あ、俺も学校休めば良かつたなあ、今頃あの一人はグース力寝てるだろうじ。

「大丈夫？ お水飲む？」

ソファでくたばってる俺に水を片手に声を掛けてくれたのは喜界島さん。何でか知らないが、昨日のアレから若干仲良しになれた。

「おー大丈夫」

手渡された水をグビグビと飲む。

「プハア……。アリガト喜界島さん」

お礼を言いつつ、空になつたペットボトルを「ごみ箱にス○ム、ダンクする。

「どーいたしましー」

若干微笑んでる喜界島さんを見ながら、よく此処まで仲良くなれたよなあ……と思つ。 だってそうだろ？ まともに会話したのが昨日で、しかも内容が余り良いものでは無かつたし。

まあ今はそんな事より、この頭痛を何とかしなければね。

「フウ、 じつしてねつじがつてると大分楽だな……首が痛いけど」

ソファの手摺りが固いので首を痛める氣があるが、 颗沢は言え無い。

「零よ、 そんなに辛ければ早退を許可するが？」

何時に無く優しいめだか君。

だけど『単なる「口酔いなんですよ』なんて言つたら怒られるなこ
れ。

もしかしたら気付いてる上で言つてくれてるのかも知れないがね。

「大丈夫心配してくれてサンキューな……。 だけど余り動きたく無
いつてのが本音なんだよね、 帰るのさえ億劫なもんでも」

「そうか……なら今日だけ特別に寝ていろのを許可してやるつ

「ああ、 助かるぜ」

めだか君から許可も頂いた事だし、 お葉葉に甘えて睡眠モードに移
行……する前に。

「猫美さん暇かなあ？」

「急になんだ？」

猫美さんの名前に反応する阿久根君。

「うん、暇なら生徒会室に来て貰つてひざ枕して貰おうかなって」

弱気な状態だと人肌恋しいってのは結構マジだという事が、今分かつたので猫美さんに会いたくてしょーがない。
だが、そんな俺の寂しい気持ちを呆れ顔で見てくる善吉君と阿久根君。

「あのなあ、んな事で一々先輩を呼び出すなよなあ？」

「失礼な、俺はこの上なく真剣なんだがね」

んな事つて、本当に失礼だぞ善吉君。

「それに猫美さんなら今日いないぞ？」

「え、何ですか！？」

思わず飛び起きてしまったのはしようがないと思つ。てか何でキミが知つてんだ？ 事と次第によつては撲殺刑に……。

「さつき正門から帰つて行くのが見えた」

おまいが、納得しました。

それならしじょうがないこの固い枕で我慢……いや待て、猫美さんが無理なら他の人に頼めば良くな？ つて事で生徒会のメンバーを眺めてから、枕代わりを探してみたのだが5秒弱で「ありません」という結論に達したので首を痛めるのを覚悟で睡眠モードに入ったのは良いが、わずか30分で現実世界に引き戻されたのだった。

「一体！ 何を考えているのですか、あなたがたは……」

キーキーと猿みたいな声のお陰で、折角寝付いたと思った矢先に起こされてしまい何事かとソファ身を起こす。

「ウルセエなあ

「あ、霧生クン起きたんだ？」

何故かソファの隣でそろばんを弾いていた喜界島さんが俺の顔を覗く。

辺りを見渡すと見られない女子生徒が一人、涼しい顔して紅茶を飲んでいるめだか君に机をバンバン叩きながらにやら怒鳴つてゐる。

「あー喜界島さん? 一体全体何事?」

今起きてる状況が全く掴め無いので喜界島さんにヘルプをかける。

「実は……」

喜界島さんの説明に耳を傾ける。

説明によると、風紀委員に所属している鬼瀬とかいうちびっこが俺達……いやめだか君と阿久根君と善吉君の制服の着用が校則違反とかて物申しに来たとか。

「まずは人吉善吉君! どうして制服の下にジャージを着ているのですか! まさかオシャレのつもりじゃありませんよね! ? 次に阿久根高貴さん! 貴方が例えエルヴィス? プレスリーのファンだとしてもその大胆さはありませんから! 」

「いやその……そろそろ時代が俺に追いついて来たかなと」

「真正面から言われた……」

制服の下にジャージを着込むのがどうやら馴染い、しかもオシヤレじゃ無いとまで言われるが少なく共俺は良いと思つてるから安心しろ喜界島。

てか、阿久根君に至つては疑問では無くもはや否定だ。

「それと……！」

そつ言いながらソファに足を組んで座つてゐる俺とその隣に座つて二人のやり取りを眺めていた喜界島さん^{テメ}に矛先が向く。

「あ？」

「何？」

怒りで興奮した様子で睨みつけてくるちびっ子……もとい鬼瀬さん。対して喜界島さんは真逆と言つて良いほどの無表情で聞き返し俺はといえば、自分で勝手に煎れた緑茶を啜りながら何時もの癖で睨み返す。

「な～にを『自分は関係無い』って顔してるんですか！」　喜界島もがなさん、そして史上最悪超問題児である霧生零君……」

ツカツカとこちらに歩み寄りながら怒涛のワッショウを繰り出す鬼瀬さん。

「あたし関係ないよね？　制服改造なんてしてないし、スカートの丈だつて普通だし」

「右に同じ、俺も普通に着ているつもりなんだが？」

着崩した制服の着方は中学生で卒業したし。

「ほほ～、ならこれでも同じ事が言えますかー？」

そう言って手錠を手に嵌めてメリケン代わりとした拳をを振るつと喜界島さんの制服が……。

「水着？」

誰が言つたか分からぬが、どうやら喜界島さんは制服の下に水着を着込んでたらしい。

この子も若干変わり者だったのか。

「ほおらりじりんなさい！ 貴女が制服の下に水着を着込んでいる事位に私の私に実装されている“風紀眼”でお見通しなんですよーーー！」

顔が干上がるんじゃねーかと思つ位真つ赤な喜界島さんを余所に、
もの凄いしてやつたり顔の鬼瀬さん。
なんだよ風紀眼つてよ、[写○眼のパクリ]か？

「そして霧生君はー！」

「おつ次は俺か？ と言つてもこゝ最近は立つた事はしちゃいねえ
がね。

「取り敢えず今までの極悪非道つぶりを上から下まで言つても良い
のですがそれは保留にして、まずなんで貴方はジャージ姿なんです
か？」

確かに今の俺の姿はジャージだけど、それについてはちゃんと説明
してやるにしても、何だよ極悪非道つて。

俺そこまで人様に迷惑掛けてないんだけれども。

「いやや、ジャージの格好については制服がねえんですよ

「そんな馬鹿な話しがありますか！」

「嘘だ！」と言わんばかりの表情をしながら俺の足を踏む勢いで接近して来る鬼瀬さん。

なんだろ……全然嬉しいとかって感情が湧いて来ないね。

「いやや……^ギ盗られたんだよ制服」

「えり？ なんですかって？」

しまった、殆ど先生との間にしか伝わらない単語で喋りました。

「だから盗まれたんだよ」

今度はちゃんと盗まれたと説明したら、一瞬惚けた表情になる鬼瀬さん。まあそんな顔になるのも分かるケド事実なんだよ。

「そりだつたのか。知らなかつたぞ、何故言わんのだ？」

「いや、別に言ひ程のもんでも無いかなつてさ」

めだか君の質問を返しつつ緑茶を啜ると「確かに」と阿久根君と善吉君の呟きが聞こえる。

^ギ 盗つた犯人も知ってるしそんなしょうもない事をわざわざ他人に言う程お喋りじやない。

「の割には随分と冷静ですね？ 本当に盗まれたんですか？」

胡散臭わせつな目で俺を見て来る鬼瀬さん。

チツ……。いんなならすぐにでも制服を取り返しどくんだったな。あんにやるわ、次会った時はひざカツクンしてやる。

「まあ、犯人は分かつてるし、その本人いわく「借りただけ」だと言つつもりだろうから別にね。あ、ちなみにジャージ姿については担任にちゃんと許可貰つてるから、アンタラ 風紀委員に取り締まられる言わ
れは無いよ？」

「ぐつ！ そうですか……」

何故だか凄い残念そうな顔をする鬼瀬さん、もしかしてこいつ、適当な理由付けて俺を引っ張るつもりだったのか？ 残念だったね君の思い通りにはならんよ。

「まあ、そういう訳だから無事解決しましたって事でハイさよな……」

…

「なりません……まだ貴方には別の罪がつ……」

チツ！ 流れで帰つて貰おうとしたのによ、もつ君には飽きたから帰つてもらつて構わないんだけど。

そんな俺の考えを尻目に“ぎやあぎやあと俺が入学してから“やらかした”犯罪歴をマシンガンの如くぶつけて来る。

いいや、シカトだシカト。

そんな過去の犯罪歴（風紀的な）なんか言われても正直今更感が否めない俺としては痛くも痒くも無いし、そんな事より別の事が気になるのでその気になる本人に聞いてみましょ。

「鬼瀬さんはそこで適当に言わせれば良いとして、喜界島さんって
“もがな”って名前だつたんだ？」

「良く無い！ 話しを聞いてください……」

阿久根君と善吉君がそんなやり取りを冷や汗混じりで見てるのも俺には関係無いし。

何やら横で眼鏡チビが突つ込んでる気がするがそこはスルーだ。
俺としては喜界島さんのほうが気になるし。

「う、うん……そつだけど言わなかつたつけ？」

「聞いてるんです」

「

「うん。めだかちゃんも“喜界島会計”って呼んでたからね。な
めだかちゃん、そうだったよなー?」

「私の話を」

「

「そりいえばそうだったな」

「確かにそうだったな。めだかさんは○○同級生とか苗字の後に
名前ないし役職を付けて呼ぶからな」

「でしょ?」

「俺は不知火から聞いたから知つてたぞ?」

「ちよつ」

「

「ふうん?」

善吉君と不知火さんつてホントに仲が良いよな。てか不知火さんか

ら聞いたって言つてるケドや、何気にあの子つて時たまスゲエ情報持つて来るけど何ルートなんだろつ。…………つて、違う違う話が逸れてるよ。

「で、話を戻すけど。俺が喜界島さんの名前を今知つたって事でこれから下の名前で呼ばせて貰つよ。ね？ ね？ 喜界島さん許可ちよーだい？」

別に許可なんか取らずとも勝手に呼んじゃえれば良いことは思つのだが、一応取つとかないと呼ばれた本人から嫌な顔されたらしくんじまつ。

「えー？ べ、別に良いけど……」

若干テンパリ氣味の喜界島さんではあったが、無事に許可を貰つた。

「マジ？ サンキュー！ じゃあ改めてよろしくー もがなちゃん

「…」

早速下の名前で呼びつつ右手を差し出し、握手を求める。
仲良くなる位なら別に罪じやないしつてね。

「う、うん。ヨロシク、霧生クン……」

妙なテンションになつてゐる俺に着いて行けないのか、怖ず怖ずとした感じで握手に応じてくれたのは良いが。

「オイオイ、俺のことは零つて呼んでくれたら嬉しいんだけど？」

「こま空氣的に俺の名前で呼ぶべきでしょ？」

「へー？ えっと、その……せ、ゼロ？」

恥ずかしいのか知らないけど、顔を真つ赤にして俺の名前を呼ぶ“もがなちやん”

「なんで疑問形＆片言よ。まあこいつ辺は追々慣れてくれりゃあ良いか」

本当に一々反応が面白くないよな。

「イチヤつくなあーー。」

「おわつーー。」

折角良い雰囲気になつてたのを、六割忘れていた鬼瀬さんのメリケンパンチのせいでぶち壊された。
つーか何処をどう見たらイチャついてる様に見えんだよ！？ しかもつい条件反射的に避けたのは良いが、そのせいで俺の第一のベッドが真つ一つに割れてしまった。

「人の話の腰を折つて尚且つそのへらへらした態度……」

へラへラで……俺はこの上なく真面目だったんだがな。

「それじゃあ、女子に軽々しく声を掛けんなの、軽セーー！」

「軽々しげじやねえよ、誠意持つて声を掛けるんですけど、なあ皆
！」

これじゃあ、まるで俺が「女なら誰でも良い」みたいになってしまつじゃないか！ そう思った俺は、誤解を溶二つと取り敢えず生徒会のメンバーに同意を求めてみたが。

「めだかさん。霧生君は『いのちアレ』で誠意って思つてゐるみたいですよ?」

「フム、そういう事に関しての零は悪いが全く信用ならんからな」

「チャラ男だもんなアイツ。そもそも誠意つて意味知つてるんのか？」

「ちよつと言い過ぎじゃ……」

「オイ……。ひそひそと四人で内緒話をしているつもりだらうが全部聞こえてんだけど。いや、もがなちゃんだけは俺を庇護する感じだったのは嬉しかったよ。

取り敢えず鬼瀬さんのジトーッとした視線を何とかしなけりやと思つた俺の取つた行動は。

「…………な？」

ちよつから間を置いてから鬼瀬さんの肩に軽く手を添えてのサムズだ。

そんな俺の行動に「シメた！」といえ顔をした鬼瀬さんは。

「貴方が軽い性格だつてのは周知の事実みたいですね？　諦めてください」

こんな事を小憎たらしいニヤケ顔でハッキリと言われた。

「チクシヨ～！～！」

そんな事を言われて取つた行動は、半べソかきながらの逃走だった。逃走の途中で「畜生、何時か泣かせてやる！」と鬼瀬さんに対してしうもない復讐心を抱いた瞬間でもあつたりもする。

ちなみに逃走のついでにそのまま帰りました。

18：「ルールと襖と障子は破る為にあるのだ…」（後書き）

主人公はもうキャラ男でした（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9469w/>

The tale of a man with the title of infinity and redo

2011年11月17日19時20分発行